獨逸そらの巨人

ツエッペリン
ユンカース
ゲーリング

中　正夫著

序　文

近世史上に於てドイツの前大戰に於ける敗北と、二十五年間に於ける復興とは、世紀の驚異と云ふべきである。

筆者は、當時聯合國の一員たりし日本が、敗戰國ドイツより押收された航空機材が、日本に到着後陸海軍の手で展觀された時、親しくその機材を參觀して、その當時幼稚であつたわが航空界に比して、驚くべき進步と發達ぶりに感嘆したものであつた。

そして、これらの押收機材を、筆者の勤務する飛行場にも分讓されるに及んで、一つにはドイツが四面楚歌の裡にあつて、物資の窮乏にいかに苦しんだか、代用品の使用にいかに科學的な知能を絞つたかに驚きもし、これ程の國ならば、いかに條約攻めにしても必ずいつか再興するであらうと確信したのであつた。二つには、極めて些細な、取るにたらぬ小部分品まで、根こそぎに、およそ航空力に關する限り一切の物資を沒收した英米の貪婪さに少からず義憤を感じざるを得なかつた。

その後、ドイツ航空工業を海外に移してその絕滅を防いでゐた時代、ドルニエ博士が神戶川崎造船所飛行機工場に招聘されて來朝し、親しくその講義を聞き、またラハマン教授、カーマン教授などが來朝

思ふと、物資の不足に泣言を言ふやうな國民では決して大事業が出來ないと言つてよからう。
ユンカース博士の業績は今日尚ほ炳たるものがあり、特にユンカース飛行機が我國に與へた影響が、いかに我無敵空軍建設に役立つたかを知れば、彼の生涯はひとりドイツのみでなく日本にとつても恩人と云ふべきだ。

支那事變當初に活躍したわが陸軍爆撃機や海軍攻撃機には、ユンカース飛行機の設計を範としたところが少くない。

筆者は、ユンカースF一三型水上機二臺を、その飛行場に常備して、たへず定期航空に使用してゐたことがあつたので、あの頑丈で、しかも巧緻そのものと云つた構造に一倍親しみを覺えるものである。

現在の大戰に活躍してゐるユンカース機は當時の舊式と似てもつかぬ精鋭であるが、どことなく、やはりユンカース博士その人の面影を偲ぶことが出來る。

現在再興したドイツ空軍の威力については、ここに贅言を費すまでもなく、ゲーリングその人の男性的迫力は、近代における英雄と呼ぶに十分であらう。

ここで一言申しておきたいことは、ドイツ空軍の再興再建の主力となつたのは、青年の力によることなのだ。

凡そ、歴史に見れば、大きい國家の推進力、劃期的興隆の源泉力は、すでに青年の力によつてなされ

して、ドイツの根底に流るる航空機の實力は、決して英米の力を以てしても根絶やしできないことを確かに知るに及んで、その再興を何となく心待ちしたものである。

ツエッペリン飛行艇が日本の空に雄姿を現はした數年後、日本でも一時ドイツから飛行船三隻を購入して航空輸送を開始しやうとする目論見で東半球航空株式會社が出來ると云ふ噂が航空界を賑はしたことがあつて、硬式大型航空船について少からず興味を抱き、色々と書物を漁つたことがあつたが、米國のアクロン、メーコン、英國のR一〇一號、日本のN三號、SS一號などの爆破事故を見聞するごとに、最早次にドイツ航空界再興には飛行船の時代であるまいと、朧氣ながら考へたのであつた。

しかし、ツエッペリン伯その人の努力と、生涯の奮闘は、いつ、いかなる場合にも、青年に對して力強き教訓を持つてゐることは事實である。

失望と、疲勞を知らぬ人でなくては文化を進めることは出來ない、大きい事業を完遂し得ない。ツエッペリン伯は、かかる型の人物である。のみならず、伯の麾下から、ドルニエの如き大飛行機設計者が生れてゐることを思ふと、ナチス・ドイツの空軍の再建には、明治中期から、培はれてきたこの航空精神が脈動してゐることを否めないのである。

元來、ドイツは、日本と同樣アルミニユーム原鑛に惠まれぬ國であるに拘らず、ツエッペリンが輕合金の骨格に力を注ぎ、ユンサース博士が、世界で最初に全デュラハミン製飛行機の完成者であることを

挺身すべき任務の重大なることを自覺せねばならない。

この意味で、ドイツ空軍再建の日までツエッペリン、ユンカース、ゲーリングの三傑物の生涯から、何物かを感じとることが、青年に何かの感銘を與へ得るとしたならば、筆者の光榮はこれに過ぐるものがないのである。

二六〇二年五月、米航母二隻撃沈の報を耳にして

著　者

てゐる。大化の改新然り、建武中興然り、明治維新然り、また大東亞戰爭におけるハワイ九軍神、眞珠灣空爆、落下傘神兵、盡く十九、二十の青年が大きい力となつてゐる。

いまや大東亞戰爭は、同時に建設に向つて邁進すべき秋にあつて、その責任は、すべて青年の力に期待されてゐるのである。

ドイツが空軍再建に先立ち、全青少年層に模型飛行機、グライダーを通じて、航空機の科學的研究とその知識の涵養に主力を注いできた。

ナチス青少年隊航空部が、大戰の勇士のクリスチヤンゼン將軍の麾下にあつて、一切をあげて航空知識の養成に努力してきたことが、今次の戰爭勃發と共に祖國に殉ずる忠誠の飛行士、落下傘兵を生み、航空工業の產業力を世界に冠絕するものたらしめたのにある。

我々は、日本民族の優秀性を信じ、日本青年の活力と意氣が決してドイツ青年に劣るものでないことを確信してゐる。しかし不幸にして日本は、ドイツの如き窮乏のどん底まで嘗めてきてゐないばかりか、なまじ前大戰には勝つた側にあつて、英米の自由主義思想や輕薄な左翼思想の浸潤をうけて、その影響が、今尙ほ青年層にも多少殘滓となつて沈澱してゐることを認めざるを得ない。

溫室育ちの坊ちやんには、大事業は出來ない。我々は、ドイツ青年が、窮乏のどん底から立ち上つた例を見て、惠まれた日本青年は、むしろ一倍努力してより以上の世界觀を抱き、大東亞共榮圈の建設に

目次

第三部



ツエッペリン篇

第一篇　軍人生活

第一章　彼の生ひ立ち

ある日の決心

『世界はいま、何事か新らしく呼吸をしやうとしてゐるやうだ』

久しぶりで、住みなれた參謀本部の士官室へ戻つてきた若い士官、フエルヂナンドは、まだ旅裝もとかぬのに、じつと腕ぐみしたまゝ、部屋中を歩き廻つた。

『この小さな一大公國で、眺めてゐた世の中は狹いものだつた。世界中はいま、新らしく生れ變らうとして、苦しんでゐるのだ』

と獨り言を云ひながら、トランクを開けて澤山の地圖や、本や、報告書を、机の上に投げ出した。

大ドイツ聯邦の出來るまだ前、ウエルテンブルグ國の參謀將校フエルヂナンド・ツエッペリン少尉は、貪ぼるやうに、歐洲見學から持つて歸つた資料を漁りはじめたのである。

『おい君、歸る匆々大した勉强だな』

『うん、世界はいま面白くなりかけてゐるぞ、どんな驚くべき事が起るかもしれないと、僕は思ふんだ』

『だつて君、このウエルテンブルグは平和だし、伊太利と佛蘭西の抗爭にもまきこまれず、いゝ暮しぢやないか』

『いや、君の考へは違つてゐるよ。昔のまゝで、小さな領主が、狹い土地に、とぢこもつて安穩とすごしてゆける世の中は、もう過ぎつゝ

だから、僕は歸つてくる匆々、國王陛下に、もう一度アメリカへ渡らせて頂きたいと御願ひをしてあるんだ』

『何だつて、アメリカへ行く。また出掛けるんかね』

『そうだ、あの民族的な、大きい爭ひを實地に見てくることは、ドイツ民族の將來のため、きつと、學問になると思つてゐる』

若いフェルヂナンド少尉の熱情は、どうしても移つてゆく世紀の區切りに立つて、新らしい勢力の湧き上らうとしてゐる世界を、見つめたかつた。

國王にも申請したし、故郷にゐる父にも、その決心を打ちあけた。當時、歐洲の一大公國の士官が、遙々海をこへて、建設途中の新大陸アメリカに行くなどは、餘りにも突飛に近いことなのであつた。

父は驚いて長い手紙をよこした。

『父は僕の計畫について心配してくれてゐる』

その手紙をくりひろげながら、フェルヂナンドは、喰ひ入るやうに讀んで行つた。

この手紙には、大體次のやうなことが書かれてあつた。

――お前は、今迄の經驗から、地球の反對側で、いま新らしい人類の創造が生れ、人間の精神が大きい仕事を生もうとして苦しんでゐる有樣を見やうと云ふんだね。新らしい物を見て自分の教養にしたいと考へてゐるだらうが、しかしアメリカ、驚嘆したり同情したりするだけの値打のない國のやうに思へる。報告によるとこの内亂は國際法を無視してやつてゐる戰爭のやうであるから、お前が見學に選んだアメリカは、決して我々の抱いてゐる懷疑を解決し、精神を高めてくれるとは思はない。

あるんだ。歐洲の有樣を見給へ、お隣の伊太利だつて、墺太利だつて、佛蘭西だつて、ぐんぐん伸びてゆこうとしてゐるぜ』

『や、君は怪しからん事を云ふね。ぢやこのウエルテンブルグ大公國に忠誠を誓へないとでも云ふのかね。外國を見學してきて、外國かぶれをしてゐるやうだね、君は！』

友人たちは、フエルヂナンド少尉の話を攻擊しはじめた。

『いや、そうは云はん。僕は、飽くまで、軍人としてこの大公國に忠誠でありたいと思ふよ。しかし、大ゲルマニア人として、民族的な結合をせねば、やがて歐洲の强力な國々と對抗してゆけなくなるんぢやないか、とこう考へるんだよ』

四

『僕たちには、外國の事情はよく分らんが、ゲルマニア民族の結合と云つたつて、實際は困難なことぢやないかね』

『いや』フエルヂナンドは、數枚の新聞をくりひろげた。『ねえ君、同じアングロ・サクソン民族でありながら、アメリカではいま、盛んに南北戰爭をやつとることを聞いてるだらう』

『うん、新聞でもみたよ』

『そこだ。成る程アメリカつて國は、新らしい國だ。まだ、しつかり、纒つてゐるイギリスの殖民地のやうなものだ。これが、英佛の勢力に操られ、こうやつて戰爭をしてゐるが、これは君どう思ふ』

『どう思ふつて？』

『やがて、新らしいアメリカ合衆國が統一された新國家として生れてくる陣痛だと思ふよ、僕は。

『お、フエルヂナンド君、今日は馬鹿に元氣だね』
『うん、いつか君の敎へてくれた通り、早速手紙を書いたよ。そしたらね。父は、僕が一通り考へ直し、父の心配をよく理解してくれたから、今度は、お前の希望を失望させちやいけないと云つてね、許してくれたよ、行つてくるがいゝつて……』
『そうか。そりやよかつたな』
『うん、その代り、しつかりと見てくるぞ。人類が新らしく立ち上らうとしてゐる有樣をね』
『そうだ。しつかり勉强して來たまへよ』
かくて一八六三年(皇紀二五二三年)四月三十日、靑年將校フエルヂナンド・ツエッペリンは、勇みに勇んで、大西洋をこへ、アメリカへの旅にリヴアプールを出帆した。

彼の生ひ立ち

廣い海は人間の心を洋化する。大西洋を渡りながら、フエルヂナンドは幼かつた日の、樂しいことを一つ一つ思ひ浮べた。

靑々と澄み切つた淸らかな湖、コンスタンツのほとり、遠くスヰス側の山々の姿を湖面に投げかけるボーデン湖に面して、廣い農園を持つ名門ツエッペリン家があつた。

もともと、ツエッペリン家は、北獨逸メクレンブルグの出で、五百年來こゝに城を持つてゐた貴族であるが、諸豪族が興亡する十八世紀の末、ツエッペリン家の二人の兄弟ヨハン・カールと、フエルヂナント・ルドイツヒは、南獨に下つてウエルテンベルグ太公に仕へ、フリードリツヒの伯爵を授けられ、

これは、私の老人としての偏狭な、若いものへ對する無理解から云ふのではなしに、經驗者であり、父であるものとして忠告せねばならぬ義務だと思ふ。

一八六三年三月二十日　　父より

フェルヂナンド青年は、この手紙をよむと非常に動かされた。そして、また深い思ひに沈むのであつた。同僚の士官たちは、

『おい、君は何をそんなに煩悶しとるんだ』

『うむ、例のアメリカ行きの問題なのだ。僕は、いま海の向ふの新らしい國で、民族が新らしく創造されやうとする事情を知りたいんだ。そして僕の一生の目的である戰爭の姿をよく見たいのだ』

『許可が下りないのかね』

『さうぢやない。僕の父は、反對なのだ。そこには何等眞理を發見されまいと云ふのだ』

『それ、君は』

『僕は、しかし、どうあつてもアメリカの姿を見てきたいのだよ。あすこには、まだ純粹な人間の熱情と衝動があるに違ひないし、奴隷解放のために宣言された理想の戰ひがあると思ふのだ。しかし、僕は老いた父まで苦しめて、自分の望みを達したくはないんだよ』

『成る程ね。ぢや、君、もう一度、妹さんにでも君の希望を書いて賴んでみてはどうだね』

『有難う。さうだね。もう一度手紙を書いてみやう』

フェルヂナンドは、熱心に自分の希望と、父の意見とについての感想などを書き送つた。

それから數日後

『君、君』



つたが、このとき受けた宗教的な感化は、彼の青春時代に大きい力となつて現れてきたのである。宗教家にはならなかつたけれども、彼の性格には、宗教的な人生觀と、處生觀を與へたことは否めない。

母の死が、若いフエルヂナンドの悲しみを見かねた彼の父は、生涯獨身でわが子の教育に當つた。

「私は、父の判斷や忠言を尊重して父の滿足しないと思ふことは一切やらなかつた」と後年ツエッペリンは手記に書いてゐる位、父子の情は濃やかであつた。けれども、たゞ父の言ひなりになつてゐる盲從的なものでもなかつた。たえず父と意見を交はし、父と理解し合つて自分の意見をやりとげてゆくのであつた。だから、フエルヂナンドが四十八歳になつて、父が死んだ後も、「もし父がゐたらこんな場合どう云ふだらうか」と一應內省してみるのだつた。

代になつた。

その妻アメリーは、南佛の名門マカレー家の出身で、コンスタンツにキャラコ工場を營む大工業家の令孃であつた。

この品格のある夫妻の間に、一八三八年（皇紀二四九八年）七月八日、フェルヂナントが生れたのであつた。

父フリードリッヒからは思慮と良心と義務の觀念を、母アメリーからは熱情と、美に對する喜びとを享け、廣い農園に出て自然のうちに遊び、詩を作りヴアイオリンを奏し、夢のやうに幸福な少年時代がすぎて行つた。

『そうそう、僕は傳道師にならうとしたんだつたつけ』

船上で、煙霧に霞み去つた歐洲大陸の後方に向ひ

思ひ出の眸を向けながら、甘美な少年時代への追想に耽つた。

九つになつたとき、家庭敎師として迎へた若い副牧師モーゼルの感化を思ひ出した。

「よく叱られたものだ。行儀が惡いとか、學科が出來ないとか云つては罰點をつけられたつけ。だが、あのころ、ほんとうに傳導師になるつもりをしてゐたものだ」

それは、ツエッペリンが十四歳のときであつた。あの快活で優しかつた母が死んだのである。痛みやすい青春の胸は、かぎりなき嘆きの淵に沈んだ。そしてこの悲しみを、嚴格な宗教的態度に持つて行つたので、一途にモーゼル氏の感化をうけて、傳導師にならうと決心したのであつた。

しかし、父の反對で、それは立消えとなつてしま

には堪へられんのだ』

とツエッペリンは、世界を見たい熱望にあふれてゐた。

何度も上官に願ひ出た甲斐があつて、三ヶ年間の外國視察を許可された。

『しめたぞ、生きてゐるこの目で、生きてゐる歴史を、見てこられるのだ！』

喜び勇んで、まづウインへ赴いて強大な墺太利軍隊の大演習を參觀した。皇帝に引見される光榮に浴し、そこからイタリアに出てトリエスト軍港も見たし、ベニスにも行き、更にフランスに入つてマルセイユの港の賑やかさに、始めて絢爛たる文明に驚きの目を見張つた。

そして、光榮と豪華を誇るパリを訪れて、若い胸に一杯、美と藝術の香りを滿喫した。

ナポレオン三世は、快よくツエッペリン少尉を招いて、

「俺は、アレネンベルグ城に居たころの事を思ひ出す、君の御兩親の結婚式に招かれたこともよく覺えてゐるよ」と親しげに語りかけ、普通では容易に見られぬ場所や、寶物なども參觀する便宜を得たのである。

それからベルギーを、イギリスを訪れ、或は軍隊の組織を、或は美術と民俗を、心ゆくまでに見ることが出來た。

見れば見るほど、世界は活氣にみちて動きつゝあつた。廣い廣い世界がそこにあつた。

故郷のウエルテンブルグ公國の狹い世界とは違つて、何か大きく動き出そうとする力があふれてゐた。

折から、遠く大西洋の彼方新大陸アメリカでは、

だから、父の意見でもあり、彼自身の希望でもあつたので、軍人としてその生涯を捧げるべく決心したのである。

一八五三年（皇紀二五一三年）十五歳の彼はスッツトガルト砲工學校に入り、ルドウイヒスブルグ士官學校を卒業し、五ヶ年の學校生活を終つて少尉に任官すると同時にウエルランブルグ第八歩兵聯隊付となつたのである。

學生々活や軍人生活は至極平凡であつた。しかし、若き少尉フエルヂナント・ツエッペリンは、ただ、それ丈けで滿足できなかつた。

チエヴインゲン大學へ行つて、機械工學、無機化學、國民經濟、史學などの講義を片つぱしから聽講して廻つた。

何かしら大きな不安を身の内にそくそくとして感じる。じつとしておれないやうな、世界の鼓動が、はつきりと聞えてくる氣がしてならないのである。

てうど、そのころ（一八五九年）イタリアはフランスとオーストリーとの間に紛爭が起りつゝあつた。歐洲の空氣は何となく不氣味に流れてゐる。

『どうもやり切れない』

ルドウイヒスブルグ参謀本部工兵科に轉任してきた彼は、退窟でたまらなかつた。

『そんなに君、あせることはないよ』友人たちは慰め顔に『この大公國は、伊佛の紛糾に捲き添えを喰はぬやう愼重な方針をとつてゐるんだからね。まあ落ついて暮してゆくことだね』

『さあ、それが僕には堪らないのだよ。世界中が、今にこう、何だか立て直しになるやうな氣がしてならないんだ。その眞只中で、生ぬるく暮してゆくの

も固くならずに心を打ちあけて勤めてくれ」と厚くこの名門の子を信頼したので、彼は非常に喜び、生來の道徳的な眞面目さでよくつとめたのである。

だが殘念なことにはいゝ賢明な國王ではあつたが、カール陛下は、やはり舊封建國の國王としての型から拔け切つてゐなかつた。

殆ど新聞も讀まず、世界の動きにも心をとめない、日本で云へば所謂お大名であつた。しかし若い彼にとつて世界は違つてゐた。

嵐と怒濤の時代――そのころの獨逸聯邦は此の一言につきるものであつた。

新らしい無產勤勞階級が勃然として頭をあげ始め、さらにドイツの統一問題が叫ばれ、歐洲の古い帝國は、いまにも倒れそうに苦悶する――そう言つた時代であつた。

ドイツの青年たちは、

『勞働問題は最も重要な社會の動きだ。いまゝで、力の弱かつた一人一人が結束して協力するのは當然の成りゆきだ』

『理窟としてはそうだ。だがこの運動の價値を生かしてゆくべき健全な指導者がゐるだらうか』

『それは我々青年の責任だよ、今日勞働力は國家の一部門だし指導力だよ』

と口角泡を飛ばして論じ合ふ姿がみられた。然り、この時代はもはや傳統を守つてゆくだけでは過してゆけなくなつてゐる。古い秩序はまさに失はれやうとし、しかし萬事が混沌として將來の見透しのつかない變革の時なのだ。

ツエッペリンは、たゞ昔ながらの傳統と、歷史の

南北戰爭が、新世紀の陣痛であるかの如く繰りひろげられつゝあつた。

國王の侍從

ツエッペリンのアメリカ滯在は、六ケ月餘りであつた。

この間の物語については、小說風に面白く書くことは必要があるまいと思ふ。初代大統領リンカーンに會見した後、リー將軍の麾下に加つて、騎兵斥候に出て、砲火を浴び、危險を冒して行動した物語などが傳へられてゐる。

だが、そんな小說めいた事柄は書かなくてもよからう。あれほど熱望し期待をかけてゐた南北戰爭の戰場で、ツエッペリンが何を獲てきたかを知れば、それでよいのだ。

「社會の動きを常に正しく見て、政治の力を知ることが出來た」のである。

だから、この時代の彼が、南北戰爭の終つた後、セントポールへ行つて初めて偵察用の氣球に乘つて空へ昇つた經驗も、決して後年飛行船を發明する動機でも何でもないのである。

彼は、もはや軍人として以外の人生は、考へてゐなかつた。

そこで南北戰爭の終つた年の十二月、歸國して元の聯隊付になると、ひたすらに軍務に勵んだ。

それから二年後、二十七歲の若い中尉は、突然、ウエルテンベルグ國王カール陛下の侍從武官に任ぜられる光榮に浴した。

國王は、若いツエッペリンに、

「わしは父親が子供に對するやうに話すから、お前



しい苦闘をつゞけた。

そのうちに、遂にプロシアは、オーストリーと戰端を開くに至り、北方ドイツの大部分はビスマルクの陣營に馳せた。

ウエルテンブルグ國は、オーストリーの味方してプロシアと戰線に見え、ツエッペリンは大尉として野戰本部附となつて出征した。

しかし、戰爭の結果は慘憺たるものであつた。オーストリーにしてすら、一ヶ月半でプロシアの軍門に降つたのであるから、ウエルテンブルグ軍は到るところに慘敗を喫した。

しかも、本部の指揮はなつてなかつた。

ツエッペリンは一騎兵として勇敢にも雨飛する彈丸の下をくぐつて渡河して敵前に奮闘したが、その甲斐もなく友軍は敗退し或は退却し去つた。

沈澱した宮廷で人形のやうな侍從生活をするには、餘りに若かつた。

とりわけ、社會問題にも、政治問題にも、一つの理想を抱いてゐる彼は、古い傳統の殼を熱情に破らねば納らない衝動に驅られる。

ツエッペリンの仕へてゐるウエルテンブルグ太公王國をはじめ三十九の聯邦が、數百年來割據して、この聯邦をオーストリヤが主宰者となつてゐた。

この時に擡頭してきたプロシヤには、ビスマルクが、所謂「鐵と血」を以て三十九の聯邦をまとめて一大ドイツに統一しやうとしてゐたのだ。

こうなつてくると、プロシヤと、オーストリアはどうしても衝突を免れない。

「ビスマルクは横暴だ、彼はドイツ聯邦をわが手に併合しやうとする野心家だ」そのやうな考へが多くの聯邦の間に擴がつてゐた。

『いや、そうでない。ビスマルクは、ドイツを統一して强力な國家としてフランスを打倒しやうとする傑物だ』

一方ではこのやうなビスマルク黨もあつた。嵐と怒濤の時代――ドイツ聯邦の上を吹き荒んでゐたのである。

『正直に云へば、私は、このやうな新らしい時代には、全體的に物事を見て、歷史の全過程を觀察して、永遠の法則を求めねばならぬ』ツエッペリンは苦慮した。『我々は大ドイツ人であらねばならないし、また全ドイツの理想を築いてゆかねばならない』とビスマルクの持つ理念には贊成してゐた。しかし『自分の生國として、また國王を愛する點から云へば聯邦分立主義をとりたい』と二つの相剋する惱みに激

りたいと云ふ希望と努力とは尙失なつてゐない。ただ此處ではもう何事も出來ないのだ』と、かぎりない失望を抱いて宮廷を去つた。

時に一八六八年三月十四日だつた。

そこで、乞ふてプロシア軍を參觀するため伯林へ赴くことを志願し、許されたので四月の初めに、ベルリンへ赴いた。

見るもの、聞くもの、そこには新らしく生れやうとする力强い呼吸があつた。

『何と云ふ小さな考へに囚れてゐたのだらう。故國の人々は、小さな古い殼に閉ぢこもつて、一體何を騷いでゐるのだ、もうそんな時代ぢやないのだ！』

第二章 練られゆく人格

普佛戰爭

大きな祖國愛、大ドイツ國家を形作るために、今は個人を犧牲にして、大きい民族の結合に溶けこまねばならないのだ。

ツエッペリンは、故鄕にあつては、ビスマルクの遣り方に反對し、聯邦分立主義者であつたが、ベルリンへ來てみると、世界の大勢は、もう眼前に、はつきりとして事實となつて大ドイツの誕生の姿が浮び上りつゝあつた。

『どうしても、ビスマルクの說く大ドイツ統一を一日も早く實現せねば、ドイツ國民は不幸である』

と熱心な、統一論者に變つたツエッペリンは、六

『この敗北は決して、わがウエルテンブルグ國の軍備が弱かつたのぢやない。移りつゝある世界の新らしい動きに反抗したのが間違ひだつたのだ』

とツエッペリンは、ビスマルクの政策に心を傾けて行つた。まだビスマルクの眞意を理解せぬ南獨諸邦を說き、ビスマルクと普佛戰爭の場合その傘下に馳せ參じやうと密約を結ばうとつとめた。

ツエッペリンは、國王の侍從だつたので、まづ、國内は强化するため徵兵制度を敷き、北ドイツの聯盟に連絡して、大ドイツ主義に向つて國策を向けやうとした。

けれども、宮廷には、まだまだ、過去の夢から醒め切らない昔ながらの宮臣が多く、中にはこの混亂に乘じて勢力を張らうとする策士や謀臣も少くなかつた。

その上、肝心の國王は世界の大勢に暗く、新らしい改革を逡巡してゐる。

『こんな事ではいけない。』三十歲の若さと、正義觀は、國王陛下に敢て直諫を申し上げずにおられなかつた。

『陛下自ら御所信を斷行遊ばされるか、大臣を更迭せられねば、我國の地位は必ずや危殆に瀕しませう』

と申し上げた。

だが、遂に國王の性格は、この若いツエッペリンの持つ世界觀と相容れないものがあつた。

二三日の後、ツエッペリンに對して「參謀本部技術部付ヲ命ズ」と云ふ冷やかな辭令が交付された。

『いつか、私の考へが正しかつたことを國王陛下も御悟りになるだらう。しかし私は、有用な人間にな

い世界の動きを十分觀察し、王子の師傅たるにふさわしい自らの性格を陶冶して、一八六九年の夏、故郷へ歸つてきた。

このとき、彼は、リフラントのアルトシユワネンブルグ家の男爵令孃イサベラ・フオン・ウオルフ孃と結婚したのである。

たまたま、その翌年七月、遂に普佛戰爭が勃發し、ツエッペリンは勇躍して出征した。

『今こそ軍人として祖國に殉ずる秋だ。もう、ウエルテンブルグもプロシアもない。ドイツ民族が、一緒になつて外敵を粉碎せねばならない』と決心して、佛蘭西軍に眞向から當つて行つた。

この普佛戰爭には、ツエッペリンの勇猛さを物語る殊勳が數々殘されてゐる。

開戰匆々の七月二十三日シルレンホフへ向つて偵察騎行に出かけた。

彼は僅か士官五名、兵七名をつれて、翌朝早く、マクマホン部隊の動靜をさぐるため敵を蹴散らして深く侵入し、敵の騎兵斥候を發見した。

彼は、巧みに道路を避けて、部落を拔け敵中深くシルレンホフまで偵察したのである。

『敵だッ』

氣のついたときは、已に優勢な敵の包圍下にあつたが、激しい交戰の末、馬を飛ばして突破し、二十六日の夕方辛じて歸隊したのである。戰友を盡く失つて、たゞ獨り歸つてきたが、彼の齎らした偵察は有益なものであり、彼の勇敢さは、フランスの國民學校教科書にまで書き殘されてゐるのである。

かくして普佛戰爭は、五ヶ月にわたるパリ包圍戰となり、つづいてナポレオン三世の降伏となつて輝

ヶ月の滯在期間中に、軍事的にも、政治的にも、學ぶところが多かつたので、原隊復歸を好まなかつた。

ちようど、ベルリンには、ウエルテンブルグ國王の王子ウイルヘルム殿下が遊學してゐたので、國王は、ツエッペリンをこの王世子の世話をしてくれと依賴したのである。

ところが、この王子と云ふのが仲々難物だつた。世紀末的な、虛無思想に囚はれてゐて、故國の煩はしい政治から逃避してゐる無氣力な青年だつた。

ツエッペリンは、王子に會見してみると、

『僕は生れただけで、他人を支配する權利はないと思ふんだよ。王位などと云ふ疑はしい榮譽を避けたいんだ』

と語つた。

『殿下は、御自分で努力せられて、支配するだけの御資格を得らるべきですぞ』

『そんな面倒な努力なんて眞平だよ』

『いえ、そうでありません。殿下のやうに善良な御性格と、惠まれた健康を持つていらつしやる青年がそのやうな無氣力な、懷疑的な事を御考へになるのはよろしくありません。父陛下も大變御心配になつておられまする』と、何度となく、活動的で、精力的で、そして、いつも有用な人間たらうと努力して已まぬツエッペリンの全性格を傾けて忠告したのである。

この蒼白い思想の持ち主である、ハムレット型の王子を、ツエッペリンの强靱な意志の力と、活動的な義務觀念とは、遂に、性格を一變させ、國王になることを承諾するやうになつた。

かくてツエッペリンは、ベルリンにおける新らし

るのを見ると、後で、そつと士官を呼んで、――
『君、君たち士官は、國家と同胞のために身命をすてうる立派な人間だ。だから、兵士が君たちの前でおどおどするやうな事があつては、それは決して兵の教育が立派にゆけておると思へないからね』
と諭したものである。
それで、部下はツエッペリンを慕ひ、彼は、軍の教練も、任務も、至極愉快にやつてゆけた。
『僕はいま、とても幸福なんだ。だのに、僕は、いつも孤獨で、自分の無力を沁々感ぜずにおれない』
と親しい同僚によく告白してゐた。
『そりや君、あまり物事を理想的に考へすぎるからなんだよ』
『だつて君、今年(一八七一年)の四月に制定されたドイツ帝國憲法を見たまへ。どうも僕は、これが全國民の自覺から來たものぢやなくて、少數の政治家の手で、作り上げたやうな氣がするよ』
と、發布された憲法は、二十五聯邦の代表者で組織される議會と、一般選擧による帝國議會があり、一兵徴兵制の陸海軍を皇帝の直屬とし、内治は各聯邦委任とし、バイエルンと、ウエルランブルグだけは、特別軍制を有し、その他、國税、郵便、鐵道、通信などを統一した内容について、大ドイツとしての、躍進ぶりは認められるが、ツエッペリンには、どこか物足りぬやうな氣がしてならなかつた。
『ビスマルク一人の政治と、軍隊の力だけでドイツが出來上つてゐるやうに見えるんだよ。どうもまだ國民が全體となつて、國民の意志、努力を力強く結びつける熱がないやうだ』
『そりやツエッペリン君、そう急速には行かぬよ、

しくプロシヤ軍の勝利に歸した。

この直前、一八七一年（皇紀二五三一年）一月十八日、プロシア王、ウイルヘルム一世は、ヴエルサイユ宮殿で、ドイツ皇帝即位を宣言し、こゝに大ドイツ帝國は成立したのであつた。

しかしながら、この統一は、決して全聯邦を圓滿にまとめたものではなかつた。プロシアの武力と、權力によつて、統一されたところに、いろいろ不平もあれば、不滿も生じた。

ツエッペリンは、

『なるほど、小民族國には、夫々いろんな不平もあるだらう。だが今は、すべての聯邦が純粹なドイツ人として、大ドイツ全體を完成するために、最善を盡さねばならないのである』と熱心に説いた。

けれども彼の説くところは、餘り理想主義にすぎるものであつた故に、聯邦分立主義者からは、「實際に即せぬ政治家」と冷笑され、またプロシヤ政府の高官からは、夢のやうな理想家と呼ばれた。

『人が何と云つたつてよい。僕は、自分の信ずる通りやつてゆくのだ。まづ軍人としての本分を盡すことだ』

と、パリ開城後、ウエルテンブルグ軍が凱旋して參謀本部附を命ぜられるや、自ら乞ふて、新領土アルサス・ロートリンゲンの首府ストラスブルグ駐屯軍に志願した。

即ち、シユレスウイヒ・ホルスタイン槍騎兵第十五聯隊第五中隊長として、毎日馬を野外に飛ばして兵と共に操練し、武器の改良や、装備の改善に熱心さをこめて勵んだ。

部下の士官が、荒つぽつく兵士を怒鳴りつけてゐ

獨逸の隆盛の土臺を築く人間のやうに思へる。

ツエッペリンの政治的興味はいよいよ高められて行つた。

そこへ、故國から、ウルム第二十七騎兵旅團長任命の報がきたので、

『ウルムと云へば三年も暮して來たところだ、もとの軍人生活に歸れるぞ』

と喜んで、旅裝をとゝのへにかかつた。ところが折も折、ベルリン駐在のウエルテンベルグ公使のパウル・ブライデンフエルト氏が逝去したのであつた。

『公使の後任のあるまで、歸任を見合せよ』

との訓令がきて、その翌年一八八七年（皇紀二五四七年）更に使がきた。

『國王は貴方の政治的手腕を御認めになり、正式に公使にとの御内命ですが――』

『御信任は有難いが、どうも三十年この方、つづけてきた軍人生活と別れたくないのでね』

『御受け願へませんのですか』

『では、こうして下さい。もし戰爭が起つたら、いつでも軍人生活に戻ると云ふ條件付でお受けしたいと思ひます、どうか左樣御つたへ下さい』

と答へた。

こうして二年間は、平穩な公使生活をつづけ、その間にツエッペリンの人格はますます圓滿なものに陶冶されて行つたのは申すまでもない。

かくて一八九〇年一月十二日、正式に退官して、久々に歸國し再び軍人生活に歸ることになつた。理想主義者で、しかも武人としての彼は、いよいよ腕を振つて師團長になる日の期待に胸を躍らせなが

すべての建設はこれからだよ』
『そう、だから僕は、もう少し政治的に働いてみたいと考へてゐる』
と、しみじみ語るのであつた。
けれども、ツエッペリンは、決して急進的な極端家ではない。どちらかと云へば、保守的で、愼重で、思慮深かつたのであるが、彼は、自分の信じたことに對しては飽くまで、確信を以て實踐に移さねばおかなかつた。
『どうも奴は時々穩やかならぬ言葉を吐くよ、險呑な男だ』
と俗つぽい官吏には煙たがるものも少くない。しかし、國王を始め、大臣のなかでも二三は、彼に信頼を置いてゐたので、特別軍制を布いてゐるウエルテンブルグ軍を代表してベルリンに公使館を設けるや、彼は選まれてその重任についた。
『成る程ベルリルは、いま歐洲の動きの中心だ。大戰時代に來たときと何たる違ひだらう』
と、驚きの目を見張らずにおれなかつた。彼の位置が上つてゐた斗りでない。社交も、軍事も、政治も一切が、ベルリンを中心として動いてゐた。
敗れたフランスでは、プーランジュ將軍の復讐運動が行はれ、ロシアと接近しやうと暗躍する。それに對して、ビスマルクは縱横無盡の腕を振つて、歐洲の外交界を慴伏せしめつつあつたのだ。

大ドイツ主義

『ビスマルクと云ふ男は、大したものだ』
とかく批判のあつたビスマルクのやり口を、ベルリンにゐて、具さに觀察すると、どうもこの男こそ、

『ツエッペリンの指揮ぶりは確かなものだ。次は師團長になるぞ』

參觀してゐたヘーゼラー將軍やホイドウック將軍は、眞面目で熱のこもつたツエッペリンの指揮、作戰に舌を捲いた。

『全くだ、あのやうな男がならなくて、誰が師團長になるのだ』

と、ツエッペリンをほめた。

が、演習が終つて、クライスト騎兵總監の講評は、全く反對だつた。拙劣を極めるツエッペリンの指揮は師團長たる資格なしと斷じたのである。

『何と云ふことだ。何處が惡いのだ』

ツエッペリンは心外でならなかつた。

『いや、君の軍事的才能については、疑ふところがないと思ふよ』ホイトウック將軍は、慰め顏で『君はベルリンの上層階級に何か反感を持たれてやしないかな』

『さうですね。そう云へば、いつかの上申書が祟つてゐるかもしれません』

『きつと、そうだ。君は餘り理想家で、徑行直情だからね。世の中は難かしいものだよ』

『或はそうかも知れません、しかし私は決して聯邦主義者ぢやないのです。むしろ大ドイツの完成を誰よりも熱心に願つてゐるものですが、ただその遣り方についての考へ方が違ふんですね』

『そうとも云へる。まあ、兎角命令を待つことだ』

その命令は悲しむべき、免官の發令であつた。十一月十五日、ここにツエッペリンの軍人生活は終つた。

こへて十二月二十九日、新らしい一八九一年を目

『何たる事だ、今どきに聯邦主義思想は呆れたものだ』

と怒鳴つた。

この印象が、やがてツエッペリンの軍人としての生命に致命傷を與へるもととなつたのである。

軍職を去る

三月になつて、待ちこがれたザールブルグ第三十騎兵旅團長に任命されたツエッペリンは、喜び勇んで軍務にはげんだ。

『今年の秋の大演習は、カイゼル陛下の御前で、しつかりやつてみせよう』

と、熱心な操練をつづけた。

時はきた。十一月二十三日、第一日、第二日と演習はうまく運んで行つた。

ら、尚暫くベルリンに滯在してゐた。

この機會を利用して、彼は、故國にとつて重大な軍政問題の一つを解決しやうと思つて、個人の資格で、皇帝に對して一つの上申書を提出した。

それは、

「プロシアの監督將軍がウエルテンブルグ軍隊士官の任免移動の權を握つてゐることは不合理である。かくては國王はただの批准者たるに止まり、兩國の融和を害するものである」との改革案であつた。

ツエッペリンの理想から云へば、これは當然のことであつたが、この上申書を受けたプロシアの高官連は苦い顔をした。

まして、ビスマルクを退け、ドイツ二代目の皇帝として親政に乘り出したばかりのカイゼルは、見る見る癇癖の强い額に太い靜脈を浮べて、

第二篇　飛行船の發明

第一章　苦闘の十年

新らしき道へ

われわれにとつて、フエルヂナンド・フオン・ツエッペリンの生涯を語るとしたら、むしろ彼の軍人以後の生活でなければならぬ。

一生を捧げて、軍人としての道を歩んできた彼にとつて、この献身の道が塞されたことは、精神的の死であつた。

『閣下、いよいよ御勇退ですな。悠々自適つて次第ですか』

と、この功成り名とげた高官の餘生を、定めし世の多くの將軍たちが送るやうな閑雲野鶴を友とする生活で暮すものと思つてゐた。

だが、五十二歳のツエッペリンには、まだ脈々と浪打つ殉國の氣慨があつた。長い規則正しい軍隊生活で鍛へてきた肉體は、まだに衰へをみない。

『まだまだ、餘生と考へるには、俺の身體も氣持ちも許されぬものがありますよ。もう一働きお國のために盡してみたいと考へております』

と、きつぱり答へた。

そうだ、ツエッペリンの第二の人生は、この時から始まるのである。新らしい努力と、建設によつて、大ドイツ國のために盡したいと云ふ熱情が、軍人として遂げられなかつた後半生に於て、再び青春の意氣をとりもどして奮然と起たしめたのである。

祖國のため、社會のために盡そうとして、献げて

の前にして、陸軍中将國王附將官待遇伯爵フォン・ツエッペリンは、豫備役編入となつたのである。

『俺の生命はこれで終りか。この世界に少しでも有用に、祖國に奉仕しやうとしてきたのに、もうその活動すべき場所を失つた』

快々として樂しまなかつた。

生涯をかけた軍人としての希望は、こゝに空しく消えた。

だが、讀者よ、これはツエッペリンの人爲りを語るための序奏曲であつた。決して彼の使命は終つたのではなく、いな、むしろ、こゝにツエッペリンの新生命が、いよいよその輝きを増して繰り展げられたのだ。

じておりますのぢや』

『餘り、夢のやうな話ですな』

訪客は、この勇退した名門の將軍を利用して、何か企業でもと心に描いて訪れてみると、空を飛ぶなどと、氣狂ひか、馬鹿の夢物語りのやうな話を大眞面目できかされたので、長居は無用と匆々に歸つてしまつた。

だが、ツエッペリンの心の、内に描かれた飛行船への理想は決して夢物語ではなかつた。

それも、今日、きのふに、ふとした思ひつきから始まつた退役將軍のお道樂半分の考へでもないのである。

彼は、青年士官時代、北アメリカの、聖ホールにゐるとき、始めて氣球に乘つてゐる。また一八七〇年（皇紀二五三〇年）普佛戰爭に、パリ包圍軍にゐた彼は、佛蘭西の志士、ガンベッタが氣球に乘つてパリを脱出して、外部と連絡をつけたことを耳にしてゐる。

けれども、そのころのツエッペリンには、氣球などは、別に大して關心を持つてゐなかつたのだ。

そのころのツエッペリンには、ただ赫々たる武人としての前途があつたのみである。

しかし、今になつてみると、これらの若かつた日の思ひ出が一つ一つ甦つてくる。

『人間が、空を飛びたいと云ふ希望を持つたのは、一體いつ頃からであらう。ずゐぶん、いろいろの物語や傳説も聞かされてゐるし、氣球が飛んだり、動力つきの氣球も出來てゐる』と彼は考へた。『だが、どれも、これも、まだ不完全なものばかりだ。物の役に立つものはない』

きた五十二年の命が、不幸にして、途中で斷ち切られ、彼の人生を有意義に活動しやうとする意志は抑へられたのであつた。

それゆゑに、このまゝ殘る生活を無爲にすごしたくなかつた。

生命のあるかぎり、祖國と社會のために、盡くるところなき獻身をつづけねばならないのである。

『では、閣下、一體どう云ふことをなさる御考へですか、何か事業の方にでも御關係になるとか――』

『私はそのやうな、老後の餘暇にやれる仕事などに、むざむざとこれからの生活を費してしまひたくはないのですよ』

『では、何か新らしいお仕事を』

『ハハ！　そうですな、新らしいと云へば新らしすぎるかも知れませんね。飛行船を一つ完成したいと考へてゐます』

この意外なツェッペリンの答には、無遠慮な訪問客も驚いた。

『飛行船ですつて、あの輕業師のやうな風船をね。なんだ、そんなものですか、ハハ、、、』

『いや、今貴方は笑はれましたね。或は、世間の人々も笑ふかもしれません。今日の氣球や、玩具のやうな飛行船を見世もの興行半分にやつとりますからな』

『そうですよ、閣下、立派な御身分の閣下が、あのやうな輕業めいた事に手を出されることは感心しませんね。』

『或は今はそうかもしれん。しかしです。わが獨逸は、世界の强國とならねばならん、それには將來、飛行船と云ふものが必ず軍用に役立つことを私は信

ツエッペリンは、古い日誌をバツタリ伏せると、決然として大事業を、何人もやらなかつた未知への克服を、五十歳をこへて、これから、やり出そうとしたのである。

狂人扱ひ

ツエッペリンが、飛行船について抱いてゐた關心を、實際に移そうとしたのは、勿論、まだ軍職にあるころから、屢々政府に向つて訴へてゐたのである。

それは一八八四年（皇紀二五四四年）の秋、フランスのルナール、クルップ兩大尉が、飛行船ラ・フランス號を操縦し、僅かながら發動機の力で飛行をした事が、驚くべきニユースとして、傳へられてきた。

當時、聯隊にゐたツエッペリンは、

『ラ・フランス號の成功は、將來飛行船が軍用として十分役に立つものであることを證明してゐるのだ。それに、わが國はどうだ？　まだ繋留氣球しかないではないか』

と考へて、必ず軍用として、運航自由な、大飛行船の必要が起つてくるに違ひない。今のうちに、フランスに負けぬやうにやらねば、ドイツの國防のため、ドイツの安全のために危いことであると、意見書を書いた。

『こんな愚にもつかぬ意見を述べるよりは、自分の部隊の訓練でも考へたらどうだね』

上官は、相手にしてくれなかつた。

だが、彼は、飛行船に對する信頼をますます募らせて行つた。

一八九一年、軍人としての彼の評判は餘りよくな

そこで、彼は、手文庫の中を、繰りひろげて、古い書類を探し出した。

もう、紙は薄茶色に、褪せてゐるが、なつかしいウルム聯隊長になる前年、一八七四年（皇紀二五三四年）の日記が出てきた。

『たしか、遞信大臣ステファン卿の話をきいたときに、感想をつけておいたと思ふが……』

バラバラと頁をくつてゆくと、三月二十五日のところに、「遞相より世界通信と航空なる講演をきゝて」と題して感想めいたものが書きつけてあつた。

感慨深く讀みかへしてゆくと、「飛行船は巨船のやうな大容積のもので、相當の荷物をつみ、且つ動力によつて自由に上昇したり、下降したり出來ねばならぬ。ガスを入れるところは船の防水區劃のごとく、細かく數ヶに分けられるべきだ」と誌されてあつた。

ツエッペリンの胸中には、早くもこの大飛行船についての考案が組立てられてゐたのである。そして、一年後の一八七五年四月四日の日誌には、

「飛行船は、明らかに海陸運の不便な二つの地點間を最も迅速に交通しうるだらう。

だから、建造費が高くついても、運航は結局安いものになるに違ひない」と書いてあつた。

ただの軍人でなく社會の狀態について、深い關心を持つてゐたツエッペリンは、そのころから、日誌に書き入れた感想の中に、飛行船が、遠隔地との連絡や、前進部隊との補給に使へることを、思ひつくまゝに書き入れておいた。

『この考へを、いよいよ實地に移す時が來たのだな』

に技術者でない君が、どれ丈けの事が出來ると云ふのかね』
と、てんで相手にされなかつた。
併し、今や何人の罵倒も、彼の熱を消すことは出來なかつた。否、反對され、嘲けられるほど、熱はますます高くなつてゆく。
しかもそれは、自分の名譽とか、成功による報酬とかによつて燃へ上るものではなかつた。ツエッペリンと云ふ一人の人間の、内部生命が、已むに已まれぬ祖國のため、同胞のためにと念願する使命によつて燃燒される義務の觀念であつた。
どんな見込みのないやうに見えてゐる問題も、困難にも、屈しない決心であつた。そのために、五十二のツエッペリンが、改めて苦惱と試煉に曝されねばならないのである。

秀れた考案

とりわけ、ツエッペリンを惱ましたものは何であらうか。
世間の罵倒や、冷笑ではなかつた。
『イサベラや、僕はいよいよ軍隊をやめて、これから、かねがね話してゐた飛行船をやつてみやうと思つてゐる』
と、決心を妻に打ち明けた。
長い年月を、ツエッペリンのよき半身として信頼と愛との變らない忠實さを以て、つかへてきた妻イサベラは、ただ默つて夫の偉大な決心に耳を傾けてゐた。
『ただ僕の心配してゐることは、このやうな大きい仕事をだね、しかも全く新らしい技術上の事ばかり

かつた。

參謀長シエリフエン將軍を訪ねて行つて、

『閣下、私は、かねて意見書を差出しておきました飛行船の事をいよいよ、本氣でやつてみたいと考へるのでありますが』と申述べた。

『だつて君、君は今旅團長として、軍務のある身體だ、そんな出來るか、出來ぬか判らん仕事に熱中することはよくなからう』

『併し、參謀長、先頃の演習以來、私の軍人としての生命は、もう見込みがないと覺悟しております。便々と免官になるのを待つておれませぬ。前に意見書を差出しましたときは、ただ漠然と考へてゐただけでありまして、まとまつた研究をする餘暇がなかつたのであります。

それで、餘申上げると、どうも氣狂ひ扱ひをされたそうでありますから遠慮してゐたのでありまして……』

『今だつて、君、そんな事を云ひ出すと精神病院行きにされるぞ』

『お言葉ではありますが、すでに、フランスでは、ラ・フランス號も成功しております。我國では』

『待ちたまへ、ツエッペリン君、君はどうも物事を過信しすぎるやうぢやよ。ラ・フランス號の速力は僅か秒速五米五（時速十九米）にすぎんぢやないか、それぢや軍隊に使つて、どれ丈けの威力を發揮できると云ふんぢやね』

『その點については閣下、自分は、改良しやうと考へて、あの考案に手をつけて形を描いてみたんですが』

『ハハ！ 君、紙の上でなら何とでもなるよ。それ

『それはこうなんですよ』

ツエッペリンは、鞄の中から、長い間の考へを纒めあげて、細かく書きこんだノートや、圖面をいくつも取り出した。

――ごく、大ざつぱに云ふならば、今までの氣球は、ガスの力で膨んで氣球の形を保つてゐた。それだからガスが洩れるとか、氣球が破れると、墜落する外ないのである。

『で、私は金屬の骨組で飛行船全體の形を作り上げ、その內部を數ケの區劃に區切るのです。そして、この中に氣球を別々に入れて置くと云ふ點なのです』

今までの氣球だと、熱に會つたり、冷えると、ガスが膨脹し、收縮するときには、別に空氣袋をつけて、形を補つてやらねばならなかつた。

「成るほど、するとこの氣球室の中で、氣球の膨縮に備へる考へですね』

『さうです、それ丈けぢやありません。骨組を繼ぎ足しさへすれば、大型に作り得ますし、船室や、舵器をこの骨組にとりつければ非常に丈夫な飛行船が出來るのです』

『判りました。何しろ非常に新らしい考案ですから、一つ皆で研究してみませう』

ダイムラー會社は、そのころ非常に進んだ考へを持つてゐた技術者がゐたので、とりあへずツエッペリンによつて持ちこまれた新設計を研究することになつた。

『面白い考案で、丈夫に出來るに間違ひない。だが、そんな重いものが飛び上るだらうか』

『いや、飛べたとしても、故障が起つたら、そんな重い骨組のもので着陸できるだらうか』

の多い事業を、騎兵出身の軍人の古手が、やるのに適してゐるか、どうかと云ふことなんだよ』

『それは。御心配ないと思ひますね。そのために技術者を、お雇ひになりますし、專門家と御相談になればいいのですもの』

『うん、どうも俺は生れつき樂天家でね。技術は必ず進歩するし、どんな困難もきつと解決の道があると信じて、事を簡單に考へすぎるんだよ』

『いゝんですわ、それで。それでこそ貴方は、どんな困難がこれから先に起りませうとも、きつと傍目もふらずに、やり遂げる事が出來るのだと信じますわ』

『そうか、有難う。俺は決心したよ、きつとやつてみせるぞ』

『えゝ、貴方は、やらうとする事を、必ずやりとげられる方だと信じてゐますのよ』

『よし、ぢや、俺は早速明日にでもダイムラー發動機工場へ行つて、專門的の相談をしてこやう』

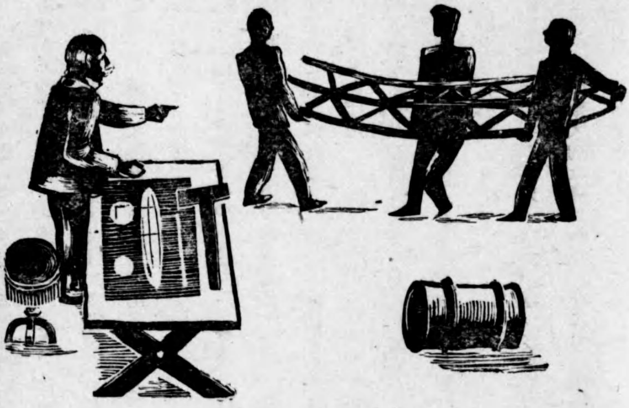
遂に、歴史的な、飛行船建造への第一歩が印せられたのだ。

ダイムラー發動機會社を訪れたツエッペリンは、當時ガス機關の製造者として、着々と成功してゐたダイムラー會社と、シュナイダー博士への協力を乞ふた。

『いや、私の考へは、決して突飛な思ひつきぢやないんですよ、平凡なものです。

今まで、何人かの技術者が失敗し、澤山の人々が犧牲となつて得た氣球の經驗を、その研究を集めて、成功するやうに組立てやうにするんです』

『で、具體的に云ふ事になりますかね』



ラの構造、水素ガスの發生法などの萬般の事を、進めて行つた。

『どうだね。仕事は、うまく捗つてゐるかな』

ツエッペリンは、技師たちと一緒になつて、計算尺を手にして、設計圖と較べてみたり、始終ニコニコと、働いてゐた。

彼の胸には、もう大きい夢想が今にも實現するかのやうに思つた。

書齋に戻ると、すぐ、彼は故國のウエルランプルグ國の首相に手紙を認めた。

閣下

豫て多大の御配慮を賜り、數年前より航空船の進歩に關し、格別の御關心を抱かせられました事について、私は、深く感謝申上ぐるところであります。

『それよりも、骨組の強さが耐へられまい。ガスの浮揚力と、船體の重さとで、眞二つに折れてしまふに違ひない』

『とにかく、呆れた考へだ』

『氣違ひ沙汰だよ』

　技師たちから、ごうごうと非難と、反對との聲が持ち上つた。

『諸君は、とにかく專門の立場から非難されるやうだ』ツエッペリンは、技術者たちと會見して、皆の反對意見を聞いてゐたが『なるほど、私の考へは素人である。しかし、この細長い大飛行船が、まだ出來上つてゐないんだから、君たちにとつても、やはり素人なのだらう。やつてみなければ何とも云へないぢやないか』

研究への一歩

　ツエッペリンは、毫も屈せなかつた。

『とにかく、やつてみやう。俺の財産を、全部投出すから、研究して欲しい』

と、惜しげもなく、全私財を投げ出した。そして、ダイムラー會社から推薦してきた技師のグロスに對して、

『出來るか、出來ぬか、まづ研究してくれ給へ』

と、ツエッペリンは、自分の邸の一部に、製作に關する技術者や學者たちの室を作つた。

　そして、この人々によつて、ツエッペリンの考に基づいて、骨組の強さや氣球や外被や材料や、それらの重さなどの研究が細く進められた。むづかしい打算が行はれ、發動機の研究、プロペ

諦めやうか

『伯爵、伯爵、大變なことになりましたッ』

いよいよ、チューディ大尉がやつてくると云ふ報を受けた朝であつた。

技師の一人が、慌だしくツエッペリンの部屋を叩いた。

『何だ、どうしたのだ』

『ダイムラー會社の發動機工場から、こう云つてきたんです』と一通の報告書を鷲づかみにして息を切らせてゐる。

『見て下さい、こちらの要求する重量では、發動機二臺以上積めないんです。すると二十馬力にしかなりません。

これでは、豫定の四十五馬力の半分にもならないんです』

『弱つたなア、それは』

『はア、ラ・ブランス號の秒速二十米の三倍の豫定の設計が、根本から引つくりかへつてしまひましたよ』

『一つ氣球製作家のリーディンガー氏と相談してみやう』

と、早速彼の許へかけつけた。

『ですが、私には、こんな長細い飛行船が果して、それ丈けの速力を出せるかどうか、疑ひますね』

彼の返事はこの通りだつた。

『そうでせうか。普通の圓形の氣球と較べて、私の長い飛行船は、遲いと仰言るんですか』

『遲いとは確言できませんが、空氣の抵抗がうんと大きくなるやうに考へますね』

閣下、私の設計を急いでおりまする新飛行船は、いかなる天候下に於ても、飛行し、旅客、貨物を輸送しうる計劃なのであります。勿論。これは地上と異り、極めて迅速なる速力を出しうることと確信いたしております。

併しながら、私の發明につきまして、各方面には、根強き反對も少からず見うけられますので、政府の御援助を乞ふに先立ち、世上の非難を打破るだけの成績をあげたく、以て軍事上有用なる利器たらしめんと努力を怠らぬものであります。何卒尊敬し奉る國王陛下によろしく御取成しを願ひたいと存ずる次第であります。

ペンを置いたツエッペリンは、會心の笑みを洩らした。彼一流の樂天的な考へから、今にも大飛行船が、大空高く浮み上るやうに思へてならなかつた。

そこで、もう一通、参謀總長シュリフエン将軍に宛ててペンを走らせた。

閣下

小官の目下設計致し居ります飛行船は、十二時間分の燃料をつみ、いかなる天候の下でも飛行し、五百瓩の兵士又は武器をつみ、秒速二十米の速力で飛行しうる計劃であります。

この計劃が、果して見込みありや否や、軍事技術者の御批判を仰ぎたく願ひ上げます——

數日後、参謀總長から返事に接した。

『プロシャ氣球隊司令官フォン・チユーデイ大尉を檢査員として派遣する』と云ふのであつた。

かくして、ツエッペリンの苦心は、まづ實際の形となつて現はれて來そうになつたのである。果して、運命は順調に進むであらうか。

『どうも研究費の方が嵩むやうでありますが――』

『うむ、判つとる。あとで見るから置いておけ』

『はい、では此處に』

執事が去つてしまふと、後に獨りツエッペリンは、部屋中を、あちこちと歩きながら、時々立止つて考へたり、洞ろな眸を窓の方に投げかけたり、限りのない苦しみを、内心で戰ひつづけた。

『駄目なものだらうか、見込みはないものだらうか。もう一度リーディンガー君と相談してみやう』

さすが樂天家のツエッペリンも、全く參つてしまつた。

そこで、翌日、もう一度ケッピンゲンへ出かけて、リーディンガーと會見した。そこには、澤山の技術者や、研究家がゐて、折しも當時研究されつつあつた翼付の飛行機の將來について、いろいろ意見を闘はしてゐた。

『やあ、いいところへ來てくれた。ツエッペリン君、皆と一緒に食事をしながら色々話をしやうぢやないか』

『さうだ。ツエッペリン伯から一つ飛行船の特色を承りたいですね。僕等はどうも贊成しかねるんすが』

『僕たちは、いま飛行船か、それとも翼付の飛行機かと云ふ議論をしてゐたのですよ』

ツエッペリンを迎へ入れて、彼等は愉快さうに、賑やかに話が彈んだ。

リーディンガーは、この頃、むしろ飛行船よりも、飛行機に熱中してゐた。從つて話はともすれば、ツエッペリンの考へてゐる飛行船の缺陷や困難さに話が移つてゆく。

『しかし、空氣の抵抗は、物體の斷面積の大小で異るが、長さにはそんなに影響がないやうに思ひますが――』

『そりやツエッペリン君、何か空氣力學上の計算から申されるんですか』

『いや、殘念ながら、今日の空氣力等は、その計算を正確にするほど完成されてゐません。御承知の事と思ひますけれども』

『さうでせう。だから、實際にやつてみなければ判らん事でせう。少くとも私は不適當だと思ひますね』

『それに』とリーディンガーは、傍にゐたジグスフエルトを顧みながら、『君の經驗から、このやうな飛行船の操縱はどうだと思ふね』

『さあ、僕は、飛行船に乘つてみないから何とも云へぬが、非常に困難ぢやないかと思ふね。第一そんな長い氣球が果して釣合ひをとつて飛べるかどうだか――』

『そうだね。ツエッペリン君、僕は、むしろこんな計劃餘りお勸めしない方が君のためぢやないかと思ひますがな』

二人の技術者は、眞向から反對の意見だつた。むしろ、ツエッペリンにとつて、同情者であるこの氣球の大家から、反對論を聞かされたことは、ツエッペリンにとつて、限りのない淋しさであつた。その上、歸ると、

『伯爵一寸お耳に入れたいことが御座いますが』

物思ひに沈んでゐるツエッペリンの側に立つた召使は、云ひ難そうにして彼の銀行から廻してきた莫大な支拂高を手にして、

ツエッペリンは、もう一度考へこんだ。シユリーフエス將軍と、チユーデイ大尉と、特許局とへ飛行船發明を思ひ切るからとの斷り狀であつた。

『だが、まてよ、リーディンガーの考へてゐる飛行機は或は將來發達するかもしれないが、いまのところそんな强力な發動機が得られるだらうか。それから、その發動機で、飛行船を作れぬことはあるまい』

そうだ、彼は思ひ止まつた。斷り狀をすぐ破り去つた。

チユーデイ大尉もそのうちにやつてきた。

『伯爵、貴方の計劃を是非實現して頂きたいですな』

『私も、やりたいと思ひますよ』

「やれますとも。それについて耳よりな話を申し上げやうと思ひます』と、彼は、フランスの陸軍氣球隊が、シャレー・ムートンで實驗したところによると、輕くて强力な發動機が出來たと云ふことだ。

と語つた。

しかし、こんな發動機は、まだ出來上つてゐないし、肝心の顧問技師のグロスは、

『いくら計算してみても、どうも成功しそうもないと思ひますよ』

『そりや君、俺は素人だよ。素人だからこそ君たち技術者の力が入用なのだ』

『しかしツエッペリン伯爵、私は技術に忠實でありたいのですよ、出來そうもない仕事をこの上つづけたくありません』

『うむ、判つた。君は餘り技術に凝り固つてゐるよ。僕はもつと熱中してほしいのだ。新らしい仕事には、石橋を叩いて渡るよりも、熱情と活動とがほ

第一、そんな大きい飛行船を浮ばすだけの發動機が、要求する輕さで得られるだらうか。莫大な建造費がかかる。果してそれで、ラ・フランス號の數倍の性能を出すであらうか、などと話はますますツエッペリンの氣持ちを沈ませてゆく計りであつた。

皆の話が賑になるほど彼の心は滅入つた。自分は果して、出來ないものを考へてゐるのではなからうか、などと不安が心の底から擡つてくる。

『そう伺つてみると、どうも私の自信が薄らぎましたよ。

或は、私は飛行船の建造を思ひ切るかもしれません』

『そうなさい。その方が、利巧ですよ。どうも航空の將來は、翼のある飛行機の研究の方に分がありますよ』

リイディンガーは口を極めて、ツエッペリンに、飛行船の製作を諦めさせやうとした。

皆と別れて、一人になると、彼はますます淋しかつた。

理想の消失である。

希望は絶望と變り、夢想は崩れ去つてゆく。

『止めやう。

手紙を書いて斷らう。そして……』

飛行船を思ひあきらめたら、何を一體したらいいのだ！

熱情の再起

机の上に、置かれた三通の手紙がある。

『これを出してしまつたものだらうか、それとも

——』

にお願ひして、どうか飛行船建造のため、ドイツ陸軍から援助を賜るやう、カイゼル皇帝へ御取りなし願ひたいと申し出た。

國王は、ツエッペリンを、かねがね信頼しておられたので、すぐその手續きをとつたのであつた。カイゼルも、國王からの信頼もあるので、捨ててはおけず、

歩兵總監フォン・ハーケン將軍を使にして、

『とにかく追つて沙汰しやう。何分仕事を盛んにやつて置くやう』

と傳へられた。

『有難い、これでどうやら光明が見えてきたぞ』

と、ツエッペリンは喜んだ。

『そうですな。一日も早く陸軍が委員會を開いて、軍用飛行船として建造を援助してくれたらいいんですがね』

『今に何とか沙汰があるだらう。シュリーフエン參謀總長にも、フォン・デル・ゴルツ工兵總監にも賴んである。何とか、話があるだらう』

『しかし、どうも、遲いですな』コーベル技師は氣が氣でなかつた。『委員會に提出する設計も計算も、何度となく檢べて、いつでも出せるやうに準備してあるんですからねえ』

かぎりのない焦慮のうちに、その年も暮れてしまつた。

一八九四年（皇紀二五五四年）は果して希望の年であらうか。一月—二月、何の音沙汰もない。いなプロシァの軍部では「あんな氣狂ひ伯爵の發明にかかり合はぬ方がよい」と云ふ噂さへ起つてゐたのだ。

どこまでも、運命は冷たかつた。

しいのだからね』

と、遂にグロス技師を解雇して、その代りに若いコーベル技師を雇ふことにした。

一八九二年五月一日——。

『さあ、いよいよやるぞ。コーベル君、一つ新飛行船について、協力してくれ給へ。俺は設計さへ終つたら、すぐ製作にとりかかれるやうに、マンネスマン工場と、ノイハウゼン工場へ、アルミニュムの骨組を作つて貰ふ契約をしてあるんぢや』

『よろしうございます。大いにやりませう。一つ計算の方を根本からやり直しませう。私は必ず成功すると思つてゐますよ』

『有難う。このやうな新らしい仕事は、君のやうな若い人に、熱情を傾けてやつて貰はなくちやならん』

老ひたる理想家ツエッペリンと、若い技師コーベルの、二人の理想を追求する心がしつかと結びつかれた。

夜に入つても、設計室は、いつも、明々と燈をつけて、次から次へ、複雑な計算をすすめて行つた。

『世間の誰れが相手にせなくても、専門家が狂人の夢想だと罵つても、私はどうも、ツエッペリン伯の熱に打たれると、必ず成功すると信じたくなる』コーベルは仲間の技師を励まして、仕事をどしどし進めて行つた。

委員長の態度

『カイゼル陛下が、スツットガルトへ訪問せられるさうだ。これは願つてもない好機會だ』と、翌年九月、ツエッペリンは、故國のウエルランベルグ國王

『ツエッペリン伯は、今迄の準備や研究に、私財を使ひ果してゐるか、これ以上彼の私財を費はせてはならない』と決議したが、その結果を待ちに待つてゐるツエッペリンのところへは一向吉報がこないのであつた。

二萬マークの資金調達を申請した手紙も、軍務局の手で握りつぶされてしまつて、委員會では、七月になつて、

「コノ計劃ハ軍ノ要求ニ適セサルモノト認ム」

とあつさり却下されてしまつたのだ。

『何と云ふことだ、何處に缺點があると云ふのだ』

ツエッペリンは憤激の極に達した。もう、私財はとつくに使ひ果してゐる。

『私に金があれば、立派に飛行船をこさへて飛ばせてみせるんだか。出來ないなどとケチをつけた人々の頭上高くに——』

しかし、もう彼の手許には、そんな費用を出す餘裕は殘つてゐない。

『ツエッペリン伯爵、一體、軍部では何を根據として却下してきたのですか』

コーベル技師も心外でならない。精魂をつくした設計に缺點があると思へない。いろいろ調べてみると、委員會のプレスロー教授の靜力學的計算によると、骨組をうんと強くせねばならぬし、そうすると丈夫になる代りに重くなつて、浮揚力が減じ、軍用として、全く無意義になつてしまふだろうと云ふのである。

『なあんだ。そんな事ですかい。そりや餘り靜力學的な考へにすぎますねえ』

『わしも、そう思ふ。ね、コーベル君、この强度計

は、氣球隊のそうそうたる士官のニーベル少佐、ミーヒャエリス大尉、グロス中尉などであつた。

これらの人々は、理論の上からも、實地操縦の上からも、いろいろ研究を重ねて、中には多少の非難や異議を唱へる人もゐたが、ヘルムホルツ敎授は、

『伯爵、とにかく只今迄檢討いたしましたところでは、この設計は、相當高く評價されるべきものだと存じます』

『有難うムいました。これで、やつと前途が明るくなつた氣がいたします』

『私は、必ずしも實行不可能の事でないと思ひますので、軍部へ然るべき補助を申請いたすつもりです』

『何分よろしく願ひます』

それから數ヶ月、委員會では、

そのうちに三月が來た。

『もう駄目なんだらうか。陸軍では、一體何をしてゐるのだ。飛行船の意義も判らなければ、構造も理解できぬ人々が、勝手に私の計劃のよしあしを判斷してゐる。そんな馬鹿げたことがあらうか』

と、ツエッペリンは悶々とした。

だが、運命は、やつと微笑みを伯の上に投げかけ始めた。

政府では、いよいよ委員會を組織することに決した。これは全くツエッペリンの過去の華々しい經歴、軍人としての勳功や社會的位置が、物を言つたのだ。

そして委員長には、有名な物理學者のヘルムホルツ敎授を、委員には、學者側では、スラヴィ、ミュラー・ブレスロー、アスマンの敎授連と、陸軍側で

と、ツエッペリンは或は怒り、或は說明し、ブレスロー教授と論爭し、もう一度ウエルテンブルグ國王に訴へてみた。

だが得たものは、僅かに六千マークの下附金を賜つただけである。

さすがの樂天家で、强氣のツエッペリンも、これにはすつかり參つてしまつた。

『こうなつては致し方がない。何とかして獨力でもやつてみやう』

一八九五年（皇紀二五五五年）になつて。彼は、硬式飛行船建造の趣意書を書いて、世人に訴へ、八十萬マークの資金を集めにかかつた。

ウエルランブルグの國王にも訴へたし、舊友たちも盡力してくれた。

だが、結果はどうであつたか。

『そんな夢みたいなものが出來るかね』

『痴人夢を說く類だね』

有力者たちは、一マークも支出しやうとしなかつた。それ丈けではない。

ツエッペリンが、町を步いてゐると、スツットガルトの人々は、

『おい、見な、あれだよ。氣狂ひ爺さんは』

『うん、いい年をして、つまらぬ道樂を始めたものだね』

『あれで、本氣なんだよ』

と噂をした。

集つたのは、何と、僅か十萬マーク。

トイツ協會立つ

『この十萬マークをどうしやう』

算には、ガスの内壓力を見積つてゐないぢやないかねえ』

『あつ、そうです。そうです。それが大切な點ですよ』

二人は相擁して喜んだ。ブレスロー教授の指摘した缺陷なるものが、全く誤謬であることを證明できるのである。

當時、物理學の餘り進歩してゐなかつた時代だから、動いてゐる物體の强さと、動力學的に計算することなど考へに入れてゐなかつたのである。

骨組だけで强さを保たせなくても、水素ガスを張ると、それが十分船體の强さを受持つてくれるのだから、ツエッペリンの計算でよかつたのだ。

『おい、コーベル君、喜べ、喜べ、委員會をもう一度開いてくれるぞ。今度こそ大丈夫だ』

と二人は大いに期待をかけてゐた。そのころ、既に逝去してゐた前の委員長ヘルムフオルト氏も「この計劃はぜひ實現させたい」と云ひ殘してゐた位だから、同情者のフオン・ゴルツ將軍から、きつといい吉報があるものと待つてゐたのだ。

が、何たることだ。又も拒否。今度の理由は、經費と實用價値との間に餘り差がありすぎると云ふのだつた。

『貧乏人の發明家を捨てておいて、役立つやうになつたら取り上げて使はうと云ふのか、馬鹿々々しい』

『このやうな新らしい發明には、政府がうんと力を入れてくれなくちや駄目です』

『そうだよ、フランスでは、政府が、大分骨を折つとるらしい。ぐづぐづしてゐると、先を越されてしまふよ』

からうかと喜んではならぬ。

『コーベル君、どうやらこれで、少しは目鼻がついてきたぞ』

『そうです。ですが、今まで紙の上に書いてあつたものでさへ、これ丈け苦勞したのですから、いよいよ實物を作るとなると、ますます困難さが加つてきますよ』

『全くだ。しかし、どんな困難にもわしは、打ち勝つてみせるぞ。君もそのつもりでやつてくれ給へ』

『勿論です。しかし愉快ですな、ドイツ技師協會の決議は――』

『うむ、俺の何よりうれしい事は、設計をすつかり認めてくれたことだ。それに協會の委員會が、計劃實現を一層促進するために、理事會に力をいれてくれることだ』

『我々は百萬の味方を得たやうな氣がいたしますね。こんな大事業は一個人に委すべきでないから、建造費を廣く一般から集めて、我が航空工業界の技術の進歩發展に貢献したいとあるのですから、全く愉快ですよ。あの協會の檄文は、もう大分反響を呼んでゐるやうですね』

『それに君、わしの計劃を調べてくれた委員たちの顔觸れを見給へ、實に堂々たるものぢやないか』

ツエッペリンは、ドイツ協會から各方面へ配布された檄文を手にして、コーベルと語り合つた。

協會では、土木局長フォン・バッハ、參事官バーズレー、ブレスロー、スラー・ヴイ、それに、ステルワルダー、リンデ、ベータースの諸教授と、ベータース幹事長が立ち、ツエッペリンの計劃實現に先立ち、各種の空氣力學的問題の解決について、各分

八十萬マーク必要なところへ、僅か八分の一ではどうにもならぬ。と云つて、國王始め多少でも同情してくれる人々から集めたものを無責任に處置することは出來ない。

『ねえ、コーベル君、私は、もう年もとつてゐるし、ぐづぐづしてゐると飛行船の出來上らぬうちに死んでしまふ。何とかしてやつてみたいと思ふんだが』

『私もこのまゝで、この設計が埋れてしまふのは殘念でなりません』

そこで、最後の望みとして、ドイツ技師協會へ手紙を出して、一度この計劃を調べてくれないかと援助を乞ふた。

もう、陸軍の委員會に望みをかけることは出來ないのである。しかるに、運命と云ふものは皮肉なもので、ツエッペリンの手紙と入れ違ひに、協會幹事長ベータース氏から、飛行船の考案を見たいから、設計を調べさせてくれないかと申出の手紙が來たのである。

『これは面白くなつたぞ。わしは、協會とよく話合つてみよう』

とツエッペリンは喜び勇んで、協會へ出かけた。何度となく交渉し、話し合つてみると、さすが、技術家の集りだけに判りも早く、意見は、どうやら一致を見たのである。

ときに一八九六年（皇紀二五五六年）十二月二十一日。ツエッペリンが、飛行船建造を思ひ立つてから、早や五年の歳月が流れてゐたのである。

しかも、失望と、困難と、冷笑の薊の道を、ただ獨り、歩みつづけて來たのである。

が、仕事はやつと、緒がついたばかりである。う

かうかと喜んではならぬ。

『我々は百萬の味方を得たやうな氣がいたします

だが、今まで、何人も作つたことのない、巨大な、誰も考へたことのない複雑な、この飛行船の建造は、決して生やさしいものぢやない。

夜毎に、机の前に屈みこんで頭を抱へ、考へあぐんで、ペンを放り出す。ころころと轉んで、ぱたりと床に落ちた音に、はつとしてまた考へをとりもどす。そうした苦惱の日のつづくのであつた。

だが、既に第一歩は踏み出された。

第二章　建造と難波

第一號船成る

『ねえ、近頃、世間で貴方のことを何と云つてゐるか御存じ？』

すでに、昔の廣い邸宅を賣拂つて、ギールスベルグの友人の居城の一部へ移つて、つつましやかな生活をつづけてゐたツエッペリン夫妻は、ある朝、微笑みながら、妻の問ひかけた言葉に、

『わしは知らん、そんな事に耳を傾けてゐる暇はないんだ』

『そうですわね、こう云つてゐますのよ、「氣狂じみた巨大な計劃」ですつて、貴方がほんとの素人だからこんな化物を作るんだつて』

『その通りだ。素人だからこそ、やりとげるんだよ』

『えゝ、妾も、きつと成功すると信じてゐますわ』

寄る年波にもめげず、改めて數學、物理技術を、若い技師と一緒になつて勉強し、一方には、尙ほ彼を信用しない軍部や、技術者と戰ひつづけた。

一八九五年（皇紀二五五五年）八月三十一日附で得た硬式飛行船發明特許（第DRP九八五八〇號）

科にわかれて、ドイツの名譽のために愼重に研究してゆこうと云ふのだつた。

しかし、それも、所謂、學者の机上論ではなく、一歩一歩、實現させるために實行運動まで各方面へ呼びかけてくれた。

『ドイツ技師協會ともあらうものが、取り上げた位だから、或は見込みがあるかも知れん』

『飛行船の可能性と云ふことは十分考へられることだ』

と工業界の有志もこれに答へてくれた。

一八九八年の春、「飛行船助成株式會社」がどうやら成立した。

とは云へ、理解のある人は案外少く、まだまだツエッペリン飛行船について不信を抱いてゐる人の方が多かつた。

八十萬マークの資本金の半分は、やはりツエッペリン自身が引受けねばならなかつたが、キューブラー技師は、製作上の技術問題を一切引うけやうと熱のこもつた態度で奮起した。

殆ど絶望かと思はれた多難の時代は、ここに終つた。が、それは、無理解な人々の疑惑と不信に對する激しい戰ひであつた。

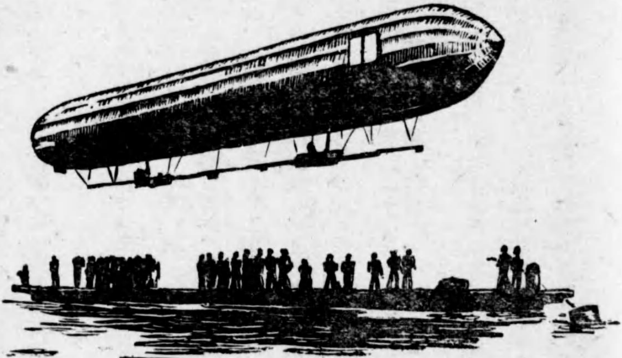
それはまだ必ずしも終り切つたのではない。その上に、これから實際の仕事と、技術とが格鬪の相手に入つてくるのだ。

一八九九年、フリードリッヒスハーフェンの郊外、マンツエルに於て、第一號飛行船の建造がいよいよ始つたのである。

今まで十年間、紙の上にあつたものが、いよいよ物體となつて姿を見せてくるのだ。

だが、今まで、何人も作つたことのない、巨大な、

グの友人の居城の一部へ移つて、つつましやかな生



ガス嚢を入れてある。

これらのガス氣嚢は、環狀橫骨の間にあつて、自由に膨脹收縮しうるのであつた。

ガスの容積は一萬千三百立方メートルに及び十二トンの搭載力を有してゐる。

ダイムラー十五馬力を二臺備へた堂々たるものであるが、この空の浮船とも云ふべき大飛行船が、追て完成に近づいてくると、

『いよいよ、完成しますね。いつ飛行しますか、仲仲の御苦心でせう』

などと、今まで、冷酷と罵倒した人々が訪ねてきたり、新聞記者が押かけてきた。

『初飛行のときは一つ大々的に宣傳したいと思ひますが――』

などと、御機嫌伺ひをする連中さへあつた。

を紙の上から、實物へ移さねばならぬ。こんな大きい飛行船を實驗するのには、廣い場所がいる。

どちらから風が吹いても、自由に船庫から飛行船を曳出し飛行させ、下降できる廣い場所として、彼は、ボーデンゼー湖を選んだ。

『ここなら、いくら失敗しても、やり直しが出るから――』

かくて、マンツエルのほとり、ボーデンゼーの波靜かな湖畔に工場が設けられ、水面には、飛行船を收める廻轉式の浮格納庫を錨でつないでおいた。

ウエストファリア地方にアルミニュム工場を持つカール・ベルグと約束をして、アルミニュムを購入し、晝に夜をついで工事をすすめた。

しかし、今度の戰は、人が相手でないだけに始末が惡い。最初の冬を迎へるころ、やつと出來たばかりの浮格納庫は、嵐のために早くも大破損を蒙り、血の出るやうな十萬マークが、修理費として消えてしまつた。

飛行船の方も、コーベル技師の考案した格子型の梁を使ふアルミニュムが思ふやうに手に入らず、工事は次第に遲れてゆく。

だが、一九〇〇年（明治三十三年）の初めには、どうやら型らしいものが出來てきた。

前部から後部まで貫く二十四本のアルミニュムの縱骨と、同じく十六本の環形の横骨とから成り、全體を網狀に針金で堅く張り締めた船體の長さは百二十八メートル、直徑十一メートル七であつた。

この船體の下には、吊船が二つあつて、その間を橋型の構造で連結してあり、長い船體が曲らぬやうにしてある。船體は木綿で包み、内部には十六ケのガス嚢を入れてある。

て、三人の操舵者と共に、ゴンドラ内につゝ立つてゐる。

『わァ、出たッ、大きいぞ』

湖畔から、湖上の船から、數千の見物人が驚きの聲をあげる。

鋭く響くツエッペリンの飛行開始の合圖に船長は繋留綱を放つた。今や全長百二十八メートルの巨船は、一メートル、一メートルと、浮び上つてゆく。おゝ、硬式大飛行船、遂に飛ぶ。今こそ、歴史的な瞬間であるのだ。

歡呼のうちに、暫く空中に浮んでゐた飛行船は、やがてモーターが唸り、船首を風に逆はせつつ、二百メートルの高さに昇つてゆく。

速力、毎秒八メートル！

『あッ、飛んだ！』

などと、無遠慮に、ただ好奇心にみちた人々が、最初の飛行をまちうけてゐたのだ。

この日は風が強くて中止されたが、夕方になつて、凪いだとき豫備試驗を行つてみたところ、モーターの具合も上々だ。

『明日こそ』、いよいよその日は來た。土曜日の朝、天氣は晴れ、風はない、

老發明家ツエッペリン伯は、默々としてゴンドラ内に上つて、靜かに瞑目して祈禱を捧げた。

今日こそ、彼が後半世を捧げつくした飛行船が、世界最初の飛行を行ふ最も重大な、緊張した刹那なのである。

『錨を上げッ』

飛行船は靜かに浮格納庫から押出された。氣球の熟練家であるフオン・ジーグスフエルトは船長とし

すぎし七年間、嘲笑と、攻撃のなかにあつて、撓まず屈せず、ひたすらに自の信念へ向つて、突進してきたツエッペリン老伯が、いまや實物を以て世にその所信を問ふのだ。

いままで、僅かに避暑地として、富豪階級の別莊地にすぎなかつた、湖畔の平和境フリードリツヒスハーフエンは、新聞記者、カメラマン、飛行家、その他の見物人で、押すな押すなの人出、百姓家まで滯在客で一ぱいだつた。

『うまく飛びますかなァ』

『どうも、あんな長いものが空へ上つたら、眞中からポキリと折れさうだよ』

『いや、とんぼがへりを打つてしまふぜ』

『第一、あんな重いものが揚る筈はない。僕は、墜落するところの寫眞をとつておきたい』

『私は人々の興味をあふるためにやつてゐるんぢやない。國のための眞劍な仕事に努力してゐるんですよ』

と彼等の輕薄な關心に冷やかに答へた。もう、資本金も使ひ果した。

果して一號船が飛ぶだらうか、強度はこれで十分だらうか、舵はうまく利くだらうか。

ツエッペリンの目の前には、まだまだ大きい苦惱が横つてゐた。

飛んだ飛んだ

破損した浮格納庫の修理も出來た。

一九〇〇年七月一日、眞夏の碧空に美しく輝くアルプスの白峯、初夏の軟風は靜かにボーデンゼーの湖上を拂ふ。

ツエッペリンの信念は少しも搖がなかつた。材料と、もつと強いモーターさへあれば、きつと豫期した飛行が出來ると確信してゐた。

そこで片つぱしから、知人を說き、世間に訴へた。

ドイツ技師協會でも「この飛行船は將來もつと強力なモーターをつければ、必ず成功するだらう」との意見を發表してくれたけれども、もう實際的に、一マークさへ支出してはくれなかつた。

『ツエッペリンの發明はなるほど氣狂ひではなかつたが、まあ實用的なものとは云へないね』

と軍部でも、眞面目に彼の發明を考へてくれるやうになつたけれども、實際としては、軟式小型飛行船の方を採用したがつてゐた。

ツエッペリンは屈しなかつた。

世間が、多少でも飛行船に興味を抱きはじめたのを知つて、紳士錄を繰り、寄附を勸誘してみた。なげなしの金を拂つて、郵稅前納で振替用紙まで同封した文書を六萬通も發送した。

その結果はどうだつたらう。

僅かに八千マーク。ひどいのになると惡口や皮肉を書いて返送してきたのもある。

『これは誰だらう』

フランクフルタア・ツアイツング新聞をとりあげてみると「無用なる努力」「未知の挑戰」などと每日、違つた題目であるが、飛行船反對論が掲載されてゐる。

『ドクター・イー？ 誰れだらう。しかし世間の惡罵や冷笑と違つて、この投書には、根據があるぞ』

それは、氣象學上から、力學上から、ツエッペリン飛行船の缺陷を、はつきり指摘してゐるのだ。

ツエッペリンは、眸から滿ち落つる熱涙を拭はうともせず、十年の苦心、この一瞬に溶け去り、歡喜と感激は、靑年のやうに彼の頰を紅潮させてゐる。みよ、飛行船は、舵をまげて、右廻りに大きく旋廻し、重心の移動も何等の危險なく行はれ、世人の危惧してゐたやうに、折れたり倒立ちすることはなかつた。

かくて約十分の飛行後、少し舵を損ふた外何の不安もなく着水したのである。彼は勝つた。遂に夢は實現した。だが、眞に勝ち拔くためには、まだまだ荊の道は長いのだ。

資金難

ついては十月十七日と二十二日に試驗飛行を行つて、合計、三時間ばかり、飛ぶことには確實な結果を得た。

『もう資金がありません、發動機のクランク軸をとりかへねば、後の試驗が出來ませんが』

『それより舵の故障を早く直したいものだ。秒速は正確なところ、七・五メートル位だね。初めの設計とは大分開きが大きいやうだが』

もつと改造し、もつと實驗してみたい。だが、もう資本金は殘つてゐない。

これでは、どうすることも出來ぬ。熱心であつた人々も、こうなると改造する熱が冷めて行つた。

萬物凋落の秋十一月、大きい期待に反して飛ぶには飛んだが、思はしい成果を見なかつたのが災をなして「飛行船助成會社」は解散せねばならなかつた。

『皆が去つてまつても、俺一人でやる。死ぬまでやる』

ので、全體の構造はずつと丈夫になつた。
『今度は自信があるぞ。モーターだつて今度のは八十五馬力だからね』
『そうですね。それに何より心強いのは、今度のモーターが輕いことですよ』
前の十五馬力が一馬力について二十六瓩もしたのに、今度のは僅か五瓩で出來上つてゐる。だから、プロペラの直徑も前のより三倍も大きい。
十一月三十日、第一回の試驗飛行だつた。このときは、出發を誤つたので飛び上ることが出來なかつた。
『また書いてゐる。何ものだらう。このドクター・イーと云ふ男は』
ツエッペリンは翌日の新聞に、再び彼の第二號船について、手ひどい非難を加へてゐる投書を見て氣を惡くした。
翌一九〇一年（明治三十四年）一月十七日、第二回の飛行試驗である。
はじめのうち、飛行船は美事に上昇し、二三メートルの高さに昇つて行つた。いよいよ飛行にとりかかるとき、急に強い西風が吹いて飛行船を押流しはじめる。運の惡いときはしかたのないもので、一ケの發動機が故障を起してしまつた。
『大變だッ』
進行力を失つて漂流をはじめたが、どうにか對岸のキスレッグに不時着陸した。幸ひどこも破損がなかつたので、モーターを修理して明日でも飛んで戻らうと繋留しておいた。
『どうも風が變つたやうですぜ』
夜中になつて、風は次第に強くなり、果ては嵐と

しかし、こんな事で落膽してゐる彼でなかつた。世の中のすべての人々が彼に背き、冷く當つてきても、僅かな一人、二人が、彼に同情の眸を向けてくれる。そこが世の中の面白いところであるのだ。

しかも、この僅かな人こそ、何百萬人か反對しやうと、ツエッペリンを力づけてくれる大きい動力ともなつたのだ。卽ち一人は、アルミニウム工場主のカール・ベルグだつた。飛行船に入用な材料を無償で提供しやうと云ふのである。

もう一人は、彼の若かりしころから、心の友と許したウエルテンブルグ國王である。

『政府が金を出すことは出來ないが、富籤を許してあげやう』

と、彼のために一つの道を開いてくれた。

どうやら、窮乏の淵から浮び上らうとすることが出來る。

慘たり第二號

『それなら、我々の方も富籤を發行しやう』

と他のドイツ各州が、これに倣つてくれたので、純益十二萬四千マークが集り、プロシア政府は三十五萬マークを特別基金から割いて支出してくれた。

この有様に軍部でも默つておれず、澁々ながら、ガス製造用具を貸してくれた。

『どうやら運が向いてきたぞ。今度こそ成功してみせる。』

一九〇五年（明治三十八年）には、新らしい第二號船の建造が始まつた。第一號よりずつと丈夫で、技師デュルを督勵して、管形の枠と山形の棒を組合せた三角梁を使つたのと、船體の底に通廊を設けた

次第にその眸は輝いてきた。

——そして破壞された船體の眞中に、すつくと靜かに立つて、その後仕末を命令してゐる人こそ老伯爵ツエッペリンである。眠られぬ一夜を熟考に熟考を重ねて、遂に彼が七年間、全力を擧げて建造したものを、今ここに破壞を命令する決心をすることは、この老發明家にとつて、どれほどのものであるか。誰れかその胸中を察し得やうぞ。今ツエッペリンの考へてゐることは何であるか。併し、打ち下ろす斧の一擊一擊が、彼の胸底深く切り込まふとも、また鋸の一挺一挺が彼の心臓を切り碎かねばやまぬとしても、彼は泰然として屈せず、これに對抗して立ち、また冷嘲の眸のもとに毅然としてその勇敢なる態度を失はない。あゝ人間の心のいかに雄大で強靱であることか。

これによつて地上のあらゆる力と戰ふことが出來るのだ。さるにても人間の作つたものが、いかに脆弱なることよ、風の一吹きで破壞されるとは——

と書かれて、最後にはじめて、ドクター・フーゴー・エッケナーと署名してあつた。

『おゝ、エッケナー博士だつたのか！』

エッケナー博士は、近頃勞働問題の論評家として賣り出してきた經濟學者である。しかし、一面彼れは、神學と哲學を修め、流暢な文章は一家をなしてゐた。

昨日までの論敵は、俄然、ツエッペリンの人格を理解し尊敬してゐるのだ。しかも同じ町に住んでゐたのだ。

數時間後、いつものやうに庭園で植木の手入れをしてゐるエッケナーの許へ、何の知らせもなく、ツ

なつて、飛行船を弄ぶ。

急報によつてツエッペリンが現場へかけつけたときは、あの美しい船體は見るかげもなく揉みくちゃに地上に叩きつけられ、無數の金屬片の殘骸と化してゐた。

第二號船の難破——。

「經驗のないためか、愼重を缺いだのか、强風の中で上昇して行つて、不安定な空氣中で船體がピッチングを始める。舵で押へやうとするために餘計に搖れが大きくなつた。そこでモーターが止る。今度の事故は、それ丈けの事だ。構造に間違ひはなかつたし、不時着陸も、うまくやつてのけたぢやないか」

ツエッペリンの勇氣は決して衰へなかつた。冷靜に、金屬片の中に立つて、跡片づけを指揮してゐた。

『もつと作つてやるぞ』

と、白影の老人が、作つては潰れ、注ぎこんだ金は空しく消え、もう誰れも彼れのためにマークさへ出そうとせぬのに、青年のやうな熱情で、

『眞劍に考へねばならぬ。第三號船をすぐ作つてやらう』

と宣言した。

莫逆の友

『また惡口だらう』

二號飛行船の壞れた翌日、フランクフルタア・ツアイツング紙をとり上げてみた。つづけさまに、彼の仕事を攻擊し、論説として、銳い筆鋒で非難を止めぬドクター・イーは、この難破を、どう扱つてゐるだらうか。

ツエッペリンは、一行一行、讀んでゆくうちに、

友、この人ありてこそ、ツエッペリン逝きて後まで、大飛行船は世界の空を雄飛したのだ。

『是非やつて下さいよ、私は全力をあげて建造費を求めてみます』

と度重なる辛い金策をもう一度ウエルランブルグ國王に縋つてみた。プロシャ陸軍にも政府への斡旋を乞ふてみた。富籤發行がもう一度だけ許可になる。こう聞いて元氣づいた彼は、ZⅢ號、第三號船の建造にとりかかつた。

第三號船成功

第三號船は、同年十月に完成した。

構造は第二號と殆ど同じだつたが、長い船體は、高速度を出すと横に外れ、動揺を始めることが判つきてたので、船尾に大きい安定翼をつけた。矢の羽根と同じ原理で、横ゆれや、縦ゆれを起さぬやう二重の水平翼と、垂直鰭をつけたのである。

『ツエッペリン飛行船についてどう思ふ？』

軍部では、今まで、この發明を氣狂ひ扱ひをしてゐた人々までが、どうやら今は、伯爵の眞劍さに惹かれてきた。

『十月九日の試驗飛行を見たが、素晴しい安定だつたよ』

『十日の日には十二メートル秒の速力を出したつて云ふぢやないか、僕らは、第二號が壞れて、すぐ代船を拵へると聞いたとき、何て堅意地な發明狂だらうと内心嘲つてゐたが、あの自信の強さには頭が下るね』

冷淡だつた軍部の内でさへ、このやうな同情者が出てきた。

エッペリンが、訪れてきた。

　フロックコートを着て、絹帽を手にした正式訪問服姿の伯爵は、

『エッケナー先生ですね。突然に訪ひまして』と鄭寧に挨拶をした。

　まさか、伯爵が、やつて來るとは思ひがけてゐなかつたエッケナーは、

『植木いぢりをしてゐたので、御免下さい』と庭の一隅に導いた。

『先生、私は、多年、財産を失ひ、人智の限りをつくして建造してきた飛行船を破壊し、もう斷念しやうかとさへ思つたのですが、今日の新聞に貴方が、論調を改めて激勵して下さつた。有難かつたです』

　と論敵とは云へ、公明正大なこの理解と好意に對して、御禮をのべる伯爵を、エッケナー博士は、

『いや、そう仰言られては恐縮です。私の反對は、氣象學上の點から申し上げてゐるんです』

　と答へる。ツエッペリンは、また、この發明は、國家のために、どの位大切であるか、是非とも完成せねばならぬ性質のものであるかについて説明した。

『もし、氣象學上の缺點があるやうなら、先生、一つ私と協力して、その點について御教へ願へませんか』

『いやよく判りました。

　承つてみると、飛行船は成功を疑ふ必要はないと思ひます。よろしい、不束ながら私も御力添させて頂きませう』

『えッ、御承知下さる。これは有難いことだ』と、改めて二人は握手を固く交はした。

　昨日までは、見ぬ敵、今日は心から相許す莫逆の

飛行に成功した上で實施して頂きたい』

陸軍當局は、どこまでも、實績を見た上でとの肚だつた。

しかし、もう誰も馬鹿扱ひはせぬ、氣狂ひ爺とも呼ばぬ。形勢は有利になつて行つた。

勝利か

『まだ安心は早いぞ。二十四時間飛行が關ヶ原ぢや』

ツエッペリンは、技師をはげまして、第四號船の設計と改良に沒頭した。その間にも冬の烈風は格納庫を破壞し、納めてあつた三號船に一ヶ月もかかつて修理せねばならぬ大破損を與へたり、このために新造船の着手が遲れたり、なかなか思ふ樣に捗らなかつた。

一九〇八年六月二十日、「飛行船の將來」と云ふ大きい問題の運命をかけたLZⅢ號、卽ちツエッペリン第四號船が竣工したのである。

船體は、ずつと大きくなつて、一萬五千立方米となり、積載力も增えて十七トンになつた。百五馬力の新モーターを二臺据え、船體下部に三角形の龍骨が通廊となつて、ずつと丈夫になつたし、安定翼や舵の面積を、前より增したので、安定もしつかりした上に操縱性も、よくなつた。

『この飛行船こそ、我々の運命を決するものだ』

銀色美はしく、厖大な姿を現はした第四號船を仰いで、ツエッペリンの胸中には、深く決するところがあつた。この新造船こそ、政府の要求する二十四時間飛行をやりとげねばならないのである。

もし成功せんか、硬式大飛行船の將來は、あらゆる反對論者を沈默させて、隆々と興るであらう。そ

故郷のウエルランブルグ國では、
『この新發明を素知らぬ顔で援助せぬベルリン當局は無能だ』と、攻撃さへ新聞に書き立てる有樣だつた。これは政府も默つてゐるわけにゆかなくなつてきた。

とりあへず五十萬マークの飛行船研究助成奬勵金を追加豫算として決議された。そこで、ボーデンゼ湖上に新らしい浮格納庫を作り、もう一隻の新造船に着手することに決定したのである。

『どうやらこれで、俺の仕事も目鼻がついてきたぞ』

ツエッペリンは一層精を出して働いた。

初飛行にボーデンゼ湖上を三時間でも飛ぶことの出來た三號船は、一九〇七年（明治四十年）十月、出來たばかりの浮格納庫から曳出され、八時間に三百五十キロメートルを悠々飛んだのである。

勝てば官軍――ツエッペリン飛行船に對する政府の信用は俄かに高まつてきた。

この年の十月、政府は、内務大臣を議長とし、各大臣、參謀總長、技術將校を加へて飛行船事業奬勵案を建議した。

『ツエッペリン飛行船は國防並びに、ドイツ工業界發展に大いに貢獻するものと認める。そこで本委員會で、一、新造船一臺の建造試驗費用四十萬マークを提供する、一、この新造船と現三號船を二百十五萬マークで購入する。但し内五十萬マークはツエッペリンの功績と私財を支出したことに酬ゆるため伯爵個人に與へる。以上を提案する次第であります』

『贊成』『贊成』

滿場一致で可決され、議會でも承認した。

『但し』陸相は口を挾んだ。『飛行船が二十四時間

『おめでとうございます、伯爵』
『有難う。この日に、この大飛行をやる事を宣言できるのは、わしの最も光榮に思ふところだ』
七月七日、第七十回目の誕生日の祝賀宴は華やかな勝利の宴でもあつた。
一年前まで、冷笑し、嘲笑し、精神病院ゆきだと罵つた人々も、スヰス訪問飛行の成功が一たび傳はると、掌をかへすやうに、彼を賞讃しはじめた。中には、あまり現金なので、苦笑したくなるやうな連中もあつたが、七十と云ふ人の長い道を歩いてきてあらゆる苦難と、試煉を通つてきた伯には、人の世の姿に何の愛憎もなかつた。
ただあるものは、自己の本分に忠實に、少しでも國家に有用でありたいとの念願のみであつた。
あらゆる方面から祝詞が殺到した。ドイツ各種團體、協會、大學から祝詞を持つて代表者がやつてくる。外國からの電報、手紙が山とつまれた。
都市は爭つて、名譽市民に伯を推薦し、民族の誇り、ドイツの英雄であるとして祝ひの言葉を捧げてきた。ウエルテンブルグ國王は、「藝術と科學のための誇りとして」黄金文化勳章を授けられ、勝利の榮冠はしつかと、ツエッペリン伯の頭上に戴かれたかと見えた。
然り、この榮冠は、果して老伯爵の頭上にしつかと載せられたであらうか。
待望の二十四時間飛行の日はいよいよ迫る。これさへ成功したら、勝利はツエッペリンのものだ。
伯の生涯で、最も劇的な一瞬なのである。
八月上旬、二回ばかり出發したが、モーターの小故障ですぐ引かへし、四日になつて、誇らかにLZ

の代り、もし失敗せんか。ひとりツエッペリン老伯爵が、冷罵と嘲笑のうちに葬り去られるだけでない。國防の利器たるべき飛行船は永久に祖國のものとならないであらう。

數回の小飛行を試みて、性能の小手調べを終つた四號船は、決然と唇を閉ぢて、ゴンドラ内に上る老伯爵の胸裡に描かれた大飛行のため、七月一日の朝空に舞ひ上つた。

大膽にも、晴れわたる紺碧の空をかすめアルプス連峯、白雲を戴く彼方へ、船首を向けた。葉卷形の影をコンスタンツ、シャフハウゼンの野山に投じつつ、ライン河上を飛びつづけて、アーレの合流點に現れた。

『おお、ルツエル市が見えるぞ』

船上には歡喜の聲が湧く。ここ南ドイツのアルプス高原の空は晴れ、避暑客や觀光客は、高原に三々伍々ピクニックをやつてゐたのであるが、異樣な爆音が天の一角からひびいてくるのを耳にして。

ふと仰ぐ空には白銀と輝く巨大な飛行船が、悠々頭上に旋廻しつつ、やがて東北へ飛び去つてゆく。

飛行船の勝利！　今こそツエッペリン十年の苦心は酬ひられたのだ。かくて、ホルゲンバス、チューリッヒを經て、夕方になつてその雄姿、ボーデンゼ湖上に歸着したのである。

かくて十二時間飛行、成功した。ツエッペリン飛行船の成功、この報は忽ちのうちに、電報を、電話を總動員させて、世界中へ、「新世紀の勝利」のニュースとして傳へられた。

次は二十四時間飛行だ。政府の要求をみたすための大飛行だ。

船長は突嗟に決心した。

『着水用意、各員持場につけ』

ああ、勝利は、ここで再び暗雲に包まれるのだらうか。

エヒターデンゲンの悲劇

しかし、不時着水は堤防に挟まれたラインの河流上に巧みに行はれた。

『大飛行は失敗か』

人々は飛行船が降りたと聞いて心配したが、數時間後、修理を終つて再び夜空に昇つてゆく勇ましさに、ほつと安堵の胸を撫で卸した。眞夜中マインツ市の上空にかすかな爆音を殘し、動く星かと仰がれる光を曳いて、歸路についた。

マインハイム附近まで飛んできて、この分でゆけば、成功疑なしと、船上の乘員は、美しいラインの夜景を見下ろしてゐたとき、

『左舷モーターが變調です』

『なに、又故障か』

早速調べてみると、軸承が減つてゐるらしくゴトンゴトンと妙な音をたてる。

『こりや一寸した故障でない』機關長は、直ちに決心した。『オーベルテユルクハイムに着陸して、あすこのダイムラ工場で交換する外ありません』

『よろしい。そこまで殘る發動機でゆけるか』

『速力は可なり落ちますが、ガソリンは十分あります。』

『では』船長は、操縦者に命令した。『コースをかへシユツトトガルトへ向け』

『承知しました』

皿號が、希望の朝暾を浴びて眞青の夏の半空へかけ昇つて行つた。

目ざすは、ライン川に沿つてマインツに至つて引返す航程七百キロメートル、二十四時間の大飛行だ。

『成功を祈ります』

『無事歸つて來るのを、心からお待ちしてゐますよ』

數千の民衆は、世紀の巨船がスタートするとき、熱狂して見送つた。沿道の市民は、朝早くから仕事も手につかず、戸外へ飛出し、屋上へ登り、ハンケチを持つて、雄姿の現れるのを今か、今かと待ちうけた。

村落でさへ、軒に國旗をひるがへし、教會堂の鐘に巨船來ると祝福の音を空に向つてうち鳴らした。

轟々二百十馬力のモーターはラインの溪谷にひびき、ヒヤフハウゼンから、ライン河に沿ひつつバーセルの上方に來た。正午の太陽はさんさんと船體にふりそそぎ、飛行は順調につづいてシユトラスブルグの上空をすぎ、シユバイエルを通り、夕陽傾くころ、オッペンハイム附近までやつてきた。

『船長、ガス壓力が減少してゐます』

調氣係はメーターを見ながら叫んだ。正午ごろ太陽に照されてガスが膨脹したので、船體がぐんぐん上昇するため、相當のガスを放出したのが原因で、夕方冷氣が襲ふころになつて、ガスが收縮しはじめたのだ。

『水を棄ていッ、砂を棄ていッ』

バラストは投下され船體の降下を防いでゐるとき

『あッ、發動機の故障だ！』

片舷のモーターは、次第に力を衰へつつある。このまま飛行することは危險である。

ハハ、、ー』

見る見るうちに、飛行船周圍は、數萬の見物人が埋めつくしてしまつた。

午後になるころ、南の風が次第に募つてきた。南西の方が曇つてきた。黒い雲が湧いてきた。

『天氣が變りそうだぞ。修理をいそげ』

『風が強くならねばいいが――』

必死となつて作業がつづけられる。警戒の軍隊や警官が必死となつて繋留索を握つて、尨大な船體を風に立て直して安全を保たうと努力してゐる。

風はつのる一方だ。人と自然との格闘だ。突如、猛烈な雷雨が、叩きつけるやうに襲つてきた。

大粒の雨は痛いほど群衆の頭上から降りつけ、吼え狂ふ巨獸のやうな突風が、ひつきりなしに、西側から、吹きつけた。

LZⅢ號の、大きな腹を押へつけ、押へつけ揉み下ろした。

もう人力の及ぶところではない。繋索は、プップッと切れる。ごうッと物凄く一陣の突風が唸つたと思ふと、巨大な飛行船は忽ち吹き上げられて、百メートル位まで跳り上つたと見る間に横ざまに、地上に叩きつかつた。一本の木が船體に觸れた。瞬間、天も地も一瞬、青白い光につつまれ、轟然とした音をたてて水素ガスは爆發した。

忽ち赤い焔が天に吐き上げ、恐ろしい勢で全船體を包んでしまつた。

この義侠

すべてが一瞬であつた。

人の力が、いかに小さく、みぢめなものであるか

カールスルイエの上空から、大きく左へ舵をとつて、船首はシユツトツトガルトへ向つた。

風は次第に吹きつのつて速度は減つたが、どうにか飛行をつづけて、五日の拂曉、シユトツトガルトの郊外、エヒターデインゲンの野外に無事着陸したのである。

『おーい、出てみろよ、巨い飛行船が降りるぞッ』

『ツエッペリンだァ』

『飛行船だ』

近所の人ばかりでない。シユトツトガルトからも見物人が、始めてみる大飛行船を側でよく見やうと押しよせてくる。

急を聞いて駈けつけた軍隊も、繋留索を握つて、曉の南風そよかに吹く野外に横つてゐる巨鯨を守つてゐた。

『發動機の修理は午前中にすむ筈です。午後はすぐ飛び上つて歸る豫定ですから』

落ちついた口調で、ツエッペリンは、技師たちに修理をまかせ、本部と連絡のため程近いエヒターデンゲンのホテルへ出掛けて行つた。

『今夜は凱歌をあげて歸れる。二度の不時着陸はいい經驗になつた。あの巨大を飛行船が、このやうに手輕く野外へ安全に着陸できることを實證してやつたやうなものだ』

とツエッペリンは極めて冷靜がつた。

一方現場では、刻々と見物人が增すばかり、『午後は飛ぶんだつてさ、それまで待つてやうぢやないか』

『そうかい、そりや是非見なくちやならん』

『又とない機會だ。わしは辨當を持つてきたぞ。ハ

あるまい――』
と、奮闘と困窮の中に、ただ將來の希望をかけてきた事務所に入つてみると、その机の上に、何かあつたらう。
『や、これはッ』
そこには、山とつまれた電報があつた。速達があつた。
『心配するな、仕事をつづけよ』
『資本金はいくらでも出さう』
『僅だが別送一萬マーク御嘉納あれ』
『……』
一通、また一通、どうも皆老伯爵の悲運を慰め、援助を惜まない獨逸民族の俠氣が溢れてゐる。
民衆は、遂に偉人を見出したのだ。不屈の魂、高潔な人格を知つたのだ。灰燼の中から尊敬と信頼を燃え上らせたのだ。
ツエッペリンの祖國愛が、民衆の胸にひびいてきたのだ。
成功から失敗へ、悲嘆から感激へ、あまり今日一日の變轉の目まぐるしさに老伯の心身は綿のやうにつかれ切つた。が昂奮と、感激とは、ひしひしと、人生のあらゆる試煉にたえてきた彼の魂を搖り動かした。
『よし、やらう全國民の熱誠に答へるために――』
折しも、この奇蹟的な出來事に夢ではないかと駈けつけてきた部下の一同も、各方面から倘ほ、續々と援助の手をさし伸べられてゐるのを知つた。
『大學生たちは、街頭演説をやつてゐますよ、ツエッペリンを再起せしめよつてね』
『學童がお小遣を使はないで寄附にきましたぜ』

を示した一刹那である。

駈けつけたツエッペリンは、見よ、累々と重り合ふ金屬片、焼けただれ、焦げつくしでめちゃめちゃに歪み曲んだ巨體の殘骸、まだ所々に、ぷすぷすと燻つてゐる餘燼の中を、白髪の頭を垂れて靜かに歩みを運んだ。

『……』

一言も語らない。だが、急に年を老つたことを感じ、頭の中は激しく亂れ、生涯の希望の消失を知つたツエッペリンは、默つて踵をかへして、停車場の方へ戻つてゆく。

道々、澤山の人々が、見知らぬ人々が、口々に悼みをのべた。慰めの言葉をかけた。が、今は耳に入らなかつた。

フリードリツヒスハーフエンに歸りつくとそこには、やがて記録を作つて凱旋する飛行船と、ツエッペリン伯を迎へるための旗旌や緑門が、悲報を知つて急に取片づけられてゐたが、はがし忘れたか、ポスターが雨にぬれて、風に吹かれてゐるのが一層佗しい。

『この事件は絶望的である』この世の人とも思へぬ相貌で、ツエッペリンは、力のない足どりを事務所へ向けた。『構造に缺點はない。が、どんな天氣にも飛べる。目的地にゆける性能の飛行船――それから何と遠いものだつたか』

恐らく政府は買上げを中止しやう、もう援助も望めまい。ここまで來て、放棄せねばならないのか。

ツエッペリンは、暗澹たる氣持で、事務所へと入つた。

『この部屋から、もう二度と飛行船が生れることは

とほめたたへ、手づから黒鷲勳章を老伯の胸間に飾つたのである。

輝かしい勝利、

上は皇帝から、下、民衆からの讃美、湧き上る俠援――。

『だが、わしはこれに甘んじてゐていいだらうか。いや、そんな事は良心の許さぬことだ』

民衆は、いつ讃美の聲を呪咀にかへるか判らないのだ。國民的熱狂が大きいほど、一朝冷却し去つて反くことも考へられる。

『我々は困窮に屈しなかつた。同じようにこの榮譽に甘へてはならぬ。

IZ四號の失敗は明らかに、飛行船が天候に對する弱點を曝露したものだ。これを改めなければ、眞の軍用には提供できないぢやないか。

我々は冷靜に、謙讓に、技術の改良に努力しやうではないか』

老伯は、新會社員を集めて熱誠をこめて說いた。

そして、いよいよ眞の飛行船時代へ驀進しやうとするのだ。

第三章　戰雲に駈る

カイゼルの招宴

フリードリッヒスハーフエンの工場では、人々は蟻のやうに働いた。悲運の第四號と同一第五號船は一九〇八年（明治四十二年）の春に完成した。

『同じ作るなら、全く新設計でやつたみては』と一

富豪から五萬、十萬と纏つた大口もある。數日にして、六百二十餘萬マークに上つた。

『この金は一マークだつて無駄に使つちや國民に濟まぬ、再び失敗をくりかへしては申譯がない』

と政府と折衝して「飛行促進ツエッペリン基金財團法人」を設けた。このうち、三百萬マークでフリードリツヒフハーフエンに飛行船製作工場を作り、これを會社にして「ツエッペリン飛行船製作有限責任會社」を組織した。

勿論ツエッペリンは社長であるが、商務參與官コルスマン氏が入つて取締役會長となつた。このコルスマン氏の父は曾つてツエッペリンの不遇時代アルミニュームを、無償にて提供してくれたベルグ氏である。

また往年の倫敦エッケナー博士は、親交を結んで以來、ツエッペリンの意中の人であつたが、宣傳と普及のため招かれて就任し、デニウル工學博士が技術部長の椅子についた。

轉禍爲福、ここに新らしい陣容は成つた。その上陸軍大臣は、

『あれ丈け飛へば立派なものだ。新に第五號船が出來たら購入することを約束しやう』と述べたし、ドイツ技術協會では、技術最高メタルを贈呈してきた。

いや、もつと輝かしい光榮は、皇帝カイゼル自ら十一月にフリードリッヒス・ハーフエンを訪問して親しくツエッペリンを引見し、

『君は世紀の偉人だ。

愛國的義務をなしとげると云ふ事を自ら實踐し、模範を示してくれた。獨逸國民に代つて朕は、君の成功を祈る』



したことは、伯の確信をいよいよ高めた。

そして、第三號船と共に二百五十萬マークで陸軍へ引渡され、直ちに第六號の建造が進められた。

『今度の新造船でベルリンを訪問しやう』

と發表して、待呆けを喰つて御機嫌の悪いカイゼルに約束した。

その年の八月、出來上つたＬＬ第六號はプロペラの驅動に新らしい工夫をこらしてゐたので、もつと十分試驗をしたかつたが、氣の短いカイゼルから矢のやうな催促だ。

よし行かう。

敢然とベルリンへ向つて出發し、途中豫定のビッターフエルドに着陸し、ツエッペリンは、船室に立つて、晴れの首都入りを空中から、微笑を以て熱狂する市民に答へた。

部で云ふ人もあつたが、彼は
『いや、第四號は炎上したが、構造的に缺陷を認めてゐない。もし缺點があるとしたら飛行中の動力學的の點だ。それは同じものを作つて、もつと研究すべきである』
と主張して、自ら試驗と研究を重ねやうとしたのである。

五月二十九日、新造第四號は、行先きも告けず、北方へ向つて飛び出した。
『きつとベルリンへ來るに違ひない』
この噂が忽ち擴つて、ベルリンでは、氣の速い都會つ子は、テルペルホフ飛行場へ集つてくる。
夥しい群衆のなかには、何とカイゼル並びに皇后が、皇子、皇女を伴つて臨場してゐたのだ。
ところが、もう來るか、來るかと待つてゐる興奮の最中に、
『ツエッペリン飛行船はバックフエルトから、引返した』とのニュースが來た。
『何だ、もう百キロほどなのに――』
『待ち呆けか』
と、不平たらたらで人々は引揚げてゆく。カイゼルの御機嫌も頗る斜めだつた。
だが、ツエッペリンにしてみれば、始めから、ベルリン訪問などを考へてゐなかつたし、多數の人々がテンペルホフへ待ちうけてゐることさえ知らなかつた。
歸途ガソリンが缺乏してゲッピンゲンに降下し、その際、梨の木に船首を打ちつけて破損したが、直ちに修理して、翌日無事歸還した。
この相當、不安定な天候下に於て野外飛行の成功

し、この間デルレック海相に會つてみたが一向氣乘りせぬ樣子だ』

これでは、折角の飛行船も寶の持ち腐れだ。そこでコールスマン取締役は一つの案を思ひついた。

ドイツ飛行船航空輸送會社——略稱デラーグ——を設立し、この會社から飛行船を註文し、航空船で輸送事業を行ふと云ふのである。

勿論、こんな各都市間の短いところで飛行船で定期航空をやつても營業はならぬが、何しろ全國民のアイドールであるツエッペリン飛行船に、旅費さへ拂へば乘れると云ふので、人氣を呼び、各都市の市長二十七名が監査役となり、三百萬マークの新會社が出來た。

デラーグの註文で出來た最初の旅客用飛行船は、「ドイッチランド」號と命名され、全容積一萬九千三百立方メートル、百二十馬力の發動機三臺を備へたものであつた。

この會社は、デュセルドルフ市の郊外、ゴルッハイムの森林近くに格納庫が設けられ、一方、ボーデン湖上の浮格納庫は廢止されて、フリードリッヒスハーフエンの野原に繫留柱を建て、格納庫を設けるなど、飛行船取扱ひ技術も進步してきた。

かくして、全ドイツ民衆の期待と、新時代の歡喜を浴びて、「飛行船時代來る」と新聞紙は大々的に報じ、世界の眸は、この巨船の成果に向けられてゐた。

だが、幸運は長くつづくであらうか。輝かしい航空時代はやつてきたであらうか。

慘又慘巨船の最後

近代大都市の上空に浮ぶ銀の巨鯨——市街は人で埋れ、サイレンは鳴り、國旗はひるがへる。

カイゼルは、ツエッペリンを宮殿に招いて一夜の盛宴を張つた。そして宮廷の露臺にカイゼルと相並んで立ち、熱狂する首都の市民の歡呼に答へた。

『私はいま光榮の絶頂にゐる。ますます責任の重となつたことを自覺せずにおれない』

と彼は語つてゐる。

さて、第六號は、ベルリンを出發し歸途についたが、ビュルツイッヒ附近までくると、新らしい鋼帶式傳導裝置が壞れてプロペラーが飛んだ。

そして羽根が船體を破つて、ガスが洩れはじたので、已むなく不時着した。

『またエヒターディンゲンの二の舞をやるぢやないか』

誰も彼も、非常に心配して三日間吹き荒れる突風の中で、空模樣を眺めて修理をいそぐのであつた。

しかし、幸なるかな、今度は無事離陸して、フリードリッヒスハーフエンに歸りつく事が出來た。

一九〇九年は、どうにか成功の記録を飾つて暮れて行つた。

デラーグ出現

『さて、どうやら飛行船は成功らしいが——』

ツエッペリン會社の幹部では、會社の經營について相談をつづけた。

『いかに飛行船が良くても買手が無くちや、あとの建造が出來ないんだ』

『軍の意嚮はどうなんです』

『今のところ、陸軍は、これ以上豫定はないやうだ

『今度こそ立派な成績をあげる飛行船を引渡すぞ』
ツエッペリン會社では必死となつて新造船、第二ドイッチランド號の建造をいそいだ。
『こう事故がつづくと、又しても世間で飛行船に對する信用が無くなるから――』
『いや、世間では、もう大分飛行船の性能について疑問を抱いてゐるやうです。何しろ一年間に三隻も失つたのですらねえ』
『そうだらう。だが――』ツエッペリンは、相變らぬ冷靜と、樂天的な態度で『我々はそのために自身で技術を疑つてはならない』
と一層研究に研究を重ねて、一九一一年三月三十日、第八隻目の新造船が生れた。
悲運のドイッチランド號と同型で、全長百四十八メートル、三臺の百二十馬力發動機を有してゐた。
この飛行船は、五月末まで、三十回にわたつて、飛行し、一旦失墜しかけた信用を、漸くとり戻しかけた。
が、何たる不幸、格納庫から引出すとき、誤つて扉に船體を打ちあてて大破し、遂に解體の已むなきに至り、デラーグ會社は、休業することになつてしまつた。

繼續か、中止か

デラーグ會社にとつては、まさに存亡の秋だつた。
同時にツエッペリン會社にとつて、何度となく重役會議が開かれた。
『我々は、慈善事業でやつてゐるんぢやない。技術的に澤山の疑問のある飛行船を、この際斷念した方が、よいと考へる』

ツエッペリン伯が十五年の心血を灑いできた愛兒は、健やかに育つてゆくことを、どんなに祈り期待してゐたであらうか。

然るに一九一〇年は、ツエッペリンにとつて、再び悲運と失望の連續であつた。

陸軍第二號飛行船――元のLZ五號船は、この年の始めにジーゲン附近で飛行練習中、天候に祟られて不時着し、突風のために眞二つに折れてしまつた。

つづいて七月には、デラーグ會社の旅客船ドイツチエランド號は、空の初旅に祝福をうけて出發したが、俄かに天候が惡くなり、加ふるにモーターは故障を生じ、强風に吹き上げられたので、已むなくガスを抜いて降下した。ところが篠つく雨が船體を重くし、乘員は必死となつて、バラストを捨て、お終ひには美しい客室内の椅子から机まで取外して投下して浮揚力を保たうとしたけれども、遂に及ばずして、ハイリブルグの山林中に落下してしまつた。

幸ひ、旅客に死傷者はなかつたが、眞青になつた人々は生きた心地もなく、樹木の中に粉碎されてゐる船體の下から逼ひ出した。

デラーグ會社では、發端の失敗をとり戻すべく、さきにベルリン訪問に成功したLZ六號を購入して、船體を長くし、第三のモーターをとりつけ、美事にバーデンバーデンの往復に成功した。

『幸先きがいいぞ』

と喜んだのも束の間だつた。

十月の中頃、デュセルドルフ格納庫内で、整備員の誤りから火災を起して燒失してしまつた。

しかし乘りかけた船だ。デューグでは直ちに第三の飛行船を註文した。

『とにかく、今のところで、ドイツには飛行船の友は一人もゐない』と反對論者が叫ぶと『たが、ツエッペリンの友はゐるぞ』と繼續派の人々が答へる。

『とにかく、我々は飛行船そのものに、倘一抹の不安を免れないが、ツエッペリンその人の信念と、熱に對しては、無限の尊敬を拂はねばならぬ。

そのうちに、もう一隻だけ註文したいと思ふ』

コールスマンが決を求めた

これには誰も不賛成を唱へない。

かくして、ツエッペリン第十號シュワベンランド號が建造されたのである。

偉なり新造船

シュワベンランド號は、一九一一年六月二十六日に竣工したもので、全容積一萬七千八百立方メートル、全長百四十メートル、發動機は更に強力な四臺で合計四百三十五馬力になつた。

そしてデラーグ會社では、前の苦い經驗に鑑みて厄介な地上操作を安全にするため、デーデンオースに格納庫を設けて、ここから發航することにした。

最も苦手の天候については、その時代は航空氣象學の發達してゐなかつたから高空の模様がすぐ判らない。それで、夏の比較的天候に惠れたときを選んで就航した。

かくて、シュワベンランド號は、毎秒二十一メートルの高速力を出した。

『二十年前シュリーフエン將軍に約束したスピードがやつと出せるやうになつたぞ』

ツエッペリンは、素志が、やつと一階程についたことを知つた。思へば長い長い苦闘の歳月だつた。

『見込みのない事業を繼續することは、事業家として堪へられぬことだと思ふ』
と強硬に中止を、唱へる一派があつた。
『しかし、我々はツエッペリンと共に進むべきぢやなからうか、打ちつづく不幸にも、動搖せぬ彼の信念、事故の責任者に對しても、慰めと勇氣づける彼の態度を思ふと、ここで我々は事業を打切ることは老伯爵に對して氣の毒でならぬ』
と應しうした。
『しかし飛行船は、技術上からみてどうですかな、第一性能が劣つてゐる。第二に氣象に對して餘りに弱い、第三に地上の取扱が不便だ。今迄の事故は皆この原因だ』
『或はそうだらう。だがモーターは年々改良されつつある。マイバッハ博士は、一臺ごとに強力で輕いモーターを製造してゐる。間もなく性能を向上し、どんな天氣にも飛べるやうになると思ひますがね。地上の取扱ひだつて要するに熟練の問題で、根本的に飛行船を疑ふことは出來ないと確信しますよ』
『しかし、差し當つては、會社は事業を中止すべきだと思ふ。經營上から見て――』
『いや、然し、國防と云ふ事を考へると、多少の犠牲――つまり私の犠牲を拂つても軍用飛行船を促進すべきが我々の義務だと思ふね』
事實飛行船の性能は、次第に向上をみせてゐた。
第一號には一馬力二十六キログラムもした重い十五馬力のモーターをつけ、辛じて二十一キロメートルの速力だつた。それがドイツチエランド號では、一馬力三キログラムの輕さとなり。七十キロメートルの高速力を出すやうになつたではないか。

力のある飛行船を希望した。
一九一四年には、L三號が出來上つた。これは二萬二千五百立方メートルの、六百三十馬力の强力なモーターで、七十キロの速力を出しうるのだつた。
『これなら、軍用として使へるぞ』
『そうだ、この間の試驗飛行ぢや三トンの武器をつんで三千メートルまで上昇したからな』と軍當局も、飛行船の性能について確信を抱いた。
然り、その時代、ブレリオ單葉飛行機が、英佛海峽三十五キロを、やつと横斷したばかり、僅か二人乘の飛行機が、二、三時間飛ぶのが關の山だつた頃である。
將來のことは別として、今のところ、積載力や、航續力では、飛行機はとうてい飛行船に及ばない！
これが、航空界の定評であつた。しかもヨーロッパは、伊土戰爭、バルカン戰爭と打ちつづく戰火に不安と、危機は、ぢりぢりの國際的に迫りつつあるのだ。

大戰勃發す

かくて、ツエッペリン飛行船は、軍用として本格的に採用された。
フリードリッヒスハーフエンの工場は、日ごとに擴張され、リベットの音、ハンマーのひびきが、活潑にひびいた。
ツエッペリンは、既に、七十七歳の高齢に達してゐた。
もう今は、完成した道にあつた。あの苦しい金策や、反對者との鬪爭や、事故に對する不安はない。
エッケナー博士をはじめ、彼を信じ、彼を尊敬す

よくも、ここまで堪へてきたものだと思ふ。

シュワベンランド號は翌年へかけて、全く無事故で二百五十回の飛行に成功した。

世人の信用は、再び硬式大飛行船の上に戻つてきた。この好成功に刺戟されて、デラーグは、ヴィクトリアルイゼ號、ハンザ號、ザクセン號の三隻を加へた。

ザクセン號は、バーデンからウインナまで國際的大飛行を八時間で行つて「飛行船の勝利」を高らかに告げた。

陸軍當局も、この成功にいたく動かされた。シュワーベンランド號に同型の陸軍Z三號船が完成して引渡されるし、海軍でも長年の反對論を引込めて、Z型よりも大きいL一號を註文した。

L一號は、二萬立方メートルの容積を持つもので、試驗飛行のとき、フリードリッヒス・ハーフエンを出發して、ヘリゴランドの海軍基地を飛びこへヨハネスタールまで、三十四時間の繼續飛行に成功した。

『二十四時間飛行の要求に惱まされたのが、ついこの間であつたのに――』

この輝かしい成功にもまだ滿足はできなかつた。

一九一二年九月、もつと大きいL二號が出來上つた。直徑十七メートル、二萬七千立方メートル、全長百八十メートルの巨大なもので、百八十馬力のモーターを四臺備へてゐた。そしてゴンドラを連結する通路を船體內に設けたり、特色のある構造を有してゐたので、試驗飛行のときに、水素が爆發したりいろいろ困難も伴つた。

しかし、海軍では長距離軍用として、もつと航續

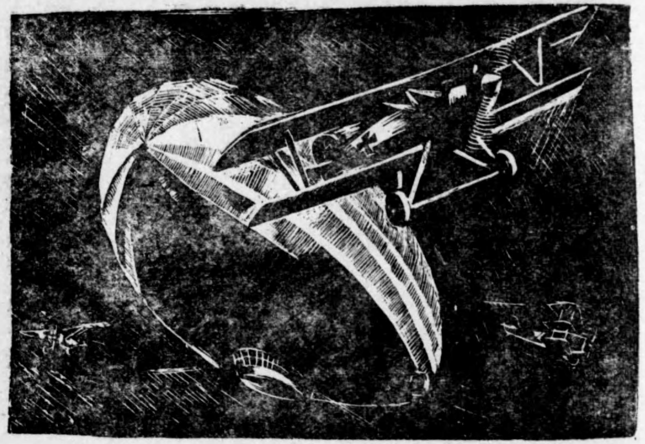
みに管理して、一隻の飛行船を六週間で完成する域に達した。

戰ひの第一年、卽ち一九一五年（大正四年）末までには、次のやうな多數の軍用船が作られてゐる。卽ち、ツエッペリン第二〇號から第四十號まで、廿隻に及び、陸軍用第五號船から十一號船まで、海軍第四號から十二號船まで、まるで魔法使ひのやうにあの巨大な飛行船 生み出されたのである。

これは、ただ技術の進歩だけのなし得たところであらうか。

否、ツエッペリンの偉大な人格の反映に外ならない。ただ國家のために、國防のためにのみ、飛行船の眞價を發揮させようと願ふボーデンゼ湖畔の巨人の精神力が、この著しい進歩を齎らしたのである。

る部下たちは、ツエッペリンの心を、そのままの心として孜々として働いてゐる。
　しかも、彼は、この飛行船を完成するまで金屬、瓦斯、發動機、計測器、球管の各部門について、ドイツの一流會社、工場、學者たちと協力してきた。
　グイムラー、マイバッハの兩發動機會社ベルグのアルミニューム會社、ノイハウゼン・クルップ等々……夥しい協力者を持つてゐる。
　この協同、この一致、それこそ劃時代的な發明を完成させたのである。そこには一片の私心もない。發明によつて利益を求めようとするのでもない。「國家のための飛行船、國防のために必要な航空兵力としての飛行船」だつた。
　そこへ、突如として、夏空に湧く雲の峯が、崩れ落ちて擴つた、夕立となつて降りしきるやうに、セルビアの一角、サラエボで射ち放たれた一發のピストルを合圖に、一九一四年八月、セルビアとオーストリアは、つづいてロシアは、イギリスは、フランスは、ドイツを中心として漠々たる戰雲が、舞ひ上つた。
　軍馬のいななき、進軍ラッパ、砲軍はきしり、ここに世界大戰は、それから五年にわたる長い人類相剋の幕をあけたのであつた。
　戰爭が起ると共に、陸軍飛行船は、直ちに出動した。海軍L三號船は、北海の空を飛んだ。
『もつと速い、もつと高く昇る飛行船を作れ』
軍は、ツエッペリン會社を督勵して飛行船の建造をいそがせた。
『今こそ祖國のために盡すべきだ』
ツエッペリン工場は、全能力をあげ、勞働力を巧



これがツエッペリン飛行船のイギリス本土空襲の最初の印象だつた。それは既にこの頃、物資の缺乏に苦しみ始めたドイツがイギリス本土を爆撃して、最も慘澹たる戰禍を海上に孤立する島帝國の住民に與へ、戰の終結を齎らそうとした手段であつた。

一九一四年には、ツエッペリン飛行船は、六隻が海軍に、四隻が陸軍に配屬されてゐたが、屢〻イギリス飛行隊の遠征で、格納庫を爆撃されたりしたので、大切な飛行船を失ふことを恐れて、容易にイギリス遠征の命令を下さなかつた。

しかしこの日、遂に決然「イギリス本土を討て」との命令一下、巨船は出動し、ノーフォーク州を襲ひ、ヤーマスとキスグスリン住宅街を脅かしたのである。

初めて、民衆の心に刻みこまれた空中艦隊の幽鬼

第三篇　世界への翼

第六章　大戰中のツェッペリン

ロンドン空襲

それは一九一五年（大正四年）の一月十九日の夜のことであつた。

外出先きから十一になる長男をつれて、英國グレート・ヤーマス市の自宅へ歸りをいそいでゐたセイヤーと云ふ男は、眞暗闇の空に、

『ごおーん、ごおーん』

と異様に唸る音をきいた。飛行機にしては、ちと音が違ふやうだ。空を仰いでも何も見えない。

『お父さん、恐いよう』

不氣味な音に、おびえる小供を抱へるやうにして二人切りの靜寂な街路を憑かれたやうに走つた。

とたん、頭上から一閃、また一閃、何事とも判らぬ混亂した音がして、地上に物の碎ける響が耳を壓した。

セイヤー親子の周圍は、金屬的な物音といろいろと碎け落ちる破片で一ぱいになつた。

二人は方向も關はず逃げ走つた。

一そつ邊には何物もなく、生き物は小犬一匹もゐなかつた。かうかうと崩れ落ちる響は、周圍が急激に破壞を始め、この世の終りかと思つた。セイヤー親子は全く生きた心持もなかつた。

飛行船はバラストを投下して、ぐんぐんと高度をとつた。

もう飛行機は追ひついてこぬ。

飛行船は全速力で驀進した。が、遙か彼方、燈火を滅して闇に沈む首都ロンドンは、S型のテームス河の輝きは消すべくもない。

『來たぞ、いよいよ、ロンドンだ』

リナルツ大佐の顔は始めて、ほころびた。

『投彈用意!』

大ロンドンは、恐怖のどん底だつた。東區、北東郊外へは、爆彈が雨と降つた。實際の戰果は、わづかに七人を殺し三十五人を傷つけたにすぎなかつたが、防空の飛行機九臺は空しく地上に舞ひ戻つてしまひ、地上は破壞と不安と、恐怖の中で呻いたのである。

あゝ、ナポレオン以來、外敵を一歩も入れないと誇る大英帝國の誇は、ツエッペリン飛行船の下に粉碎され、首都ロンドンは降る火の雨を浴びねばならなかつた。

『どうだ。俺の持論は正しかつたらう。飛行船でなくては、このやうな敵國の心臟をつくことは出來ぬのだ。この積載力、この航續力——だが俺はまだ不滿足だ。もつと速く、もつと高く、もつと遠くへ飛べる飛行船を澤山作らう』

ツエッペリンは、一旦隱棲したボーデンゼ湖畔の別莊を出て、老齡にも拘らず工場へ、つめ切つた。

六月九日の朝だつた。

『閣下ですか、こちらは飛行船隊本部ですが』

けたたましく電話が鳴りひびいた。

『昨夜ハル市を攻擊致しました。L九號をマシイ大

的な姿は、たへない恐怖と不安を與へた。

第一回の空襲は、結果に於て僅か四名を殺し、十六名を傷けたにすぎなかつたが、ノーフオーク州一帶に起つた恐怖は非常なものだつた。

つゞいて東海岸は、屢ゝ飛行船來るの不安に脅かされたのであつたが、天候はツエッペリンに幸せず二隻が難破して、新造に追はれ、本格的の空襲は決行されなかつた。

しかし、春が再び北海に戻つてくると、銀の巨鯨は泳ぎはじめた。

L九號は四月十四日タインサイント市を襲つた。

『是非ともロンドンを爆撃したい。イギリス人の心臟にメスをつきさしたい』

これが、ツエッペリンの念願だつた。

新造船は、晝夜を分たず工を急がれた。陸軍飛行船LZ三八號は、リナルツ大佐指揮して一路ロンドンへ向つた。

しかし霧と逆風のたみ、サウスエンドの上空まできて引返す外なかつた。

「汝、イギリス人よ、われらは既に來たぞ。又、すぐやつてくるぞ。お前等は殺されたいのか、それとも降服したいか、ドイツ飛行船」と青鉛筆でノートに書きなぐつて投下した。

リナルツ大佐は殘念でならなかつた。

五月三十一日、晴れた夜空を縫つて、ロンドンへロンドンへ向つた。

『飛行機ですッ、船長』

それは勇ましく駈け上つてきた英國防空飛行隊のムーロック中尉だつた。

『鬪ふな、高度をとつて振りはなせッ』

の公演を始めやうとしてゐるときだつた。初冬の空氣を樂んで人々が街頭に溢れてゐるとき、不氣味なサイレンの唸り、『空襲！　空襲！』

人々は算を亂して地下鐵へ潛りこもうとするときより早く、濛々たる煙、ライ・シーユーム座は眞二つとなり、十七人は粉々となつて慘死し、二十一名が傷き、ストランド座では四人が絶命し十五人が傷いた。

ロンドン・インの美しい古代硝子窓は、無慘に打くだかれ、ハットン・ガーデンからファリントン路へかけ一帶には、空魔の荒狂つた跡が殘つてゐる。

これぞプレイトハウッド大尉、マシイ大佐らのI一五號、十一號、十六號の大船隊の振つた猛威だつた。

ロンドンのみでなく、ブロークンスバーン、ハットフイルト、ソーンクリフ、ヘイス、タンブリッチ、ヴイクレーなどの都市も、それぞれ大なり小なりの被害を見、百九十九名の死傷者を出し、ツエッペリン禍は、いよいよイギリス國民の心を暗くさせた。

しかし、ロンドン市の防空も次第に充實し、高射砲や探照燈が、しきりと巨鯨を狙ひはじめた。

一九一六年（大正五年）になつて一月三十一日、L十一、十三、十四、十五、十六、十七、十九、二〇の八隻から成る大船隊が、ロングボローグとブレトン・オン・トレントの兩市に猛爆を浴せたのを最後に、今迄のやうな空爆を行へなくなつてきた。

このときもウット・ロウヴェ中佐の一九號は、高射砲の一彈をあびて船體を破損し、北海に落下してしまつた。

來合せたトロール船に救助を求めたが、

佐指揮し、多大の損害を與へましたが、LZ三十七號は、ベルギー海岸で英國の哨戒機のために撃墜されました』と報告だ。

さつとツエッペリンの顔は曇つた。

一臺の飛行船も彼にとつては愛兒にひとしい。

『今にみろ、やつつけるぞ』

彼は工場に命じて、晝夜兼行でＬ一〇、一一、一二、一三の四隻の四隻の空中艦隊をととのへてロンドン空襲を行はしめた。

だが天候とイギリスの防空火力のために、ロンドンに達したのみであつた。フエイエルブットラア中尉の指揮した十二號と、パテルゾン少佐の十三號船は、敵砲火のため燒失してしまつた。

『俺は屁古れないぞ！』

ツエッペリンは全精力を傾倒した。八月十七日、遂にＬ一〇、一一、一四號がロンドンに向つて、ウエンク大尉の十號船は美事ロンドン市の中心に達しマシイ大佐の十一號も郊外附近一帶を猛爆し、ロンドンは、火の海と化し、慘澹たる光景を呈したのである。

『この機を逃すな』

と追ひうちに、九月七、八兩日には、マシイ大佐が歴戰の手練を以て、百七十一名の死傷者は街頭に累々と横たはり、ロンドン市民は崩れ落つる家の下で、生きた心地もなく、防空の不備を訴へ、恐怖の中に蠢めかしめるに至つた。

ツエッペリン空襲！　それはロンドン市民にとつて夢魔であつた。

十月十二日の黄昏時、曇つた夕空はまだそんなに寒くないころ、倫敦のライシエーム座が「女の友情」

進攻したのである。しかしイギリス側の防空陣も整備され、必死と照らす探空燈の十字照射をうけて、シュッテ・ランツSL十一號は、エンフイルド附近で、防空飛行隊のロビンス中尉の飛行機の猛撃をうけ、忽ち巨船は炎々と燃え上り、カフレイの野に墜落し、ツエッペリンとして最初に英本土内に殘骸を曝す悲運をうけた。

しかも、それについて、超ツエッペリンL三三號は建造されたばかりの處女航空をロンドンの空襲に向つたが、地上砲火に射ちまくられ、九月二十三日東海岸に不時着してしまつた。更に二十五日は同じ超ツエッペリンL三二號を、ビルリシイ附近で射落されてしまつた。

もちろん、この間、ロンドンを始め、附近の都市は、數度の爆撃をうけて死傷者を多數出してゐるが相つぐ飛行船の喪失はさなきだに、材料不足に惱むドイツにとつて大きい痛手だつた。

十月一日、初秋の晴れた空、星屑の數まで、讀める靜かな夜、こんなときは、きつとツエッペリンが來ると、ロンドン市民は燈を消し、聲をひそめて戰恟々としてしてゐた。

果せるかな、イギリス人にとつて恐ろしい空魔王ハインリツヒ・マッシイ大佐は、常の如く一路ロンドンへ向つたが、防空砲火を避けつつハートフオードセーアの上空を、左に右に迂航しつつ、執拗に首都へ迫つて行く。

しかし、地上の花火と探照燈も、容易に目を放さない。

『出直しだ。緣起でもないサーチライトだ』

とマッシイ大佐は、チエスハント附近へ全彈を投

『船が小さくて乗員を收容し切れないから』と見すてて行つた。

ロウヴェ中佐らは「我等の最後が來た」と沈みゆく船體の上で、報告瓶を流し、そのまま全員壯烈な殉職をとげてしまつた。

三月末にはL十五號は、氣嚢に高射砲彈が命中して海上に落下し、ブレイスハウプト大佐以下乗員は捕虜の憂目を見たのである。

『よし、今に仇を打つてやるぞ』

ツエッペリンは、新らしい威力のある新飛行船の建造に、工場を督勵した。

陸海軍當局や、國民の間からも、

『ツエッペリン飛行船は何をしてゐるのだ』

『天候と高射砲には敵はないのか』

と、喪はれた飛行船の隻數を數へて、ツエッペリン飛行船の無力を非難するものも現れてきた。

このころ、主にゴータ爆撃機が代つて、イギリスを空襲しはじめ、相當の成果を收めつつあつたからでもあらう。

『飛行船に缺點はない。もつと、もつと作らねばならぬ』

ツエッペリンは、もう餘程齡をとり、健康も良くなかつたが、それでも屈しなかつた。

鬼船長の最後

一九一六年（大正五年）八月二十四日、百戰練磨のマッシイは、老伯の決意に感激し、再び決然ロンドンを襲つた。

『大擧して前進せよ』との命令をうけ、十六隻から成る大飛行船隊は、更に九月二日ロンドンに向つて

魔の權化だ』

あらゆる惡罵と、呪咀の言葉を老伯に向け始めた。中にも、老伯の心を痛ました宣傳は『ツエッペリン伯は不完全で、高射砲に無力な飛行船をして、強ひて空襲を行はせて、多數の同胞たる青年軍人を彼の名譽心の犧牲にしてゐるのだ』と云ふ言葉だつた。

戰爭已に三年、四面盡く楚歌、その上、國內の物資、食糧は窮迫して國民の心も、ややともすれば動搖しはじめるのだ。

今こそ、彼が年來の希望である二十隻の大飛行船隊を、イギリスの頭上に送つて、痛烈な猛爆撃を加へることだ。

そのために、新造船LZ四十八號以下を建造してゐる。

軍當局にも進言した。

次第に弱つてゆく健康、長い間の苦闘に、身心ともに疲れ切つてゐたが、病を押してベルリンへ赴くために、フリードリッヒスハーフエンを出發した。

見送りの人々の中には、

『いつになれば、英國を叩き伏せられますか、大空中艦隊が出來上りますか』

『一日も早くツエッペリンの威力を見せて下さい』

『飛行船は果して天候に無力なのですか』

と、ツエッペリンの口から、安心の出來る返事を求めた。

心持ち蒼白な顔を伏せ、白髪はいよいよ粗になりめつきり、老の衰へをみせたツエッペリンは、ただ一言

『暫く待て』

と叫んだのみであつた。

下して歸航の途についた。

が、このとき、こつそり飛び上つたイギリスの防空機を操縦するテンペスト中尉は、探照燈の光りをすかしてみると、

「見えるぞ、怨敵でござんなれ」

と巨船の上空に迫つた。

マッシイ船長が「飛行機だッ」と氣のついたときはもう遲かつた。

タ、タ、、、、、、、。

一直線に巨大な船上を通過しつつ燒夷彈を射ちこんだ。

と、焔が一列に走る。支那提灯のやうに赤々と内部から炎上した。

やがて船首は焔を吐き出した。火だ。一團の塊つた火だ。

ミドルセックス州ホッター・バーの野に、燒けただれた金屬片となつた。殘骸の中でマッシイ大佐以下は盡く殉職してしまつた。

『もつと、いい飛行船が出來ぬか』

『イギリスを、もつと空襲せないのか』

再び國民の中から、そうした非難が聞えてきた。

また、宣傳に巧みなイギリスは、ノースクリフ卿をして、あらゆる方法で、ドイツは人道の敵、平和の仇であるかの如く宣傳せしめた。

曰く「ツエッペリン飛行船は、軍事施設に何等の損害を與へ得ない」

曰く「ツエッペリンの空襲の犧牲となつたのは、無辜の市民である。か弱い婦女子と幼兒のみである」

曰く「ツエッペリン伯は人道の敵だ」

曰く「ツエッペリンは文明人の許すべからざる惡

ートル位まで上昇するやうにして頂きたい』と進言した。

『よし、君の希望以上のものを作らう』ツエッペリン工場は全機能を發揮して、改造に改造を加へた。

大戰末期に作られたL五九號は、容積六萬八千五百立方メートル、速力は八百キロをこへ、四萬三千キログラムの積載力を持つやうになり、九臺の發動機は合計千八百二十馬力を出し、それこそ、空中巨船の名に恥ぢぬものになつたのである。

ツエッペリンの愛兒とも云ふべき、ツエッペリン飛行船は、一九一〇年までに破壞また破壞を重ねて根氣よく七隻を作つたのであるが、漸く好運に惠まれてきた一九一一年には三隻、十二年に四隻、十三年に七隻と次第に建造能力をあげてきたのであるが、大戰中には、全能力を擧げて建造されたツエッペリン飛行船は次のやうに夥しい數に上つてゐる。

一九一四年　十二隻
一九一五年　二十六隻
一九一六年　十三隻
一九一七年　二十三隻
一九一八年　六隻

この八十隻に上る巨船建造が、物資缺乏に苦しむ四面重圍のドイツ國內で行はれた事は、一にドイツ航空技術の優秀、二に國民の意志の强固によるのであるが、また他方、巨人ツエッペリンの人格の反映でなくて何であらう。

祖國に奉ぜんと

祖國、戰に赴く！

老ひたるツエッペリン伯の胸中には、若き日の昔

ああ、動き出した汽車の車窓に眺めたフリードリッヒスハーフエンの大格納庫、これが、彼にとつて最後に眺めた生涯の埒だつた。

大戰中の發達

ここで、大戰五ヶ年におけるツエッペリン飛行船の發達について簡單に述べておこう。

すべて戰爭は、武器の急激な發達をとげさせるのであるが、ツエッペリン飛行船の進歩もまた著しいものだつた。

一九一五年には出來た陸軍用LZ三八號から全く面目を一新し、三萬二千立方メートルの巨船となり船尾は極度の流線形化し、複葉だつた尾翼は十字型の水平、垂直の尾翼に改められて、空氣抵抗を少くし、速力は八十キロにも達するやうになつた。

海軍用L二〇號は、もつと大きく三萬六千立方メートルで、一萬七千キログラムの搭積力を持ち、上昇力もよくなつた。

一九一六年中にこの型のLZが二隻、L型四隻が作られた。けれども、屢々惱まされた海上の荒天に耐へるため、同年の終りには、L三〇號が、五萬五千立方メートルの巨大さを持ち、發動機も二百四十馬力を六臺に増したのである。

かくて積載力は二萬九千キログラムとなり、四千メートルの上空へ昇られるやうになつたし、秒速二十九メートルの高速力を出す新鋭さを發揮した。

『しかし、これだけで十分ぢやないです』戰場から歸つたマッシイ大佐は『敵の防空火花や飛行機も進歩しましたからね。積載力を全浮揚力の六十パーセント位にして、モーターの力を藉りなくても六千メ

て、親獨的だつたアメリカをして、聯合軍側へ走らせる結果となつたのである。

果して、ツエッペリンの飛行船空襲は、非人道的だつたらうか、非文明だつたらうか。

戰爭學說の大家ジョン・フイシャー將軍でさへ、「最も苛酷なる攻擊手段を以て敵を最短時間に征服することは、むしろ最少の犧牲を要するのみなる點からみて、人間的である」と云つてゐる。

しよせん、戰爭は殺戮と破壞である。然らば、假借なき手段を以て、出來る限り速やかに戡定することは人道的である。

一九一六年、ツエッペリンは、この持論を以てホルウエッヒ首相に

『もつと飛行船とUボートを澤山配備して、攻擊をして貰はねばならん、そうすれば今年中にイギリスを參らすことが出來る』と、申言した。

が、ホルウエッヒ首相は、あまり飛行船の價値を信じてゐなかつた。

『しかし、飛行船の建造費は、戰果の割に嵩むのでねえ』

と、餘り氣が進まぬやうであつた。

『大體、あなたが、對英攻擊にブレーキをかけるやうなものだ』

とツエッペリン伯も、屈してゐなかつた。こんな事があつて、二人の間は、拙いものになつたと云はれてゐる。

戰爭が長びき、國內の窮乏が重壓を加へてくると國內政治にも、いろいろと動搖を生じた。一部に敗戰主義の社會主義の一派が暗躍し、政治機關は、幾多の影響をうけた。

佛戰爭の情熱が蘇つてきた。

　いまは、現役を退き、飛行船事業からも一旦は隱退して、靜かなボーデン湖畔に「回顧錄」のペンをとつて高齡をたのしんでゐたのであつたが、國難に直面しては、じつとしてをれなかつた。

『祖國は美しい、献身に價する』と立ち上つて、直ちに政府の要路に、書面を差出したのであつた。

『何でもいい、どんなつまらぬ役目でもいいから、もう一度働かして頂きたい』と、申請した。

　しかし政府では、この大發明家を老齡の偉人を、いかに國難と云へ、働かすに忍びなかつた。

『貴方の功蹟は、もう十分奉公の實を擧げられてゐる。靜かに、この國の英雄として御休養下さい』

　と答へたが、伯にしてみると、それでは不滿足だつた。

『いや、私の飛行船がどんなに活躍してゐやうと、それは、忠勇武烈なる陸海軍人のお手柄です
私は今何も關係してゐる仕事はないから全身、全靈を傾けて祖國に盡したいと思ふのですよ』

と、飽くまで努力を誓つた。

　そこで彼は、再びツエッペリン工場のために老齡も厭はず孜々として、計劃をすすめた。

『この戰爭は、勝ち拔かねばならぬ
祖國の安全のため、祖國の將來のために、戰爭目標を確立して邁進すべきだ』と說き、大飛行船艦隊を以て、一擧にイギリスを粉碎しやうと欲した。

『ツエッペリンのやり口は、まるで惡魔だ。罪もない市民を殺し、都市を破壞する文明の敵だ』――こう云つた非難が、巧みな聯合軍の宣傳上手に乘せられて世界中に渦まき、獨墺と同盟國のイタリアをし

支へ切れず、最も不幸な、最も慘澹たる結末が、民族の上にふりかかつてくるに先ち、一九一七年三月八日、ベルリンに於て、巨人は客死したのである。

あたかもこの日、新らたに建造したばかりの飛行船が、處女飛行を終へて、フリードリッヒスハーフエンに歸還し、格納庫中に引き入れるや否や、一天俄かに掻き曇つて嵐が來襲した。

南西烈風は、浪を起こし、風は吼えて、平和なボーデン湖上、山のやうな怒濤は岸邊を嚙んだ。砂は濛々と吹きあげられて、天地はまさに、暗澹たる有様となつた。

この時刻、はるかベルリンの客舍にあつて肺炎を病んでゐた老伯は、一生の意志力も情熱も、死の轉機には耐へられなかつた。

巨人逝く！

この悲報に接したフリードリッヒスハーフエンのツエッペリン飛行船製作合資會社では、格納庫上高く哀悼の半旗を掲げた。

しかし、吹き荒れる烈風は、この旗竿をへし折つて、半旗をひようひようと晦冥の天の彼方へ吹き飛ばしてしまつた。

この有樣は、聯合軍の不當なる非難や、國民の疑惑に對して「暫く待てッ」と叫んだ魂の如く、飛行船發達の將來に對する激勵ともみえた。

だが、この世紀の偉人すでになし。

カイゼルは、故伯爵のために、悼問使をその客舍に遣はし、遺骸をフリードリッヒスハーフエンに送るに當つては、特別仕立の列車を、警備するため一ケ聯隊の儀仗兵を特につけしめた。

かくて獨逸全國民は、ツエッペリン伯の逝去を悼

ツエッペリン伯の胸中には、若かりし日から培はれてきた政治的關心は、この齡になつても、決して衰へなかつた。

この祖國が臨んでゐる運命の急淵に立つて、ありし日の熱情は燃え上つた。そのためにツエッペリン伯と、政府とは屢〻意見が對立し、摩擦を生じた。

『何たることだ。眞の愛國とは何だと思つてゐるのだッ』

彼はもう一度、ベルリンへ赴いて、政府とよく相談し、大飛行船政策を遂行しやうとして、フリートリッヒスハーフエンを出發したのである。

『よし、政府が飛行船よりも、ゴータ爆撃機がやつたロンドン爆撃の效果の方を重大視するならばそれもよい。わしの工場では、もつと大きい、強力な爆撃機が出來てゐるぞ』と北叟笑むのであつた。

しかり、ツエッペリン伯は、ひとり飛行船のみに固執してゐるのではない。彼の股肱の一人とも云ふべきドルニエ博士らによつて、ベルリン近くのスタッケン工場で、六臺の發動機をつけた大型爆撃機の建造に着手してゐるのだつた。

不幸にして、このツエッペリン・スタッケン式爆撃機は、ロンドン空襲に使はれなかつたが、當時世界最大の爆撃機だつた。これはツエッペリンの廣い客觀的性格の表はれとみることも出來やう。

巨人の終焉

ああ、しかし世紀の巨人ツエッペリンの胸中に抱かれてゐた大空中艦隊も、大旅客航空船も、まだ實現するに至らず、祖國ドイツが戰場の赫々たる勝利に比べて、國內における物資の窮迫と人心の動搖を

ロンドン防空陣の強化と共に、空襲部隊の被る損害も多くなり、名船長ズトレッサー少佐以下、新造L七〇號を始め盡く失ふ悲運にさへ會つた。大戰中ツエッペリンのロンドン空襲で與へた損害は、死者五百五十七名、負傷者千五百五十八名、被害高百五十二萬七千五百八十五磅であつた。しかし實際には精神的にロンドン市民――英國民に與へた影響は著しいものであつたのだ。けれども、その次に來るものは？――

そこに待つてゐたのは何であらうか。悲しむべき祖國の屈服！　一九一八年十一月十一日午前十一時の休戰喇叭は誇かなドイツ民族への挽歌であつた。巨鯨ツエッペリン飛行船の葬送曲でもあつた。

破産か立直しか

戰爭の終熄は、ツエッペリン飛行船の終焉であつたらうか。

否、既にツエッペリン伯は逝いて再び見ゆるに由もないが、その偉大なる心を心とするエッケナー博士以下は、ツエッペリン飛行船をして、航空界における使命を完遂せしめたことをここに附記しても決して無駄でなからう。

『わしの飛行船は、決してそんな惡魔的なものではない。今に平和が戻つてきたら必ず飛行船で交通をする時代が來る。

わしの飛行船はその役目を果すのぢや』

と、晩年のツエッペリンはいつも、部下に言つてゐた。

その遺志をついで一九一九年（大正八年）には、早くも容積二萬立方メートルの小型飛行船ボーデン

み、盛大なる葬列の上空には、亡き伯の遺児たる超ツエッペリンが數隻堂々編隊をととのへて翔つた。

葬儀場に於て、コルスマン取締役は、

『この國歩艱難の秋に於て、我々は最も尊敬し愛慕して已まぬ中心を失つたのは誠に、痛恨に堪へないが、伯の逝去こそ、その生前の偉業を我々に殘し、我々に完遂せよとの無言の傳導であつた。』

と叫び、數萬の會葬者を感激させた。

それで會社は、故人の親友であつたエッケナー博士が社長となり、フリードリッヒスハーフエンの本工場の外にボッタム、シユタアケン、フランクフルト、アン、マインの三ケ所の工場を管理し、餘力をあげて、飛行船の完成につとめたのである。

されば、一九一八年の夏に竣工したツエッペリン飛行船は、L七十號は、速力、百三十メートルとなり、發動機は二千八十馬力の威容をそなへ、その搭積能力は、全浮揚力の七十パーセントに達し、四十四トンをつみうる、容積五萬立方メートルの巨船を製作したのである。

そして伯の死後、あたかもこの巨人の志を繼ぐかの如く、數隻のツエッペリン船隊は屢々ロンドンを空襲して猛威を振つた。

それは全く新らしい戰術で、日の暮れるころ五六千メートルの高空を保つて侵入し、發動機を停めて夜に入るのを待つてゐる。

やがて、夜になつて敵飛行機の活動が出來ないのを見すませ、突如舞ひ下つて強襲を浴びせるのだ。

この「無音の空襲」でロンドンの賑華街ピカデリーは一擧にして死の巷と化し、或は劇場を爆碎され大多數の死傷者を出させた。けれども大戰末期ごろ、

はここに消滅してしまふ外ないのであつた。

『已むを得ん、一切を放棄する外ないのだ』

エッケナー博は、ありし日、爾汝の交りを結んだツエッペリンの靈に對して、申譯のない苦痛で、めつきりと白髪増えたやうだ。

そこへちようど、アメリカから、賠償金の代りに欲しくてならぬ大飛行船を作つて引渡せと注文してきた。

再びフリードリッヒスハーフエン工場には、久しぶりの鎚の音、ハンマーの響きが、活潑に聞こえてきた。

『だが殘念ですな、折角作つたものを、そつくりアメリカに呉れてやるのは』

『いや、そうぢやない』エッケナーの胸中には、全く別な、もつと大きい考へが浮んでゐた。

『二十五年の經驗と知識を以て、實現しうる唯一の機會なのだ。これを一つ作つたら、我々は必ず、未來の飛行船を完成しうるよ』

と、遂に一九二四年に至つて休戰後最初のLZ百二十六號を完成した。それは純粹の旅客輸送用であり、十月にはエッケナー博士自ら搭乘し、レーマン船長以下と共に、大西洋を六十六時間で押渡り、七千八百三十キロメートルを翔破して、十五日の朝、ニューヨーク市上に現はれるや、全米國民は、狂喜してこれを迎へた。

が、もつと喜んだのはエッケナーであつた。

『これで故人の遺志をついでゆけるぞ。今度はドイツの飛行船を作るんだ』と、技術に誤りなかつたことを證明し得た大飛行に、彼は始めて會心の笑をもらした。

ゼー號を完成して、フリートリッヒス・ハーフエンから、ベルリンまで六百五キロの定期航空を開始し次で姉妹船ノルトステルン號を製作にとりかかり、平和的交通に乘り出そうとした。

『大變でヅツ、何もかも駄目ですぞッ』

氣遣はれてゐたヴエルサイユの講和會議が調印されてみると、思つた以上聯合國がドイツの兵力と經濟力を徹底的に叩きのめそうとかかつてきた。

米英は「人道主義」の名にかくれて、ドイツ航空力の一切を沒收し、禁止したのである。

『ああ、老伯がこの有樣を地下から見て、どんなに嘆き悲しんでおられるだらうか』

『全くだ』エッケーナ博士は、感慨深く愛兒にもひとしい飛行船を引渡す書類に目を通してゐた。

賠償債務の一部として、ボーデンゼー號とノルドステルン號は、伊太利とフランスへ引渡してしまへば、もうフリードリッヒスハーフエンの大船庫は、がらんとした空である。

『ああ、いつの日、ここにまた飛行船を納めることが出來やう』

と、萬感こもごも至る淋しさと、痛憤とに、エッケナー博士以下の心中は、察するに餘りがあつた。

殘る軍用船は、聯合軍に引渡される前に自爆してしまつた。全ドイツはそのころ、革命と、窮乏との混亂の眞只中にあつた。

大戰中あの赫々たる功績をたてたツエッペリン飛行船を、國民の誰もが忘れやうとしてゐる。

もう、ツエッペリン會社は破產し、分散してしまふ外なかつた。あの巨人が、半生を捧げて、人間の達しうる最大の苦惱と戰つて、獲ち得た文明の光り

私がドイツ國民に向つて呼びかけた結果、諸君は、ドイツの工業と精神を生かし、うることであらうことを!』

と呼びかけた。

誇るツエ伯號

エッケナーの叫びに、國民は立つた。

窮乏不安のどん底にあつて、尚ほ一片のパンを節し、一着の衣を廢して集つた「ヒンデンブルグ・エッケナー!寄附金」は四百萬マークをこへた。

再び工場は息吹きをとりもどし、一ケ年最高の技術と、精神をこめて、LZ一二七號が完成した。

これぞ「ツエッペリン伯爵」號である。それは、全長二百三十五メートル、直徑三十メートル、十二萬五千立方メートルの巨船で、ロザンゼルス號よりもつと太い。

マイバッハ五百五十馬力を五臺据えつけ、面白いことは、燃料はプロパン・ガスを使つたことだ。

長距離を飛ぶとき、ガソリンだと減つてくるにつれて船體が軽くなつて、釣合ひがとれなくなる。そのため大切なガスを放出せねばならぬことになる。そこで空氣と同じ比重のプロパン・ガスを使ふならば、減つた丈はタンクに空氣を入れておけば、全體の目方に増減がないので、長距離飛行に付きもつてこいである。

その上、グラーフ・ツエッペリン號は、始めて作られた「浮べるホテル」とも云ふべき、空の大商船なのだ。

巨大なゴンドラには、船長室や、操縦室につづいて、中央の廊下を挾んで、二十人の旅客を收容する

ツエツペリンを救へ

『ああ、飛行船が飛んできたッ』

『ツエッペリンだ、久しぶりだなア』

LZ一二六號（後アメリカで、ロザンゼルス號と改稱）が、アメリカへ飛ぶべく、ベルリン市上に現れたとき、全市民は屋上と云はず、街路と云はず、一ぱいの人出だつた。

『殘念だッあれをむざむざアメリカに引渡すのは』

誰れの胸にもこの感想が湧いた。巨鯨を見送る目には暗涙が浮ぶ。ツエッペリン飛行船は、一ツエッペリン個人の遺産であらうか、一會社の存亡に關する事業であらうか。

いかに敗戰後に困窮してゐやうと、誇り高い民族は、この世紀の發明を見殺しにしてもいいのだらうか。否、否、

『ツエッペリン飛行船は全ドイツのものだ。ドイツ民族のものだ』

『ツエッペリンを救へ』

『ドイツ人のための新飛行船を作れ』

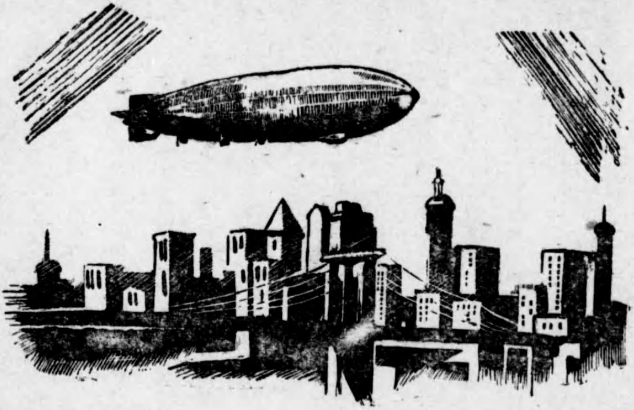
大學生から、勤人から、兵士から、街頭から、新聞から、こうした叫びが、次第に高まつて行つた。

エッケナー博士は、また自ら民衆に呼びかけた。

もし今日のドイツ國民にして、ツエッペリン伯の遺業を廢絶させるならば、それこそドイツ民族の生存の意志と將來の確信に對する單なる無知と貧困を示すことになるであらう。

われわれは光榮ある民族であることを欲し且つ生き、そして將來を信ずるものである。

然り、私は確く信ずる。



險飛行であつた。

今度の飛行は、各國からの希望者を旅客にして、ほんとうの空中旅行を樂みつつ、ゆつたりとした客室から、地上の大觀をほしいままにして飛んでゆくのだ。

わが國からも、朝日新聞社の北野、每日新聞社の圓地兩記者をはじめ、太平洋橫斷のときは海軍の草鹿少佐、藤吉少佐が乘組んで行つたのである。

そして、まだ何人も飛ばなかつたシベリアの奧地や、北太平洋を飛び、世界一周三萬千五百キロメートルを三段飛びにして、たつた二十一日七時間三十三分で飛び切つた。

世界早廻りの新レコードでもあつた。

出發點ときめた紐育のレークハーストから、八月七日に出發して、五十五時間二十六分にドイツへ

十室がある。

ガラス張りの展望室は、大サロンで空中の佳餐をしたためる二十世紀の旅人に、脚下の風光を楽しませる。

豪華な調度、清楚な便利極まる設備、これが空を飛ぶのかと疑はれるほど美事なものであつた。

エッケナー博士は、

『我々は將來この大空中商船隊を作らねばならぬ。そのために、三年五年では養成できぬ。飛行船の船長を澤山作つておく必要がある。

と力説し、レーマン、フレミンケ、フオン・シラーなどの船長を、いつも乘せて行つた。

後日日本へ來たとき、

『お國の諺で、「船頭多ければ船山へ上る」といひます。だからこの商船、いつも空を飛ぶです』と冗談を云つてゐた。

さて、一九二八年（昭和三年）完成した。直ちに全國民の輿望を擔つて訪米への處女航空に上つた。この飛行は途中暴風雨に遭ひ難航を極めたが、盛んなるかな、百十一時間五分の快翔をつづけて、フリードリッヒスハーフエンと、ニユヨーク郊外レークハースとの間、九千六百キロを飛び切り旅客一同は大元氣で、世紀の旅行を語るのであつた。

世界一周の成功

ツエッペリン伯號は、一九二九年（昭和四年）いよいよ、世界一周に上ることとなつた。

いままで、航空機の世界一周と云へば、一九二三年に、アメリカ陸軍の飛行機か、六ケ月を費して辛じて飛んだばかりである。しかもそれは、一つの冒

郵便物　　二七四五瓩

貨　物　　二〇二一瓩

世界各地着陸回数一一一回、赤道横断二六回。太平、大西洋横斷三三回となつてゐる。ドイツと南米バーナンブコ間を往航七一時五一分、歸航八六時間の平均飛行時間を以て、僅か二回出發を延期した以外は、一ケ月三航空を翔破した。さて一方新造されたヒンデンブルグ號は、世界一の巨船であり、全長二百四十八メートル、全高四十四メートル七〇〇最大直徑四十一メートルと云ふ巨大さで、ガス容積は、ツエッペリン伯號の七割も多く、二十萬立方メートルで、旅客七トン、貨物十二トンをのせ、全浮揚力は二百十四トンに及んでゐた。

スピードは、一段と早く、千二百馬力のデイビルエンヂンＬＯＦ六型十六氣筒Ｖ型のものを四臺裝置し、旅客室はツエッペリン伯號の倍となつて二十五ケ五十人乘りになつてゐた。

昭和十一年三月竣工して以來、南米へ、北米へと定期航空に從事して、旅客の收入三百萬圓、郵便貨物五百七十萬圓と云ふ莫大な收入をあげて、航空船が定期航空に、いかに有利であるかを立證したのである。

不幸、その翌年春、北米への第一回飛行の際、滯電のために爆破燒失してしまつて、これにつづくＬ一三〇號「ツエッペリン伯第二號」も建造中ばに第二次大戰の勃發に會ひ、遂にツエッペリン飛行船の雄姿は再び大空に仰ぐ由もなくなつた。

最近における、飛行機の著しい進歩、特に積載力が增加し、航續力が伸びたので、飛行船の唯一の强味としたところを奪はれるに至り、軍用としての飛

着き、そこから、一萬千キロの無着陸飛行をつづけて十九日の夕刻霞ヶ浦へついた。

筑波の彼方に沈む夕陽を浴びつゝ、巨船をいま收めやうとする霞ヶ浦飛行船庫こそ、あのドイツ敗戰の日に、日本へ引渡した勝利品の格納庫なのだ。ツエッペリン伯の思ひ出のにじむ船庫なのだ。いまは盟邦として、わが官民の湧くがごとき歡迎をうけつつ、エッケナー博士は老ひたる双眸に熱涙を浮べて、

『今日こそ、故伯爵の志をとぐる日である』

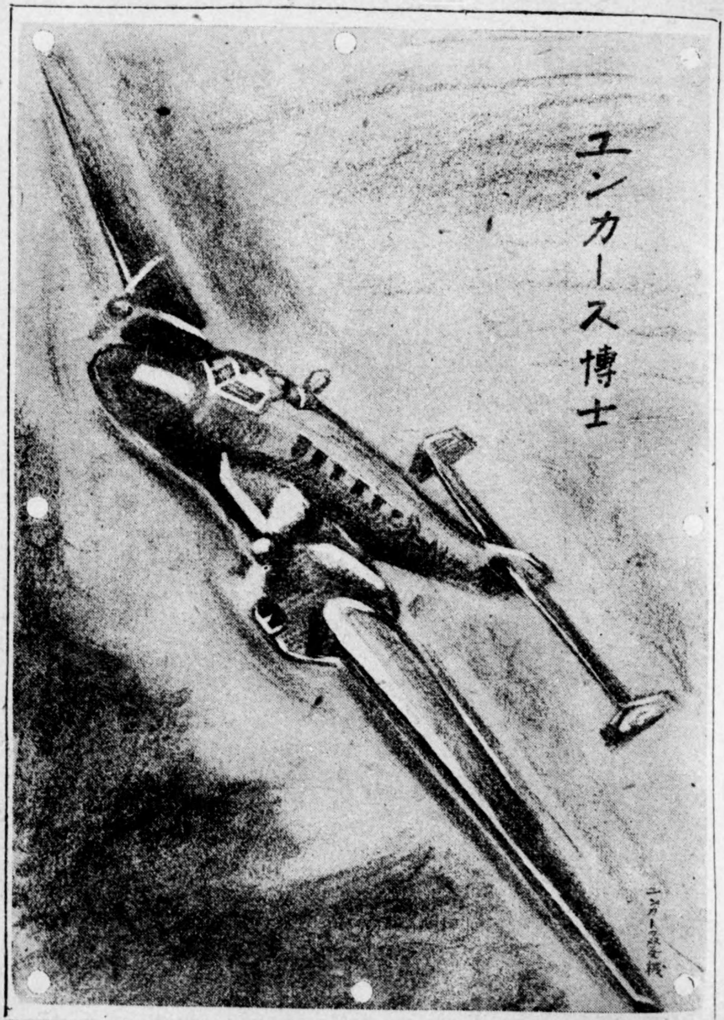
と感激して語つた。かくて太平洋上の嵐をつきロザンゼルスに着陸して無事ニューヨークに歸つたのである。

世界一周後、ツエッペリン伯號は、南米への定期航究路に就航し赫々たる成績を收め、商業用として航空船の持つ强味を十分に發揮した。

この成功に乘じて、ツエッペリン會社では、更に巨大な、LZ一二九號「ヒンデンブルグ」號を製作した。

ツエッペリン伯號は、一九三二年末に、數々の大飛行を終つて、一冬を手入れのためにフリードリッヒスハーフエンの格納庫に收めたが、ツエッペリン會社では次のやうな面白い數字を發表して、飛行船の商業的用途について、故伯の先見の明、誤らざりしことを證明した。

	竣工以來	一九三二年中
飛行回數	二九〇回	五八回
飛行延距離	五三〇、六〇〇粁	一八〇七八〇粁
同時間	五、三六九時	一七六六時二十分
旅客輸送數	七四九五人	一二一八名


ユンカース博士

行船は、もはや速力の點からも、行動の遲い點からも無價値となり、飛行船は、過去の遺物となつてしまつた。

しかし『航空界の發達するまで、翼のある飛行機が十分役に立つまで、飛行船によつて國民は航空の重要性を示し、國防における航空機の威力を示すことは必要だ』と說いたツエッペリン伯の叡智は、なほ生きてゐる。

彼ほどの熱情と、不屈の精神と、たへざる努力がなかつたら、今日のドイツ空軍を育てあげる素地は築かれてゐなかつたに違ひない。彼の部下だつた技師からドルニエの如き、有名な飛行機の設計者も生れてゐなかつたらう。

ドイツ空軍を育て、築き上げた大きい根幹は、五十年前から、空を飛ぶことに全精神を打ちこんで生涯を苦闘に捧げ盡してきたツエッペリン伯の功績に外ならないのである。

第一篇　發明の天才

スツカー

『西部戰線』――一九四〇年五月二十五日

豫見は、フランス人には陸の、イギリス人には海の、そしてドイツ人には――空の領域をそれぞれ與へたのである――ジャン・パウル、ベルギイとフランスの領空を飛んだ今日の午後ほど、ジャン・パウルの此の言葉に、辛辣きわまる皮肉を覺えたことはなかつた。

この詩人が、およそ百年以上も昔、ドイツの政治的受難時代に就いて云つた言葉は、いま完全な眞實として甦つて來たのである。わが空軍は二週間以來鍛冶屋の槌のたゆまざる力を以つて西部戰線へ空襲をつづけてゐる。

……さあ、ダンキルクだ。今しも先頭の機隊が怒濤の如く海岸の此の都會へ殺倒した。われわれも後れじと飛ぶ。依然、出發當時のままの陣形だ。

港から急いで海上に滑り出した驅逐艇があつた。五隻、六隻、先を爭つて遁げまどふ容子が、まるで金魚鉢の中へ突込んだ手に驚いて右往左往する金魚のやうである。先陣のスツッカ(急降下爆擊機)が、最初の爆彈をゴロリと落した。

この日最初の噴煙がさつと立ち騰る。直接海に沿つた船渠のあるあたりである。眞赤な噴水だ。つづいて二ケ、埠頭を掠めて水に落ち、文字通り噴上げ一聯そこらを渦と泡に化した。

更に一彈、これは荷揚げの棧橋をうつて、砂塵と

發動機會社」こそ、またこの猛鷲を生み育てる塒として、ドイツ國防の中心なのである。

しかし、この大會社が今日あるまでには、幾多の起伏變遷があり、ユンカース自身もまた苦鬪の生涯を、航空機の改良發達に捧げつくしたのである。

世界の航空機製造者には、天才的な閃めきをみせるメッサーシュミットや、學究的な、クロード・ドルニエーを始め、幾多の俊才も少くない。けれどもユンカースの如く、事業家として、技術家として、製作者として、研究家として、八面玲瓏、行くところとして可ならざるなき人物は決して多くない。

また彼の生涯は、常に一歩進んで改良と、甦新への偉大な夢想家であると共に、その夢の偉大な實行家であつた。

一八五九年（皇紀二五一九年）であつた。

流れも清いライン河に沿つて、ライットと呼ぶ小都市があつた。

小さな地方都市ながら、濛々とした煙突の煙は天に吐き出され、鐵道の驛には、いつも山ほど荷物が積まれ、街ゆく人々の顔にも活氣を呈してゐるのであつた。

ライットは、工業都市として、平和な、潑溂とした姿をみせて早春の陽光に輝いてゐた。

二月三日、フーゴー・ユンカースは、この都市の一機業家の家庭に生れたのである。

『可愛いゝ坊ちやんだ。丈夫そうですな』

『ハイ、おかげさまで、悪戯つ兒で困りますのよ』

母親は、嬉しそうに、この偉大なる巨人の幼い日を、慈愛にみちた目で眺め、平和な家庭が、フーゴーの健全な發育を惠んで行つた。

焔の渦とを捲き上げる。一番に集中投下を蒙つてゐるのが直線を引いたやうに美しく突出してゐる北の防波堤だ。

だしぬけに、バリバリと云ふ音響と共に、シウレアヌ水門の重い閘扉が裂けたと思ふと、潮が躍つて物凄い水壓で貯水池が奔流してきた。同時に、ラ・クアトル・エクルウズのポンプ装置がまるで蜃氣樓のやうにひらりと消え去つた。

つづいて十萬立方米以上のガソリンをみたしてあつた大油槽から、メラメラとまるで赤熱し槍の穗先のやうな炎が一條燃え上つた。

ダンキルクは暗雲のごとき噴煙のなかに全く掩はれ去つてゐた……。

ドイツ空軍の色スツッカ（急降下爆撃機）の恐るべき刃は、バウルの豫言の通り、空の主權者としてその快速と精鋭とを以て、イギリス本土へ選出しつつある楔の背後に、つねにむかれてゐるのだ』

――これは、ドイツが緒戰における花々しい白蘭戰線席捲の日の一飛行少尉の手記なのである。

この花形スツッカこそ、ドイツの誇るユンカース飛行機であり、その生みの親フーゴー・ユンカースをいま語り出でやうとするのだ。

幼にしてこの才氣

今の戰ひの強鷲、ユンカースの強靱な翼がどれだけ、ドイツの勝利を導いたであらうか。

この猛鷲の生み親、フーゴー・ユンカースこそ、ドイツ空軍の建設に對する、最大功勞者の一人でなくて何であらう。

デッソウ市に本社を有する「ユンカース飛行機、

のだ

『うん、お父さんはお前のために、やれるだけ高い學校へ上らせてあげやう。その代り、しつかり勉強しなくちやならんぞ』

『ハイ、勉強いたします』

『その勉強もだ、お前一人が賢くなつて、立身しやうの出世しやうとの云ふ小さな考へぢやいかん』

『成功するのために學問するんぢやないですか、お父様』

フーゴーは、不審そうに、父の言葉に、問ひかへした。

『もちろん、それもある。しかし、自分一人が出世しても、何もならない。お前の勉強したところによつて、世の中の人々に便利を與へ、この世の中を良くし、お國に役に立つ學問をせなくちやならんのだよ』

『あツ、そうでしたね、ドイツは、これから國民が心を合せて、ヨーロッパの、どの國よりも強い立派な國家にならなくちやならないんでした。よく判りました』

そこで、バルメン市にある高等工藝學校へ行つてからも、たへずお國のために役立つ學問を、しつかり身につけやうと、それのみが、フーゴーの念願にあつた。

『要するにこれからは、科學の世の中だよ、恐らく産業も、生活の方式も、すつかり變るだらう、科學の進歩によつて――』

『僕もそう思ふ、交通だの、戰爭だのが機械の發達によつて、うんと違つた形をとることも考へられるね』

フーゴーはこうして、だんだん機械いぢりが長じて行つた。

人が訪れてきて、ドアをあけると、玄關のベルが鳴つて、電燈がつくやうにしたり、お庭の噴水を、ぐるぐる廻して、どこへでも水が飛ぶやうな工夫をしたり、一日お部屋に、とぢこもつてゐると思つたら立派なヨットを造つてきて、

『お母様、これ、お庭の池へ浮すと勝手に動くよ、見てごらん』

と、夕餐の仕度にいそがしい母親を、無理やりに庭へ引き出したりして喜んだ。

『僕は、機械の方で身を立てたいと思ひますよ、お父様』

國民學校を出ると、彼は、もう一人前の青年として、自分の行くべき道を、しつかり心にきめてゐた

『また、毀したの、坊や』

『うん、だつて、この汽車どうして動くんか判んないだもの』

買つて貰つたばかりの機關車をバラバラにしてしまつて、伸びたゼンマイを投げ出して、坊やは今にも泣き出しそうだ。

『仕方がないのね。悪戯ばかりして――』

フーゴー坊やは何より機械いぢりが好きだつた。

危い、危いと父親が止めても、裏の工場へ入つてバタン、バタンと織布を動かしてゐる紡織機の構造をじつと眺めてゐた。

『お父様、この機械は、どうして動くの』

『それはね、お前がもつと大きくなつて、學問をしたら、だんだん判つてくるよ』

『そうぢや、僕大きくなつた勉強するよ』

るぜ』
同窓の友も口々に彼の才能をほめてゐる。

ガス機關の改良へ

『これで、技術士の資格は取れたと……』
アーヘン市で行はれた地方廳の試驗には、果して友人が保證したやうに、拔群の成績で合格した。このときユンカースは二十四歳であつた。
『さてこれから、何をしやうか……』
と、當時勃興しつつあつた多方面の機械工業を調べてみた。何が最も將來有望であらうか、いないかなる工業を進歩さすことが、ドイツの工業界を發展させ、また生産を促進するであらうか。
一まで故鄉に歸つて、父と相談してみた。
『わしは、別に紡績業を、お前に繼いで貰はなくてもいい、お前は、お前の才能を伸ばしてゆくがいいだらう』
と、父は、十分に彼の獨立力と、實行力をみとめてゐたのである。
『しかしお前は、どう云ふ方面に目をつけてゐるのかね……』
『まだ、はつきりとは申せません。
しかし、いま最も新らしい動力機關として、ガスエンジンが出來つつあります。どうも私には、あれこそ、今迄の蒸氣機關にとつて代るべき動力ではないかと思ふのです』
と、ベルリンや、アーヘンで實際見てきた印象をのべた。
十九世紀の末まで、蒸氣機關は、動力界の王座をしめてゐた。それは曾つて人の力や、馬の力を唯一

『そうだ、僕等は、そのために努力しやうぢやないか』

『然り、大ドイツの將來のためにね』

學生々活は樂しかつた。

仲のよい、しかも若くて元氣で、希望に燃えてゐる青年たちと共に、難しい理論や、複雜な技術がだんだん判つてくる。

もつと高度の學問をしたい。――彼の希望は、幸にして故鄕で相當機業主として、產をなしてゐた父によつて聞きとどけられた。

ベルリンへ、そこには新興ドイツの首府として、新知識と文化との花が咲いてゐた。カールスルーエ市へ、そこでは新らしく勃興しつつある機械工作の實地指導がゐた。

更にアーヘンへ、ここは工業技術のメッカである。

アーヘン工科大學の門をくゞらなくては、近代工業を語る資格が無いと云はれる最高學府だつた、最高權威者が集つてゐた。

『愉快だなア』

『こんなうれしいことはないよ。我々こそ、ドイツの將來を荷負ふべき使命を持つてるんだぞ』

五月、綠の木かげに、若い大學生は、ビールの盃をあげて、青春と、新知識と、そして大ドイツ帝國の將來を祝福した。

フーゴー・ユンカースは、健康に惠まれ、知識慾に燃え、希望と期待に胸ふくらませるのであつた。

『いよいよ卒業だ。

僕は、技術試驗をうけてやるよ、資格をとらなくちやならんからね』

『君なら大丈夫だよ、ユンカース君、きつと合格す

思ひます』
　と、フーゴーは、自分の所信を父に述べるのだつた。
『よからう。お前が、しつかりした自信を以て、やつてみやうと云ふなら、その目的へ進んで見い。俺は、出來る丈けの事はしてやらう』
　そこで、フーゴー・ユンカースは、學生時代に氣の合つた友達と一緒になり、多少の資本金を集めてガス機關の改良事業を始めることに決心した。
『もつと便利で、燃料にしても、機關にしても、經濟的なものでなくちやならん。
　實際に工業に役立ち、生産に使はれなくちや、いかな高尚な理論も、立派な發明も、死んでしまふ』
　これがユンカースの持論であり、自ら實行しやうとする所でもあつた。

行くところ皆可

　フーゴー・ユンカースが第一に着手したのはガス發動機の實驗所であつた。
『うんと立派なガス・モーターを作つて、大量生産をしてやるぞ。
　今に漁船から町工場まで、ガス・モーターをブンブン廻してみせる』
　と、大きい抱負と自信をもつて、まづデッソウ市にユンカース、ガス發動機實驗所を設立して、懸命に仕事に沒頭しはじめた。
　時に一八八九年（明治二十一年）で彼が三十歳になつたばかりである。
『ユンカースつて技師は若いが、仲々見どころのある男だ』

の動力としてゐた人間に、大きい革命を與へた發明だつたと云へる。

蒸氣機關は、陸運、海運、工業のあらゆる方面に用ひられ、改良に改良が加へられて、ほとんど完全に近づいてゐた。

だが、何としても重い。

十九世紀末から、人々は、空を飛びたいと希ひ、馬車に代る乘物を欲してゐた。しかし蒸氣機關は、これらの輕便な運動機關としては、發生する馬力にくらべて、重すぎる機關の外で、水をわかし蒸氣を作らねばモーターは廻らない。

もつと何か代るべき方法、即ち機關の、シリンダーの内へ、ガスをつめて、これを爆發させれば、ピストンが動いて廻轉さすことが出來る。

機關の内で、燃料を燃やす動力――内燃機關である。この新らしい動力機關の改良、發明に一心になつてゐたのは、オットー博士がゐた。ダイムラー技師があつた。

四衝程のガス機關を製作しつつあつたオットーはすでに、熱力學の立場から、オットサイクルの理論を發表してゐた。

一方を閉ぢた氣筩の内で、ガスをつめこみ、壓縮し、これを爆發させ、動力を得る。

そして、燃え殘りのガスを排出する。この吸入、壓縮、爆發、排出の四つの行程をくりかへせば、一つの動力を連續的に得ると云ふのである。

この理論を、實行に移したのは、ダイムラーであつた。

『ダイムラーの發動機は成る程、劃期的なものだと思ひますよ。だがまだまだ改良の餘地があるやうに

文化生活が漸く廣まつてきた時代のこと〻て、ユンカースのガス風呂とストーブは、至るところで好評を博した。

事務所でも、家庭でも、別莊でも、ユンカース式ガス風呂を備へ、ユンカース式ストーブを抱くことを、新式生活のシンボルのやうに思つた。

ドイツだけではない。

フランスにも、イギリスにも輸出されて行つた。

わが國へも、ユンケル・ストーブとして、多量に輸入されて、關東震災前の文化生活につきもの〻感があつた。

それだけではない。理髮用のバリカンだの、鋲着作業のドリルも製作した。

そしてこれらの機械製作によつて、ユンカース會社は、ぐん〱發展して行つた。

今では、少壯實業家として、ユンカースの名は高まつて行つた。彼は三十六歳の若さであるが、企業にも、發明にも、非凡の才を現はしてゐた。

このころ、ユンカースには、飛行機の發明などはまだ全く念頭になかつた。時折り新聞に、飛行機發明の記事が、大きく出てゐるが、

『僕も、いつかこんな仕事をしてみたいと思はぬでもないが、今は急しい』

と殆ど顧みなかつた。

けれども、ガス機關や、熱量計の工夫は、後に英佛軍を惱したユンカース・ユモ發動機を完成する素地となつたには違ひないのである。

『ユンカースの熱機關は、在來に見られない改良が施されてゐる』と云ふ噂を知つた、彼の母校アーヘン工科大學にては、早速、ユンカースの製作したが

デッソウ市は、工業都市だけに、彼の名はそうそう〳〵たる大工業家仲間で、早くも評判になつた。

『あの男の考案したガス發動機は、今迄のものと違つて、製造方法が、合理的だ』

『今に、あのガス・モーターは競爭相手が無くなるぞ。ああ安く作り出されちや、他のものがやりきれない』

と、製造業者は、ユンカースの敏腕に尻ツ尾をまいた。ところが、ユンカースは、吸入裝置や、着火裝置を改良して、今迄に見られぬ輕量で、しかも堅牢なモーターを製作してゐたのであるが、ただの製造業者とは違つて飽くまでも學究的な彼は、

『最少の燃料で、最大の出力を出さねば、ガスモーターは經濟的に使用できない』

と考へた。

そこで、燃燒熱を正確に測るために、日夜裝置に工夫をこらした。

『しめたッ。これは役に立つぞ』

出來上つた熱量計は、すばらしく精巧なものであつた。

すぐその設計を、特許局に願出でみると、今までにない設計である、と認められて、特許を得たのである。

そこでこの熱量計を生產して賣り出してゐたが、

『この熱量計を利用すると色々なものが出來るぞ』

冴えたユンカースの頭の中では、次から次へと新らしい工夫と考案が生れてきた。

第一に、新式のガス風呂だつた。第二は、ストーブだつた。

『これは新式だ。仲々スマートぢやないか』

いよ』
と、そのころ、學者と云へば、所謂象牙の塔に立てこもつて、ともすれば、紙魚先生のやうに、世界を白眼視してゐる連中に一矢を酬ひた。
『ユンカースは學者ぢやない。ありや事業家だよ』
などと、中には彼の名聲を嫉んで、非難するものもあつた。
けれども、ユンカースは、
『學問も國家のためのものだよ』
と一言で笑殺した。
そして一面實社會における活動もやめなかつた。
デッソウ市のユンカース・ガスモーター研究所では、更にガスモーターの改良、出力の向上につとめてゐた。それのみでない、新にアーヘン市に、ユンカース・オイル研究所を設けて、燃料油や潤滑油の研究を始めた。
かくして、事業は次第に進んで行つた。ユンカースのために、折資を申出るものも多くなり、研究所の製品も次第に販途が伸びて、各國へ賣りつける製作權の收入だけでも、相當な額に上つて行つた。
ユンカースは、ますます張り切つて事業に沒頭して、ガス・モーターの外に、通風装置や冷却装置の新式のものも作られて行つた。
『これ丈け事業が廣くなつたら、もう研究所だけでは、十分にゆかないね』
『そうですな。ユンカース會社を設立して、事業を引うけた方がいゝですよ』
『そう云ふ組織にした方がいゝ』
と、協力者の間で相談がまとまり、ユンカース會社が新に設立されたのである。

ス・モーターを取りよせて、一流の學者たちが研究した。

『この氣化裝置と、着火法とは、從來のガス機關を一變せしめるものだ』

『熱量の利用については、この方式は最も經濟的なものであらう』

と、教授會では、何れもユンカース・モーターの成績を認めた。

そして、ドイツ工科大學中、最高學府であるアーヘン大學の名譽教授（プロフエッソル）の稱號を授與したのである。

『誠に身に餘る光榮です。振つて、ますます研究をつゞけたいと思ひます。』

ユンカースは、授けられた教授のガウンを身につけ、授與式に答辭を述べるのであつた。

しかもアーヘン工科大學では、更にユンカースを機械工科の研究室の主任教授に任命したのである。

ユンカース教授と世間で云はれてゐるのはこのためである。飛行機の發明に無關係なガスモーターの改良で彼は早くプロフエッソルの位をとつてゐたのである。

學者としてのユンカース教授は、講座に於ても、研究室でも、熱心に、勞作をつゞけた。

幾多の研究によつて、貴重な論文も書いたし、その資料も發表した。

『少壯學徒ユンカース』の名は、教授の地位を保つ十分な名聲を得てゐたのであるが、彼はいつも主張したのは、

『いかに高尚な學問をしても、それが、社會民衆のためにならず、また國家に貢献せねば何の價値もな

薄い、へなへなの翼で、これが飛行機として發達してゆくだらうか』

と、頑丈な、がつしりした機械を眺めつけてゐる彼には、その時代の飛行機は危なくて見ておれなかつた。

けれども、飛行界では彼の不安と反對に、この弱弱しい構造のまゝで、だんだんと成長してゆく。記錄も改められ、飛行機が、空中征服の利器として、將來きつと伸びてゆくであらうことは、もう決定的となつた。

『うむ飛行機は成る程、馬鹿にしたものぢやない。では、一つ改造してやらうか』

と、彼は決心するに至つた。

時に一九一〇年(明治四十三年)の事であり、フーゴー・ユンカースは、もう五十歳に達してゐたのである。しかし、尙ほ青年の元氣の消えうせぬ彼は潑溂として、新らしい事業に、突進してゆくのであつた。

彼の考案

『成るほど理窟としては、そうなるかもしれん。しかしだね。飛行機は、輕く作ることが何より生命だからね』

ユンカースの說くところに眞向から反對したのは飛行機の製作者たちであつた。

そのころの馬力の餘り强くない飛行機ではやはり複葉の方が都合がよいのである。

しかし、ユンカースは、自說を主張した。

『支柱や張線を、翼の中に納めて、厚い翼にすれば抵抗はうんと減る。抵抗が減れば速力を增すことが

ドイツ・デッソウ・ユンカース會社——この名はひろく、世界的のものとなり、實生活とユンカースの特許品とは密接に結ばれて行つた。

飛行機に着目

お隣のフランスでは、ルイ・ブレリオが自ら單葉飛行を製作して、デリー・メール新聞社の懸賞に應じて、美事英佛海峽を横斷に成功した。

ときに一九〇九年七月二十日だつた。ドイツでもグラーデーなどが、しきりに飛行機の研究に努力してゐた。ユンカースは、飛行機について、今まで餘り興味を抱いてゐなかつたが、

『飛行機の將來が、どのやうに發達するか知れないが、今のやうな形でいゝのだらうか』

と、ふと疑問を抱くやうになつた。

そのころ、まだ幼稚な初期時代の飛行機は、大抵複葉式であつた。細い木製の翼骨に布を張つた弱々しい翼であつたから、どうしても複葉に組んで針金を蜘蛛の巣のやうに張り廻はさねば、翼の强さを保てなかつた。

『何と弱々しい、原始的な形をしてゐるんだらう。どうも面白くない。第一、翼が二重になつてゐるやうな生物で飛ぶものはないぢやないか』

ユンカースが、當時飛行機に興味を持てなかつたのは、その形態だつた。

あんな不ざまな、その場限りの間に合せのやうな構造は、どうも近代科學の粋と考へられないのだ。

初めは、だから飛行機に對して冷淡だつた。

『あの弱々しい單葉だつて、尙更らのことだ。まるで、パラソルのやうに一ぱい針金で張りわたして、

よくない。今に必ず祖國は戰爭をせねばならなくなるだらう。そのときこそ必ず、飛行機が軍用として使はれるに違ひない。そのときこそわれわれは、もつとも秀れた飛行機を祖國に提呈すべきが義務ぢやないか』

と部下に督勵した。

新らしい構造へ、いな、新らしい創造への發足はすべて苦惱の道である。

内にあつては、まだ誰も手につけてゐない翼の空氣力學的な研究に對する眞摯な努力が必要である。外に對しては、ユンカースの所信を反對する學者や飛行機製造家への論爭がある。

ユンカースは、しかし、屈するところもなく内外共に孤軍奮鬪したのである。

けれども、そのころドイツの航空科學者は、ルンプラーと云ひ、ファルッと云ひ、出來る丈け薄い翼を使ふことによつて抵抗を少くし、複葉に作ることによりて、輕く製作できると主張してゐた。

しかも、當時の航空機は、この方式によつて相當成績を收めてゐたのであるから、ユンカースの述べるやうな、厚つぼたい單葉などには誰一人、耳を傾けやうとするものも居なかつた。

『あんな、厚い翼は、むしろ抵抗が増えるばかりぢやないか』

『第一、あの翼を金屬で作るなんて重いことをして飛べるものかね』

『大方ユンカースは、ガス風呂に羽根をつけるつもりだらう』

蔭口をきくものは、ユンカースの考案をまるで素人の考へ出した夢物語のやうに嘲笑したのである。

出來るではないか。
現在の飛行機は、空氣抵抗のために無駄な馬力をうんと消耗してゐるのだ。こんな馬鹿げたことはない』

と論じた。

大體、空氣の抵抗は、速力の二乘に比例するものである。だから、かりに一本の支柱にしても、百キロのスピードのときに五十キロの空氣抵抗をうけてゐたならば、スピードが二倍になれば、抵抗は十キロではなくて、二十五キロと云ふ夥しい數となる。だから高速力のものほど、抵抗を少くすることが必要なのだ。

そして、この抵抗が增加すれば、これに打勝つための馬力は、三乘に比例して消費されるのである。

『將來の飛行機はもつと經濟的でなくちやならん、

何百馬力もつけて、たつた二人や三人しか乘れぬやうな事ではいけない。それにはどうしても抵抗の少い、そして浮揚力の大きい翼を選ばねばならぬ。』

ユンカースはこの持論を自ら實行しやうとした。

『ユンカースは、立派な工業家だらうが、飛行機には素人ぢやないか。そんな支柱も張線もない翼を作るなんか、無鐵砲極ることだ』

と航空界では、ユンカースの理論を受入れやうとせなかつた。

そこで、ユンカースは、アーヘン工科大學の風洞を借りうけて、翼斷面の研究を始めた。

それのみでなく、デッソウ市にある元のガス機關研究所を改造して、航空研究所としてこゝで航空機の研究に沒頭した。

『どうも、昨今のヨーロッパの情況をみると形勢が

關研究所の一部で、試作機に着手することにした。ときに、一九一四年（大正三年）の春であつた。

それは全く新らしい設計である。

翼は、見るからに强靱な一枚作りの厚いものが、ピンと張り出してゐる計りであつて、支柱もなければ、針金も張つてゐない。こんな片持ち式の翼は今まで、どこの飛行機にも使はれたことはなかつたのである。

果して、こんな大膽な設計のものが、空を飛ぶであらうか。

『なるほど、物理的には、片持ち梁（カンチレバー）と云ふ理論はあるが、それが飛行機のやうな、動的な荷重をうけるものに利用できると思へない』

『かゝる形式の翼が、空氣中に於て生ずべき振動とか、捩れなどについて、いかに安全性を與へるかは大きい問題だと思ふね』

アーヘン工科大學の物理學者も、ユンカースの所説を、理論として認めても、いざ實行に移すとなると、少からず疑惑を抱くのであつた。

『それは、要するに材料の問題だと思ふ』ユンカースは答へた。『私は、在來の飛行機製作者の如く、たゞ輕からんことのみを望まないのです。むしろ强度に主眼を置きたい。その點に於て、私はこの飛行機を金屬で製作しやうと考へてゐる』

『なに、金屬だつて！』

『そう、私は敢て斷言するが、金屬は木よりも輕いとね。何故なら、こゝにある寸法を元にして考ふれば、成る程木は輕いだらう。しかし、飛行機の要求するのは强さだ。必要な强さを、安心して計算できるのは、金屬である。木の如く產地や、濕度、氣溫

しかしユンカースの考へは、果して素人だましの突飛なものであつたらうか。

否、決して彼の考へは、根據のな文人畫ではなかつた。それが證據に、一九一〇年二月一日附で「特許飛行翼」として、ドイツ特許局のむづかしい難關を合格して認定されてゐるのである。

それは、ユンカースの主張であつた『翼の生ずる浮揚力にとつて、少しの助けにもならぬ一切の構造物を悉く翼内に收めてしまつた、全翼式飛行機』なのであつた。

このやうな飛行機は、もちろん今日でも出來てゐない。けれども、現在の飛行機の形は、次第にこれに近づきつゝあるのだ。

ユンカースの先見の明は決して、思ひつきでなかつた。必ず可能とされる性質のものであつた。

支柱も針金もない翼、すなはち、カンチレバー翼(片持ちの翼)は、いまにては一般化してゐるではないか。

拓くは己れの道

『私の理論は正しいと思ふ』

アーヘン工科大學内に設けた實驗室で、風洞實驗によつて、機體の形や翼面について、どこまでもユンカースは、自己の所信に向つて細密な研究をつゞけたのである。

研究してみればみるほど、彼の自信は動かすべからざるものとなつてきた。

『もう大丈夫だ。實際に飛行機として作りにかゝつてみやう』

と決心して、彼のデッソウ市における元のガス機

第二篇　飛行機王ユンカース

第一章　大戰中のユンカース

J1號成る

將來の飛行機は金屬化する。

ユンカースは、この信念を改めなかつた。祖國が運命を賭して大戰爭をやつてゐるにつけ、また聯合國の空軍が優勢なのを見るにつけて、彼は一日も早く、理想の飛行機を完成したかつた。

彼は助手とデッソウの研究所に立てこもつて新飛行機の構造を實驗しはじめた。

『ねえ、ツインデル君、これは成功らしいぞ』

ユンカースは、最も信賴する助手エルンスト・ツインデルと翼桁の荷重試驗を重ねておつたが、〇・一ミリの紙のやうな薄鋼板を材料としていよゝ實物の製作に着手した。

その上、この新飛行機は、今迄の飛行機とは全く違つて針金もなければ、支柱もなく、ピンと張り切つた一枚の單葉で、各部分を電氣鎔接で結合してあつた。

『ユンカースのお化飛行機が飛ぶそうだぜ』

『馬鹿な、あんな重いものが飛ぶかい』

と、人々は誰れもこの鋼鐵製飛行機が飛ぶなどと考へてゐなかつた。學者仲間でも、わざわざ工場へ

で強さに差があるわけでなし、精密に必要な強さを知りうるから、それ丈けの材料を使へば反つて輕るくなると考へてゐる』

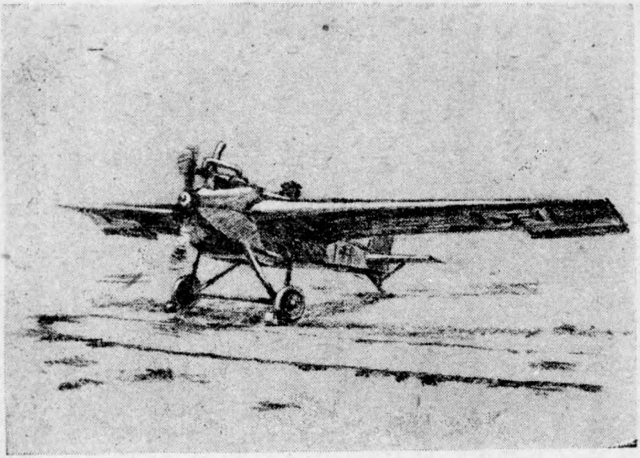
と堂々たる主張を述べたのである。しかし、當時の航空學者や、飛行機製造家は、ユンカースの説に盡く反對した。

厚い翼、片持ち翼、全金屬製——あまりにも、當時一般の飛行機のもつ概念から、懸けはなれたものであつた。

『諸君が何と云はうと僕はやるよ、しかし、全然白紙の立場で進めてゆくつもりだ』

と云つた。

今迄の實驗や研究に賴つては、どうしても先入觀念に支配されて、眞の新らしい改良は出來ないことを彼は恐れてゐたのだ。



れましたが、現在軍用の代表的複葉機が平均千二百廿五瓩の自重でありますが、本機はそれより少くて千十瓩にすぎません。それのみでなく、スピートは二十粁も早く馬力は五十馬力少くてすむのであります』

とユンカースは、口を極めて軍當局に說いた。

しかし、新らしいものは、秀れてゐても、なかなか親しまれぬものである。そこに開拓者の苦しみであらう。優秀な性能と判つてゐても、あまり新らしすぎる構造のために、評判は芳しくなかつた。

『いくら良くても、あんな甲蟲みないな飛行機は好かんね』

『全くだ、餘程命の惜しくないものでなきや乘れないね』

パイロット仲間でも歡迎しなかつた。けれども、

見に來た人は、
『こんな厚い翼は、空氣の抵抗になつて速力が出ないだらう』
と噂をした。

ところがJ1型の出出上つたが大正四年十二月、伯林郊外デ・ベリッツ陸軍飛行場へ搬ばれた。

『大丈夫と思ふが、しつかり賴むぞ』

ユンカースは、操縦席に近づいて、コリンクロッド少尉につげる。もし今日の飛行が失敗に終つたらユンカースの畢生の事業は、こゝで出鼻を挫かれてしまふのだ。

しかも立合の陸軍關係の飛行家や技師たちは、この重々しい鋼鐵製の飛行機は、走り廻るだけで飛び上らないものと、きめてかゝつてゐる。

『御心配ありません。美事にやつてみませう』

十九日の朝、肌寒い風をつんざいて、メルセデス百廿七馬力のエンジンは轟々とうなりを上げた。

『放せッ』

ユンカースは、飛行場の一角に立つて、じつと腕を組んで化石のやうに、突立つてゐる。

見よ、飛行機は砂塵をまいて四十米ばかり滑走したと思ふと、ふわりと離陸した。

『飛んだ、飛んだ。』

ユンカースは、小供のやうに熱狂して喜んだ。重いと冷笑された金屬製の單葉は、百七十二粁のスピードで自由に飛び廻つて悠々着陸した。

『有難う、有難う、大成功だつた』ユンカースは、コリンクロッド少尉の手を握つて感激の涙をハラハラとこぼした。

『皆さん、このJ1型は、鋼鐵製だから重いと云は

の複葉機の如く木製布張りではなく、第一號と同じ全鋼鐵製であつた。そして大正五年のドイツ軍總攻撃に間に合ふやう六臺が五月中に完成して全部陸軍に納入された。

面白いことには、複葉でありながら、上下の翼を連絡する支柱も張線もなく、たゞ二枚の單葉翼を胴體の上下に張り出した異樣な形であつた。翼も從來のもののやうに骨組になる梁一本もなかつた。

翼に働く壓力や張力や撓みの力は、すべに翼を張つてゐる〇・一ミリの鋼板が受持つた。云はゞ張子のやうなものであつた。

數枚の鋼板を小骨によつて、鎔接して作られてあつた。

『ドイツには裝甲した飛行機がある！』

誤つて佛軍陣地に不時着して鹵獲されたその一臺は、世界の驚異となつた。J四型對地攻撃用複葉はかくして、航空技術の勝利となつたが、ユンカース博士には、胸中描く輕合金飛行機の製造があつた。

そのころドイツは、世界の大國を相手として、四面重圍の中で、しかも寸土も敵に奪はれることなく進撃をつゞけてゐた。

『もつと飛行機を、もつといゝ飛行機を！』

前線から要求してくる。

ユンカース工場は目の廻るやうな忙しさだつた。デッソウの工場は次第に擴張され、職工の數も千名をこへて行つた。ワルネムンデにも分工場が設けられたし、當時ドイツのために優秀な戰鬪機を製造しつゝあつた和蘭人フォッカー氏とも屢ゝ會見して、工場の共同使用などについて、ひたすら軍部へ多數の飛行機を提供することに努力した。

ユンカースの決心は固かつた。

『この型式を進めてゆかう、必ず芽が出るときが來るに違ひない』

そこで第一に目をつけたのは、材料である。鋼鐵は非常に強い。

だから、飛行機の必要な強さにしやうとすれば、紙のやうに薄くなつて、工作上不便なのだ。もつと厚くて工作上に便利で、その上輕い材料はないだらうか。

丁度このころ、アルミニュム合金の研究が次第に發達しつゝあつた。ヂュラルミンと稱されてゐる輕合金がある。輕さは鋼鐵の五分の一にすぎない。それでゐて軟鋼と同じ強さがある。

『これだ、輕合金で飛行機を作らう。もつとよい飛行機が出來る』

ユンカースは直ちに、新らしい設計にとりかゝつた。最初に飛んだ鋼鐵製の飛行機は、記念のためにデッソウの工場内に納ひこんでおいたが、後にドイツが復興するやうになつた、ミュンヘンの全ドイツ博物館に今でも保存され、訪ふ人々に驚異の目を瞠らしてゐる。

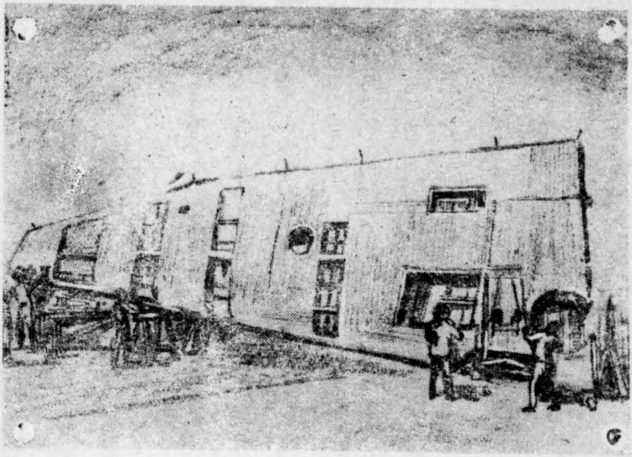
軍用機創造

そこへ新らしい註文があつた。

『ユンカース飛行機工場は至急對地攻撃用飛行機を建造せよ』との陸軍省からの註文であつた。

彼はこの機會に自分の主張する新機を提供したかつたが、軍の註文もあつて、それは複葉に作られたのである。

しかし、他のアロバトロス會社やルンプラー會社



この材料を使ふことに着目した。

まづ翼の作り方の根本的な改良である。今迄の翼と云へば、全幅に長い梁が走り、これに多數の小骨を差しこんで作つてあつた。

『厚い翼の内側にガソリン・タンクを置くやうにしたら、胴體内を有效に使へるし火災の危險も少い。それには梁などは邪魔になる』とユンカースは、まづ輕合金の管を數本にして翼幅の方に並べた。そしてこれを三角形のパイプで連結した。

『今迄の作り方より、ずつと輕い、その上に翼の撓みや捩れについてもこの方が丈夫だよ』

彼は計算通りに實物の完成してゆくのを樂しそうに眺めた。翼骨も胴枠も同樣にして作られた。そして外覆ひは、波板のヂュラルミン板を張ることにした。これで一層構造が丈夫になつた。

このやうな忙しい間に、ユンカースは、ヂュラルミンの研究を怠らなかつた。アルミニュームを原料とするこの新らしい合金は、ツエッペリン工場で飛行船の骨格に用ひられてゐたけれども、まだ飛行機用として誰も使つてゐない。

飛行機用として、翼や、胴體などに加はる力、壓力や張力、曲げの力、捩れの力などについて、ヂュラルミンを、どのやうな形に使へば最も利用であるかは、判つてゐなかつた。

『木製飛行機の構造を、そのまゝ金屬に置きかへるのは知恵のない話だ。輕合金製飛行機には、そのもの獨特の設計がある筈だよ』

『先生、ヂュラルミンの鹽分に侵され易いことも工夫しなければなりませんね』

『うん、その通りだ。嚴密な材料試験をしつかりやらう。しかし國家は一日も早く我々の仕事の完成するのを待つてゐるのだ、ぐづぐづしてゐられない』

『いゝですとも、先生、お國のためです。寢なくても食はなくても頑張りませう』

ワインデル助手とユンカースとは、研究室に立てこもつた。

デュラルミン採用

ヂュラルミン！　ヂュラルミン！　これこそ近代航空科學の寵兒である。輕いアルミニュームの特性を利用して、これに銅、マンガン、硅素などを小量混ぜて合金にすると、一平方粍について四十三瓩の力で引張ることに堪へうる強い金屬になる。

最近では、もつと強い超ヂュラルミン、超超ヂュラルミンが出來てゐるが、ユンカースは、率先して

ではないか、いかにユンカースの先見の明が正しかつたかゞ知れるではないか。

この機體が出來たのは大正六年、ドイツが全戰線で最も活躍した年で、フォッカーの作つた高翼木製戰鬪機と、ユンカースの作つた低翼金屬製戰鬪機とが互に鎬を削つて精鋭を爭つた。

ある日のことである。アントニ、フォッカーは、ふらりと訪れてきた。

『やあ、ユンカースさん、仲々御盛んですな』

『有難う、しかしフォッカー戰鬪機の性能はすばらしいですな。特に上昇力はねえ』

『いやそれは、今の所まだ金屬機が過渡期にあるんですからな。今にきつとこの形式になりますぞ』

流石、專門家の見る目は違つてゐた。かくして、ユンカースと、フォッカーは手を握つて共に飛行機をドイツ陸軍に提供することを約した。

大戰の翼

大正七、八年、ユンカースD一型は多數作られたが、これについてCL一型が出來た。

少し大型の二人乘、百六十馬力のメルセデス發動機がついてゐた。この形は水上機にも作られ、ヂュラルミン製のフロートをつけて北海を勇ましく驅け り飛んだ。

今は、ナチス航空團長として時めくクリスチャンゼン大將は、まだ青年將校で、この水上機に乘つて盛んに活躍してゐる。

『潜水艦だッ』

ある日、北海水域を哨戒してゐると、英國の潜水艦らしいものを發見したので、直ちに爆雷を投下し

また防蝕用の塗料も出來た。この翼覆ひのヂュラルミン板は〇・四ミリの薄いもので、全體に亘つて四二ミリの幅の波形にしてあり全く新型の飛行機であつた。

ユンカース博士は、自ら工場にあつて、夜は遲くまで設計室にとぢこもつてゐた。そして彼の股肱と賴んだ技師たちも熱心に新造機の完成をいそいだ。

かくて出來上つたのは、ユンカースJ四型であつて、發動機のあたりから、操縱席へかけて、厚さ四ミリのクロムニッケル鋼板を張つて裝甲されてゐたのである。

『どうもあの飛行機では、まだ俺の理想に遠いやうに思ふんだ。飛行機の主翼は胴體の下につけるべきものだと考へる』

ユンカースは、熱心に唱へた。

支柱のない片持ちの翼、即ちカンチレバー型の單葉を胴體の下につけた低翼式、今でこそ、飛行機の形の定石となつてゐるが、その頃では、

『低翼式だつて？、そんなのに乘つたら、まるで地上を見ることも出來ないぢやないか。第一安定も惡いだらう』

と人々は非難した。

「そうではない。胴體に翼をとりつけると、力のかかる所が一ヶ所に集中できる。だから、合理的に强さを高めて輕るく作れるのだ。その上萬一不時着陸しても、地面を打つのは翼であつて胴體でない。だから搭乘者は安全なのだ』

と力說し、D一型を製造した。これぞ世界最初の低翼單葉の一人乘戰鬪機だつた。

そして今の軍用機は、全部この型式となつてゐる

前線には五十人の操縦者がゐたが、國内四十八ケ所で懸命になつて、乗員を養成して損耗を補はねばならぬ。

大戰の絶頂だつた大正六年には、英佛合せて二百三十九中隊、これに對してドイツは二百八十六中隊を有して優勢であつたが、この年の終りころになると、聯合國の三千八百臺の飛行機に對して、二千三百臺を有するにすぎなくなり、資材の缺乏は、次第に戰線でも壓迫され勝ちとなつた。

『作るんだ、作るんだ』

ユンカースは必死となつて軍用機の建造に全力を注いだ。

二千三百名の職工を擁する大工場から、三百十五臺の金屬製軍用機が前線へ送られたのである。

『大きい飛行機な作ることが肝心だ。爆彈を二三トンもつんで、パリもロンドンも燒野原にしてしまふことが、戰爭を勝利に導く唯一の方法だ』

ユンカースの胸中には、巨人機の姿を描いた。同じ金屬製飛行艇の設計者クロード・ドルニエ博士もこれと同じ考へを抱いて、巨大なツエッペリン・シユタッケン機の完成をいそいでた。

しかし、アメリカの新な參戰は、戰局を一轉させてしまつた。

『アメリカは正義と自由を表看板にして、ドイツを屈服させやうとしてゐる。我々は數と量とに於て、もう力は及ばない』

日一日と不吉な戰報が傳はり、國内は物資の缺乏と思想の不安から動搖が濃くなるばかりである。

ユンカースは、それでも血走つた目に、薄汚れたカラーのまゝ、早朝から工場へやつてくる。

て美事に撃沈した。

ところが、ユンカース水上機を發見して、英國の誇るショート飛行艇が復仇にやつてきた。鈍重な水上機同志の空中戰となれば、火力の勝つた飛行艇に勝目がある。

『よし、下からやつつけるぞ』

クリスチャンゼンはいきなり低空へ舞下りて、荒浪を物ともせず着水してしまつた。英國飛行艇は追ひつめたとはかりに勇んで、その上空へやつてきたが、大きな艇體の影となつてクリスチャンゼン少尉のユンカース機を射撃できぬ。

『今だぞッ』

下からは、バッ、バッと旋廻機關銃をふりむけて飛行艇の土手ッ腹に猛射を浴びせ、とうとう巨大な飛行艇を撃墜してしまつた。

この奇襲は、ドイツ海軍飛行家がその後お手のものにして、散々イギリスの飛行艇を惱ました。

これも、ユンカース機が頑丈で、高浪にもたへて着水できたからである。

さて、戰爭は次第に凄愴を極めてきた。西部戰線は、膠着狀態に陷つてしまつたし、國内の物資は次第に缺乏してきた。

勝たねばならぬ。どうあつても。

そのために戰線へ送るべき飛行機は、日に夜をついで建造された。何しろ激しい戰場のことであるから、毎月第一線の飛行機の三割七分は破損し、搭乘者は二割五分の消耗率で死傷してゆく。

開戰當時、毎月三十七臺の飛行機を作る能力しかなかつたものが、大正六、七年頃には月産千臺をこへた。

のまゝ地圖の上から姿を消すのではないかとさと思はれた。

『工場では騒いでゐます。軍の註文がなくなつてから、全く仕事をしてゐませんからね』

『え、賃金は渡してあるだらうね』

『今週までは、どうにか渡しましたが――』

『職工を放すな』

ユンカースは、支配人に云つた。

『俺の私財を全部投出す。そして俺は食はなくてもいゝから職工に賃金をやるんだ』

『だつて、仕事もないのに――』

『いや、俺はさう思はん。今のドイツはなる程、絶望し切つてゐる。しかし、光榮あるゲルマン族の祖國は決してこんな事で倒れないぞ、きつと今に復活する。いや、今に戰爭よりも、もつと澤山の飛行機が必要となる時代が來る。

ユンカースは、先頭に立つて彼の協同者たちを激勵した。このまゝ航空工業を荒廢させる忍びなかつたのだ。

時には、ユンカースは世の不安と混亂を忘れた人のやうに研究室にとぢこもつて、新機の設計をつゞける日もあつた。時には工場へ出てきて、職工たちにドイツの將來を諭してきかす事もあつた。

沈衰と不振とのドン底にゐる經濟界の人々に說いて廻り、大戰中の同志に說明して、大正八年四月、デッソウ市に「株式會社ユンカース飛行機製作所」を新設したのである。

『一體今ごろ、飛行機を作つてどうするのだ、戰爭はもうすんでゐるぢやないか』

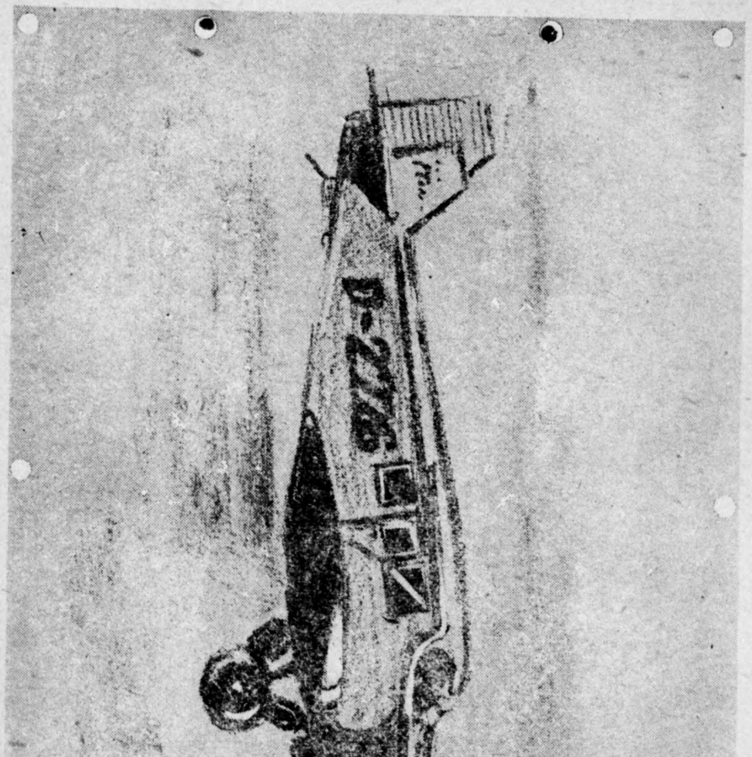
『食物にも事缺くときに、飛行機でもあるまい』

『何事も考へないで、諸君は仕事をしてくれ。たと
へ戰況がどうなつても、ドイツはこのまゝ倒れてし
まはぬのだぞ』
と絶叫した。

第二章　平和の空へ

敗戰の後に

平和はやつてきた。
五年間鐵と血との嵐が吹きまくつた歐洲の天地にも平和の光がさしそめた。
だが、それはドイツにとつては、最も悲慘な形で最も苛酷な鞭となつてやつてきたのだ。
一寸の土地も、敵の手に委さない五年間の戰爭の末、食糧の缺乏と國民の思想的混亂から、國の内側で崩れはじめた。
兵士は光榮ある勲章を泥土に投げこんで、赤旗のもとへ走る淺間しさであつた。
大正七年十一月十一日、休戰と共に、聯合軍側はドイツを再び立てないやうに、打ちのめそうとかゝつた。
國内の混亂は極度に達し、カイゼルは蒙塵してオランダに逃れた。共和黨の臨時政府が出來たが、マークは暴落し銀行は破産し、社會組織は崩壊した。
民衆は絶望と、失業と、飢餓とにみちて、險惡な日が毎日つゞく。陰慘な曇り方のもとで、暴動が起り、屈辱の日夜が連續するのだ。
誰れも明日に希望は持てなかつたし、ドイツはこ


D-2776

株主總會の席には重役連は交々立つて、ユンカースを責めた。いかにも學者の迂遠さを嘲笑するやうに――。

だが、ユンカースは明快に答へた。

『諸君の云はれることは尤もである。しかし、飛行機は戰爭をするだけの能ぢやない。今に見給へ、勝つた聯合國にしても、有り餘る飛行機と、飛行士をどう扱ふかについて苦勞するだらう。そして航空輸送が始まるに違ひない』

『そんな飛行機は今作れるだらうか』

『作れるよ、既に僕の腹案にあるのだ。それは經濟的で、安全なものでなくちやならん、それが出來たら、アメリカや日本は喜んで買ふだらう、輸出の道も開ける。これがドイツの航空工業を救ふ唯一の殘された道だと信ずる』

ユンカースは説き來り、説き去り熱心に反對者を説伏せた。かくしてユンカース飛行機製作所が生れた。そして、こゝから生れたのは、世界最初の金屬製旅客機F十型である。

ではこのF一三型について暫く耳を藉したまへ。

輝くF一三型

休戰當時の擾亂を他にして、ユンカースが心血をそゝいで、技術的にも工業的にも未知の領域に對して研究を怠らなかつた成果はこのF一三型である。

大正八年の初期に製作されたこの全金屬製の單發動機付旅客機こそ、後の民間航空の始祖鳥である。なぜならば、後年、發動機の性能が數倍し、精密な知識と技術とが旅客機の改良を齎らしたが（昭和十年頃まで）この飛行機への信頼性は衰へなかつた。

あるため丈夫この上なし、雨や雪に曝して野外に放り出しておいても傷まない。熱帯の直射下においても木製のやうに狂ひはこない。

『おい聞いたか、八人をのせて六千七百五十メートルの上昇記録を作つたそうだ』

E一三型が生れて匆々世界に大きいニュースを提供した。この飛行機こそ世界の航空機に革命を與へたものだと云はれ、當時まだ勃興期に入つてゐなかつたアメリカでは、この新鐵機に着目した。

『世界の富はいまアメリカに集つてゐる。アメリカは國が廣くて大都會が散在し、自動車工業が盛んであり、人々の生活程度が高い。アメリカこそ、航空機の發展すべき恐るべき國だ』

ユンカースは、とくに見拔いてゐた。しかし今は亡びやうとするドイツの工業を救ふには、アメリカの富を賴る外ない。大正十年アメリカのジョン・ラーセン會社の支配人と會見したとき、

『アメリカでこそ、この旅客機がうんと活躍出來ると思ふ。よろしい賣りませう』と卽座に引うけて、十二臺のF一三型を賣却した。當時、興りつゝあつたアメリカの郵便飛行に、何かよい機體を求めつゝあつたので、郵務局長バウルソン氏は、わざわざドイツへ迄やつてきて、デッソウ市にユンカースを訪ねた。

『平和用の飛行機には、祕密はありませんよ、必要となれば、私の方から技師を送つて、あなたの國で製作する指導をやつてあげませう』

『そう願へれば結構ですな』

F一三型の製造權は、かくしてジョン・ラーセン會社へ賣られ、翌年になつて同社では、アメリカ自

だから、大正八年に、このF一三型が現れたことは、ドイツ自體よりも、南北アメリカの航空界に大きい感銘を與へた。スヰス、イタリア、日本へ澤山輸出されて、國々からはドイツ航空工業の勝利として羨望の目で、敗殘のドイツを眺めた。

英佛でさへ、軍用機の拂下げに、間に合せの覆ひをつけて旅客を運んでゐた時代に、豪奢な皮張りの高級自動車と變らぬ五人乗の坐客室や、強靱なオール・メタルの翼は、いかにも近代調であつた。

『聯合國では、いよいよ我國の航空工業を根こそぎ絶滅さす考へらしいのだ。しかし、軍用機の製造を禁止されたと云つて、全面的に悲觀しなくてもいゝよ、商業機は別だからね』

ユンカースは、どんな壓迫にも、制限にも屈しなかつた。出來上つたF一三型は、甲蟲のやうな太い胴體に尖細になつた厚いカンチレバーの低翼をつけた見るから強靱なもので、翼幅十七メートル七五、全長九メートル五〇、客室は廣い窓、大きい扉、それに布張りのアームチエアが二つと、ソファが一つ煙草ものめるし、室内は靜かで話も出來る。

『驚くね、僅か百八十馬力のベー・エム・ヴェ發動機で六人をのせるのだからね』

F一三型を眺めたアメリカの技術者は舌をまいて驚歎した。自重が一トン二七七であるのに、全備重量は二トン三〇〇、だから、殆ど自重にひとしい積載量を持つわけである。普通の飛行機なら、自重の三分の一か、良くて二分の一位しか旅客や燃料をつめないのに、これはまた何と云ふ經濟的な飛行機であらう。

物凄い飛行機が出來たものだ。しかも全金屬製で

重荷にあへぐ慘憺たる姿であつた。

決して容易な道でなかつた。

鐵鎖の日

大戰敗北後の、米英を中心とした聯合國のドイツに對する態度は峻烈と苛酷そのものであつた。

休戰當時、ドイツは保有してゐた五千三百臺の飛行機は、聯合國の委員の手で全部押收された。建造中のものは一切破壞を命ぜられた。

『全くひどいですよ、何から何までそつくり押收です。小さな計器からプロペラまで封印して運び出すんですからね』

『ドイツから、一臺の飛行機も殘しておかない魂膽だ。已むを得ん、敗けたのが弱身だ』

ユンカースは、その廣大な工場にありしは幾十、幾百の荒鷲の愛機を建造したのに、今は我物顏に柵の奥まで、せゝり出す聯合國委員によつて、何もかも運び出されて、空屋同然のガラン洞となつてしまつた。

それだけならまだ我慢も出來る。ガリ、ガリ、ガラガラ、鋸と槌の音が工場の一角から響いてくる。だが、それは勇ましい建造の音ではなく、無慘な、無秩序な破壞の音であつた。

『あゝ、R一型もとうとう……』

ユンカースは、沈痛に顏を曇らして、聞くにたへないやうに耳を蓋ふた。

『博士、殘念ですなァ、あの双發動機大型機も、とうとう日の目を見ずに壞されてしまふのですなァ』

ツインデルは、身を震はせて口惜しがつた。

『どんな壓迫も、僕の頭の中まで及ばないさ。まあ

慢のリバチー發動機をとりつけたJL六型を作り始めた。

――スチンソン（日本へ來た女流飛行家の兄）ベルタウド兩氏、二十六時間十九分三十六秒の世界滯空記錄を作る。

――全備重量三千六百封度で一萬五千呎に上り、十五分間で六千五百呎へ上昇し、百十哩の速力を出し、商業機中最大の成績を出した。

――百八十馬力付六人乘で一萬二千四百呎のグロス・ヴエネテイグル（チロル・アルプス山系）を橫斷す。

――伊太利政府主催商業機競技の一二等は、ユンカース機一三型が占めた。

――大正十四年ソヴエイト人シュミット隊長以下のシベリア橫斷飛行隊のユンカース機はモスクワ、北京間を最初に飛ぶ。

等、等、ニュース・フラッシュは、めまぐるしくF一三型の勝利をつげた。

大正十二年わが國へも購入され、陸軍では安滿航空本部長が、各航空隊巡閲の乘機となり、昭和四年日本航空輸送研究所が二臺を使用して大阪別府間の旅客輸送に好評を博してゐる。

それのみでなく、南米のコロンビアの航空會社スカヅタをはじめ、北歐でも、ソ聯でもF一三型はひろく使用され、至るところで好評を博して行つた。これらは壓迫と否認との桎梏にあへぐドイツ航空工業に一脈の血路をつけてゐたのである。

辛じて、亡び去ろうとする航空技術を喰ひ止めてゐたのである。だから、F十三型の好評が、海外でどの位高く評價されてゐやうとも、ドイツは敗戰の

三型は制限から除外されることが出來た。
『よし、ではいよいよ大型機にとりかゝらう』ユンカースはこれに力を得て、全備重量九トン、二百四十馬力發動機四基付の大旅客機の製作の着手した。
『仕事はぐんぐん捗つてゐます。もう胴體は完成しました。翼もあと、張るばかりになりました』
ツインデル技師は、うれしさうに、ユンカースの室へ入つてきて報告した。が博士の顔は暗かつた。
『どうしたのです、先生!』
『いやたつた今、通牒を受とつたのだ、聯合國委員からあの大型機は否認さるべきものだと云ふのだ』
『えッ、否認ですつて』
『さう、壞すか、外國へ賣つちまふか、二つの一つだ』
あゝ、先生、それではこの工場を閉鎖するも同じことですよ』
負けぬ氣のツインデルも、慘酷すぎる聯合國の要求に悲憤の涙にくれた。

殘る百二十人

曾つては五千の職工を擁した大航空工業。必死の離業喰止めにも拘らず、航空工業の見込みがないと身勝手にきめて、暇を貰ひに勞務課へくる職工が日に十人と下らない。
『もう百二十人しか殘つてゐません。それも浮足たつてゐますよ』
工場には、操業の行はれない日がつゞく。職工たちは不安に駈られて、日一日と減つてゆく。
『職工を散らすな。とくに熟練工だけは、どうあつても手放すな』ユンカースは他日の復興した曉を考

時を待たう』

ユンカースは毅然として顔をあげた。もうそこには、絶望も不安もなかつた。殘された商業機への道を進んで、ドイツ航空工業の亡びるのを守り拔く決心と燃えた。

けれども、どう見ても、そのころのドイツ航空界は何一つ芳ばしい事はなかつた。英佛にも有り餘るほど飛行機が殘つてゐて、註文などを受けられそうもない。その上ドイツは、政治にも經濟にも半身不隨になつてゐる。苛酷なヴエルサイユ條約によればドイツ國境は、實質的に鎖國の狀況にあつた。國內の經濟市場は全く亡び去つてゐる。

その上、大正十一年になると、聯合國側の監視委員は、遂にドイツが空軍を保有してはならない外、六十馬力以下の小型飛行機の製造を除いて、全面的に大型飛行機はそれが平和用であつても、製造を禁止された。

がんじがらみの鐵鎖である。

『ユンカースの旅客機なるものは頗る疑はしい性質を持つてゐる。機關銃と爆彈をつめば、すぐ軍用機になるではないか』

と、說き始めたのである。勿論これは技術的に見て適正でなかつたが、いろいろの政治的意味から、論じられた。

しかし聯合國側にも具眼の士があつて、佛にフランス空相として有名な手腕家であつたルーラフ、エイナック氏は、

『商業航空を同時に隱れた軍事航空として作り出すことは不可能である。軍事航空と民間航空とはその特質は全く異つてゐる』と判決を下し、やつとF一

にあつた。何もかも戰勝國たる聯合國の許可なしには製作も飛行も出來ない。
ところが、ドイツを極度に押へつけたために、反對に不便を感じてゐるのは、英佛である。航空路なども、ドイツを避けるために大迂回をせねばならないしドイツの製作技術を取入れることも出來ない。
『見ろ、人を呪へば穴二つだ。今にきつとこの制限も取除かれるに違ひない。その時になつてからぢや手遲れになる』
ユンカースの先見の明は、その曉こそ、航空輸送の時代が來ることを信じた。
大正十一年六月、デッソウル大風洞を建築し、工場の設備を増加した。
『實際に使つてみた結果は、とんな事でもいゝから研究部へ通知してくれ給へ、それによつて設計を考へ直す。材料も試驗するよ』
ユンカースは、陣頭に立つて、材料試驗、金屬科學、空氣力學の研究には、彼自ら作業服一枚で毎日も家へ歸らず實驗をつゞけた。
これは後で述べるが、ユンカースは自然製飛行機を消化するために設立した、航空輸送部と緊密に連結した。
大正十一年にはF一三型だけでも二十五臺を整備し、翌年には六十臺となつてゐる。
そして大正十一年には旅客千名と貨物十五トンを運んだのが、十二年には八千名に増加し、六十五トンの貨物に激増した。
『今に、必ず航空工業の黃金時代が來るよ、來たらば、その中心だから、今の苦境だけを切りぬければあとは大丈夫だ』

れらの職工は臨時雇で、次から次へ變つて行く。しかしその姿を眺めつゝユンカースは、

『あいつらは、俺の寶だ。今にドイツが復活するとき、あの四千人を常雇として、飛行機を作ることが出來るのだ』

と想ひ描いた。

そのうちに早や二年はすぎた。頭を下げた上を土足で踏みにぢつて、青痰をひつかけられたやうな屈辱極りない「否認」は、大正十一年になつて、やつと「制限」の二字に置きかへられた。

戰勝國の鼻高々と、ドイツに對しては、高馬力飛行機の製作や、多數の飛行機の保有を制限されたのであるが、一切を否認された佗しい二年間よりは少しいゝ。

しかし、あらゆる作業は嚴しい統制委員會の監視へると、こゝで人的資源を失ひたくなかつた。

と云つて飛行機の仕事はない。業務は衰微する計りだ。彼は、殘つた百二十名の技術者と、勞務者を散らさぬために、已むなく小さな一般工業をとり入れることにした。

『どんな仕事でもいゝ、とにかく工場を生かしておきたい』

鐵製箪笥、スケート靴、食卓道具、ストーヴ、自動車橇、トラック……そんなものが飛行機工場で作られた。

一時の窮境をどうにか切り抜けるためだ。たがそつ間に、このやうな仕事をつゞけつゝ金屬、特に輕合金の仕事に經驗を持つ職工を養成しておくことが出來た。

延人員で四千人の職工を使つたことになるが、こ

マグデブルグ工作機械製作所でも、餘り仕事が芳しくない時だつたから喜んでユンカースの指揮下に馳せ加はり、こゝにユンカース飛行機、發動機、マグデブルク工作機械の三者は姉妹會社として、しつかり地歩を固めて行つた。

まづL一型四氣筩水冷七十五馬力が出來ての經驗から、L二型水冷六氣筩二百六十五馬力が、出來上つた。

大正十四年末には、早くもL五型二百八十馬力が出來て、堅牢と、燃料消費の少い點でメロセデスやベ、エム、ヴエの好敵手として航空界に大きく姿を現はしてきたのである。

遂に大型機へ

大正十二年、曾つて涙をのんで、聯合國委員の手で廢棄した大型旅客機の姿も再び現はす日が來た。

『眞の發明者と云ふものは、たゞ自分の考へを發表して特許をとれば、それで滿足してゐるものぢやない。自分が率先して陣頭に立つんだよ』

ユンカースは、部下に說いてきかせた。

『すると、事業家を兼ねるわけですね』

『いや、營利を追及するのが目的ぢやない。體系的に技術上、工業上の研究事業をやつてあらゆる連累を發見するのだ。そして繼續的な製作、實驗を行つて、製作業者と、消費業者の要求を注意深く考へるのだね。そのうち、最も望ましい結合を送り出すことだ』

『そうすると、あくまで自分の發明を忠實に作り出してゆくわけに行きませんね』

『それでいゝのだ。自分の發明に、こだわつてゐる

とユンカースは、自ら菜葉服に身を包んで、百二十名の職工と食堂で共に語り、休暇には彼等と談笑した。

その一面ツインデル技師以下、技術者を集めて、

『ドイツ航空界が健康をとり戻すのも、もう間もないことと思ふ、それについて私は、第一の仕事として、航空機の統一と云ふ事を諸君に骨折つて貰ひたいのだ。』

『つまり、發動機と、機體を一貫してやらうとするのですな』

『左樣、勿論、メルセデスにし、べ、エム、ヴエにしろ、ドイツは立派な發動機はある。しかし、ユンカース機の輸出が、近頃の如く多くなり、また航空輸送部の方も盛んになるとだね、この際、本所自らが、獨特のエンジンを製作すべきであらうと信じる』

『贊成ですな』

ユンカースは、前にも述べたやうに石油發動機の改良から發足した人である。むしろエンジンの方がお手のものだ。

技術者はゐるし、ユンカースの熱心さは人々を奮ひ立たせるに十分であつた。

ユンカース飛行機製作所の一部の發動機工場は今まで、小型の二氣筩發動機を作つてゐたのであるが航空發動機を作るために、ユンカース發動機製作所を獨立させた。

『この際だ、一つ君の方で、エンジン製作に協力してみる勇氣はないかね』

ユンカースは舊友が經營してゐるマグデブルグ工作機械製作所へやつてきて、時勢について說いた。

ユンカースは反駁して。彼はドイツ特許三一〇六一九號低翼單葉三三七五二二號波狀金屬覆の翼、三〇九六四六號管狀構成結合の翼組、四二一六〇六號空虛胴の鋲結合の四つの利刄をひつさげ、大型飛行機における金屬の有利、多量生產に於て組立の場合の勞力、經費の輕減を主張して下らなかつた。

『ユンカース博士の云ふことも一理ある。彼は明治四十四年にグライダーの特許をとり、大正七年に、翼に直接負荷さす事に成功してゐる。しかし、大型飛行機JG　型（九トン）トーブル大飛行艇（四十二トン）も要するに紙の上の設計で飛んでゐないぢやないか』

と冷笑を以て酬ゆるものがあつた。

『今に出來上るのを待つてくれ』

ユンカースはもはや辯駁する時間も惜しいほど大型機G二四型の製作に熱中した。

大正十二三年になつて、G二四型は、全貌を表はした。胴體の下についた低翼、翼上にとりつけられた二つの發動機、翼內に收められたガソリン・タンク――これは、最初試作されたG　三型を改良したものであつて、翼巾二十八米五〇、自重三トン八〇〇、積載量二トン二百、全備重量六トンの巨人機であり、十人の旅客をのせるものであつた。

しかもこのG二四型は、F一三型に劣らぬ成績を擧げたのである。

G二四型の出現は、歐洲の航空路の花形となつたかの觀があつた。工場の營業部は、てんてこ舞ひの有樣で註文を受けてゐた。

『こいつは愉快だ。アルプスの高山をこへるオーストリア航空會社と地中海を飛ぶ伊太利のトランス・

と發明狂になるよ、技術者の偏狹になるのだ。若し必要とあらば、暫く自分で製作業者と市場の兩方に備へることもいゝぢやないか』

　ユンカースは、あくまで航空機が、交通機關の新らしい形式として發展してゆくことに對し、飛行機、翼、發動機、プロペラの一切を提供し、一面自分の作つた飛行機を利用して航空輸送を旺盛にしやうと企てる。

　ところで、ユンカースF一三型の赫々たる成功に對して、世評はまだ十分に贊成の意を表してゐなかつた。

『合金屬製飛行機は成るほど堅牢だらうが、原價の高いことに疑問を持つね』

　と云ふ設計者もあつた。操縦者の中には、低翼式を何となく毛嫌ひするものもゐた。中にも、ユンカースの唱へてゐる飛行機の大型化について、技術者は深く懷疑的であつた。

　それは、不幸な二乘三乘の法則が存在してゐたからである。

　寸法が倍になると面積は二乘に比例して增える。そのとき、この飛行機の重さは、元の三乘に比例して增えてゆくと云ふのである。だから今、とても成績の良い飛行機があつて、これを二倍の大きさにすると、翼や胴の面積は二乘で增えるのに、重量は三乘になるから、ある大きさまでゆくと重量が制限點に達し、飛べなくなつてしまふと云ふ論であつた。

『それは尤な話だ。しかし、それは原形と同じ材料を使ふ場合の話だらう。金屬を管にし、波板にすれば必ずしも三乘で增えない。例へば、小型機の椅子や、窓や鋲が、何も二倍の寸法にならないからね』

一ケの新記錄を作つた。

それがしかも、たゞレコード破りのレコード飛行ではなかつた。

『ユンカースG二四型の輝かしい記錄をみると、何れも一トン乃至二トンの有効積載量を以て、二百十粁の驚くべき高速力を出し、千粁以上の距離を飛んでゐる。これは、實用上同機の性能が秀逸であることを物語るに十分だ』と專門の雜誌は、盛んに書き立てた。

それのみぢやない。もつと驚くべき大飛行がG二四型で行はれた。

昭和元年七月、ベルト・クナウス博士一行は、ベルリン、北京間の航空路の開拓に、飛び出したのである。

ユンカース博士は、クナウス博士のために新造の工機を提供し、

『シュナベル君、君の操縦なら間違はあるまいが、どうかこの新航空路の開拓を達成して、無事に歸つてこられる日の速かなることを待つてゐる』と鄭重に挨拶した。

『全力を盡してやりませう。途中で修理や、發動機積替へを許さぬこの全航路に對して、ユンカースG二四型に乘つてゆけるのは全く安心です』と答へ、二十四日の夜、荒模樣の空をついて飛び出した。

まんぢりともせず一夜を明かした博士は、二機無事ケーニヒスベルヒ到着と知つて、モスクワにゐる友に、今日中に着くと確信を以て打電した。果せるかな二十五日の夜はモスクワを飛びこへて、ウラル山麓まで伸してゐた。更に每日電報は健全な二機の進みを示し、四日半で早くもイルクークに到着し、

アトリアチイカ會社とから一ぺんに註文が來てゐるぞ』

『それや主任さん、この間のトルコの熱帶地方とスエーデンの雪國からの註文によく似てゐますね』

『うん、何しろ金屬製で寒暑の影響を受けないからなア』

今まで、ユンカース會社は、いろいろの形式を大小各種の飛行機を作つてきたが、G二四型に至つて遂に大型旅客機への第一歩を踏み出すことが出來たと云つてもよいのだ。

昭和二年、この年は世界の航空界は、ユンカースG二四型によつて彩られたと云つてもよい。

『このG二四型こそ僕の畢生の仕事である金屬製大型機の基礎なんだ。この構造をそのまゝ大きくし、強馬力にすれば百人乗飛行機も遠からず完成すると思ふ。だから、一つ腕によりをかけて、世界をアッと云はせてくれ給へ』ユンカース博士は、いまし二トンの荷物をつみ、轟々たるユンケルス二三〇馬力三基の爆音をひゞかせて、まさに離陸しやうとするレーデル試驗飛行士の側に歩みよつて、力強く、言つた。

『大丈夫です、先生、きつと大レコードを作りますよ』と、弦を放れた矢の如く、千メートルまで八分でかけ上り、百卅七粁の高速力を出して悠々七時まで飛びつゞけた。

三日おいて、ホルン飛行士が代つて、一トン積みで、百四十粁の速力を以て十四時間飛んだ。

それから間もなく、ユンカース會社の主任飛行士チンメルマンとリステツツ兩氏は交々飛んで、次から次へとレコードを改めてゆき遂に一ケ年に、二十

北京へついたのは八月末、それから九月末に二萬粁を往復翔破して伯林へ歸つてきたとき、眞先きに出迎へたユンカース博士は、

『よく歸つてきたね。何處も異狀はなかつたか』と長旅から歸つた愛兒を迎へるやうに色褪せた翼を撫でながら、技師のウインテルフエルド氏に尋ねる。

『申分なしでした。シベリアの曠野に吹ざらしで置いてあつても、ビクともしませんでした』と答へればシユナベル飛行士も、

『全く國內を飛ぶやうに安樂な飛行でした。客室型の飛行機なればこそですよ』と讚美の聲をあげる。

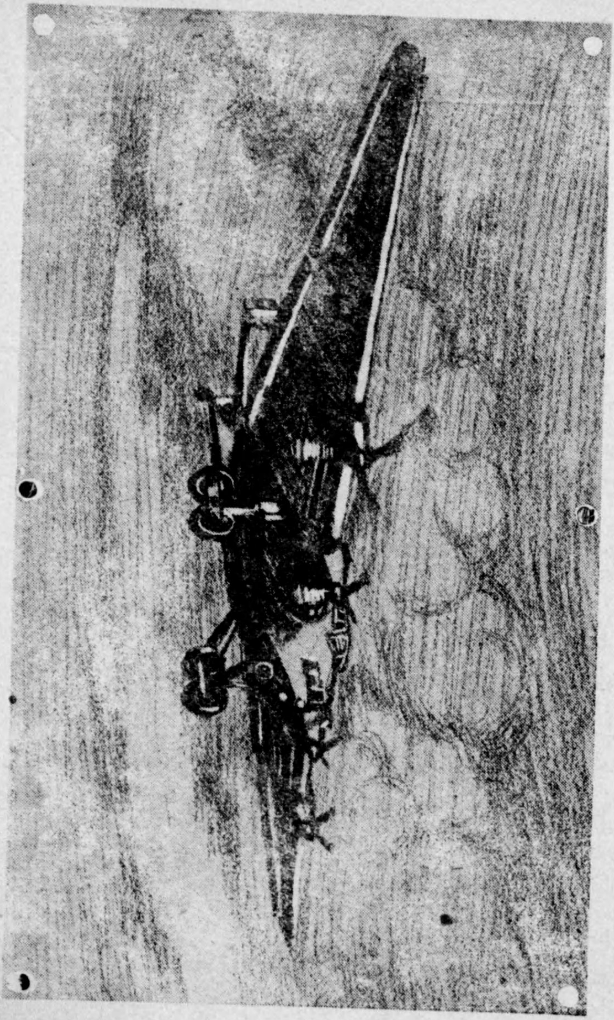
ユンカースG二四型、その赫々たる成功は博士の自信をさらに高めた。その經驗と、すぐれた特長とは博士を勇氣つけた。

昭和二年、更に大型のG三一型が完成したのだ。合計千六百馬力の三ケの發動機や、低翼全金屬製、美しく至れり盡せりの客室などすべて、G二四型から出藍のほまれを見せてゐる。

翼巾三十米、全長十七米、自重五トン餘りに對して、滯積量は三トン三に及ぶ。かくて、十年前の夢想だつた九トン旅客機は、遂に、實現しやうとしてゐる。

とりわけ、全長五米七五〇、巾二米、高さ一米八五の廣いゆつたりした十二人乘の客室の豪華さ、皮張り四人掛けの一室が三つ、折りたゝみ式の机、通風採光の苦心、まことに大型旅客機として、最初の設計であつた。

果せるかな、G三一型は、歐洲南米の航空輸送會社から註文が殺倒した。チンメルマン飛行士は相かはらず巧妙な腕を振つて同機のために南歐一周や、



機はかくして生れた。天井に大きいハッチが切りひらかれ、そこからは重さ二千五百トンの大水力發電機を細かく分解して一つ一つ積みこまれた。

ニユギニアのプロロ山地のジヤングルの天高く、貨物機は飛び交つて、砂金鑛區へ次から次へ物資や機械が運ばれたのであつた。

かくして、空のトラックは、世界の果に、航空文化を以て、近代調を彩り、唯一の運輸機關であることを示した。

W三三型は、G三一型を少し、小型にしたものと思へばよい。翼巾十七米七百、全長十米五――しかし自重一トン二〇〇に對して、一トン二三〇の荷物をのせられ、ユンケルスL型發動機一つで、百九十粁の高速力を出したのをみても、いかに優秀な飛行機であるかは知れる。

『僕の作つた飛行機のうちでW三三型は最も自信のある機體だつたよ、あの一號機は、現代のアラビアンナイトなのだ』

とユンカースは、いつも云つてゐた。まことに、W三三型の一號機――それは大正十五年に完成したユンカース第七百九十四號機、ドイツの國籍でD九二一號――シルドクレアと命名されてゐた。

『こいつを一つ、うんと使つてみやうぢやないか』

『面白いですね、我々で、いろいろの飛行を計劃してやつてみませう、ねえルーズ君』と、シユネベル飛行士は博士の提案に同意した。

『僕も一役買ふよ』リステイツ、Lエツツアードの兩飛行士も、同座してゐたが、出來たばかりの銀翼黑胴のシルドクレア號を惚れ惚れと眺めた。

『まあ一つ諸君の腕におまかせする。本社飛行部の

アルプス一周に活躍した。かくて、ユンカースが、その初一念は、遂に實現する日が來た。彼は、この小成に決して安じなかつた。いよいよ飛行機の改良と、性能の向上をもつて、祖國への獻身につとめやうと決意を固くしたのであつた。

第三章　建設への道

シルドクレーア號の誇り

『飛行機は、どこまでも實用性がなくちやならん、僕は、飛行機が大きな貨物を地上海上機關に代つて輸送する時代が必ず來ると信じてゐる』

ユンカースはある日工業クラブに於て、こう話しかけた。

『それや君の飛行機に對する過信だよ。旅客や郵便は、航空輸送の對照になるがね、貨物のやうな嵩張つたものはやはり地上を行つた方が得だよ』

と大抵の技術者は反對した。

『いや、そうぢやない。そりや文明國での事だ。近頃採金鑛業を始めたニユギニア・クプロの砂金區だね話にきくと、僅か四五十粁ばかりの山奥だが、途中道はないし、蠻人の來襲があるし、途中三千米の高山とジヤングルがあつて、一週間もかゝるそうだ。そこなど、飛行機で運べばいゝと思ふがな』

ユンカースの胸中には、紫煙をくゆらしながらの雜談に、すばらしい思ひつきが浮んだ。

その夜から新らしい設計が始つた。W三三型貨物

み、デッソウ、テヘラン間四千粁を、二十七時間に飛ぶ——

コレラ流行の中心地ブシール、バンターアバスに飛び醫師及注射器によつて猖獗を極める悪疫防止につとめる——

昭和三年シルドクレア號パルシア鐵道建設計畫地を空中測量し、途中三千米のエルスブール山をこへハマダンに達するコースを飛ぶ。

『おい、このニユースのどれがお氣に召したかい』

『どれも、これも、パルシヤにおける千五百時間の飛行中の手記だけでも、一冊や二冊の現代アラビアン・ナイトが書けるね』

『もつと大きいニユースを敎へやうか』

ユンカースの事務所へ行つておれば、航空界の動きが判ると云ふので、新聞記者は、いつも入れ替り立ちかはり、押しかけてくる。

『あッ、博士、何か新らしいお話は』

『うん、大分皆さんお揃ひで熱心だな。別に新らしい話はないよ、僕のところは、どれもこれも古くてカビが生えとる。その古いところから、新らしい仕事が生れるんでね』

『こりや面白いですな。時に、大西洋逆横斷は、いよいよ決行しますか』

『そのつもりだ。昨年出發した二臺とも引返してしまつて殘念だつたがな』

『どうかして我國の手で先鞭をつけたいですね』

リンドバーグが、紐育から巴里の飛行に成功して以來、大西洋横斷は、飛行界の最も華やかな話題であつた。

誰れが最初に逆コースを開拓するだらうか——。

精鋭をすぐつて、面白い飛行をやつてくれ給へ』

『承知しました』若い鳥人は異口同音に答へた。

七月十日、シルトクレア號水上機ワルネムンデに飛び本年度水上機體能競技に一等賞を獲得す。まづ第一の吉報が入つた。

翌昭和二年二月、スエーデン・デッソウ間無着陸十六時間の新記錄を作る。三月シユネベル氏五百瓩をつみ十六時間滯空す。更に十二時間十一分滯空し二千七百粁を飛ぶ。

月、水上機に改裝して十四時間に千七百粁を飛ぶ。さあ事務所では飛行士と一揉め。

『おい、餘り活躍しすぎるなよ、新聞社からの電話の應接で大變なのだ』

『だつて、もう少し活動せぬと大將の期待に背くからね』

『次の計畫は何だ』

『胴體をみてくれ、面白いだらう』

『何だい、そりや "Tod dem Schadling" だつて、害蟲を殺せつて、何をやるんだい』

『機體の內に大きい砒素劑を入れるタンクがあつてね、森林や田畑の害蟲にふりまくのさ、飛行機のお百姓さんだよ』

『そいつは、ほんとうの實用的な仕事だね』

『うん、だから、しつかりやるよ』

この害蟲驅除飛行は北米やソ聯で、後に實用化されてゐるが、ユンカースW三三型の貢獻した開拓的飛行に負ふところが多い。

八月、リステツツ、エッアード兩氏五十二時間二十三分を飛ぶ——

南ペルシアのコレラ流行につき注射器十萬本をつ

な物凄い天候は始めてです。ユンカースW三三型でなかつたら、翼をへし折られてゐたと思ひますよ』
とケール大尉が述懐した。

　それのみでない。ブレーメン號の姉妹機、オイローパ號は、その秋フンネフエルト男、リンドネル飛行士、レンゲリッヒ航空士の乗組みで日本へやつてきた。日本から太平洋を横斷する計畫だつたが、時季が遲れたので、男はオイローパ號を帝國飛行協會へ寄附して歸國した。間もなく男は急病で逝去したが、遺愛のオイローパ號は、日本にあつて相當活躍し、また同型の報知日米號は、本間海軍中佐、馬場英一郎飛行士、井上知義通信士が搭乘して、太平洋横斷に出發したまゝ行方不明となつた。

　成らなかつたが、その壯擧はいたく國民の心を打つたのである。

　ユンカース博士は、その工場から生れる優秀な機體に確信を抱いてゐた。海外の市場におけるユンカース單葉の好評と信頼にも自信を持てた。だが、一營利業者ならばそれですむ。彼にとつては、祖國である。

『徹底的に敗戰したドイツは、その殖民地を失つてしまつた。しかし、經濟的、商業的發展のために、迅速な交通網を把握することが、この窮乏から救ふ唯一の道ではないだらうか――』

　と考へた。また工場の經營についても、

『自社の製品を、最も公正に批判し、研究して改良するために、自ら消費者となつてみなければならない』とも考へた。

世界中の眸は、魔空北大西洋に注がれてゐた。アメリカから歐洲へのコース回轉の影響で、追風に惠まれるが、逆コースは、たへざる逆風と、ラブラドルの氷雪濃霧の危險がある。フランスの名飛行家ナンゼツセ大將をはじめ、數名の大膽な挑戰者は盡く行方不明となつてゐる。

『北大西洋の逆横斷は飛行家の墓場だ』と恐れられてゐた。

昭和三年四月、ドイツの詩人飛行家フユネフエルト男は、ユンカース博士と協議の末W三三型ブレーメン號を以てこの壯擧に乘り出した。

霧の戰士と云はれる名パイロットのヘルマン・ケール大尉、アイルランド人のフイツモリス航空士が乘りこみ、荒天をつき難航を重ね、遂に魔空を突破して、北米の一角ラブラドルのグリンクー島に到着した。目的地のニユーヨークには達しなかつたが、三千百粁を翔破して死の試錬に克つた。

『今日は、救援機に乘つてフユネフエルト男一行が紐育へ來るんだ』

お祭騷ぎのすきなアメリカの市民は潮のやうに紐育市有空港へ押よせた。

大型フォード旅客機が飛んでくる。そこは折柄滯米中のユンカース博士が乘つてゐた。蜻蛉のやうに出迎へ飛行機が飛び交ふ。

『見えたッ』

『來たッ』

魔空の三勇士は健やかな姿を遂にニユーヨークに現はしたのだ。眞先きに馳けつけたユンカース博士は、喜悅にあふれて、しつかと三勇士に握手した。

『どうにか逆横斷の一番乘りをやりましたよ、あん

つくしませう』

と潔よく申出に應じたので、ユンカース航空輸送部では、まづ十五本の航空路を決定した。

『航空輸送は、狹い國内だけで滿足してゐてはならぬ。近隣國の航空會社とプールを結べ、互に乘入れをやつて大衆の便利を圖るべきだ』とユンカースの主張する通り、十五航空路は、ドイツ國内の主要都市だけでなく、北歐、バルト沿岸諸國と協定して航空路を伸ばして行つた。

開設當時は十一臺の飛行機で、三萬五千粁の輸送路を有してゐたにすぎなかつたが、三年後の大正十四年には百五十臺が就航し、二百十四萬五千粁を飛ぶやうになつた。旅客のときは二十倍に激增して四萬人を運び、百五十トンの貨物郵便を運んだ。

『同じ乘るなら、ユンカースの飛行機は乘心地がよいよ。フランス製のはやかましくてガソリン臭くていけない』

『ユンカース機は安全だよ、不時着しても、脚が壞れ、主翼が地面に當つて潰れても、客室まで破損せぬからなあ、あれが高翼式なら、客室が眞先につぶされる』

空の旅になれた人々は、ユンカース機をほめた。

『成績は頗るいゝですよ、博士』

ザクセンベルヒ氏は、輸送部の會計簿を示しながら說明してゐる。

『君たちの努力を感激してゐるよ。ところで僕はもう一歩進めて君たちの努力を希望するのだがね。今の資本金五百萬マークを倍にしやうと思ふ』

『そりや少し早計すぎやしませんか』

『いや、本社だけでやるんじやないよ、北はスガン

ドイツの政治も次第に秩序をとり戻しつゝあつたし、青年に對して航空機の趣味と教育を與へる獨逸航空聯盟も生れ、財閥汽船會社などの投資によつてエーロ・ロイド會社が出來て、ドイツ國内から隣接國へ二十三本の航空路を設けてゐた。

『エーロ・ロイドがあるか、まだ航空路の必要もあるし、本社の飛行機を利用して生産を促進することも必要だと思ふよ』

『その點は全く同感だ。事業の方は我々で引うけてやつてみやう』

とユンカースの親友たるゴダート・ザクセンベルヒ氏とゴットフリート・カウマン氏は進んでユンカースの提唱に乘り出した。

かくて大正十一年、ユンカース飛行機會社に航空輸送部が設けられた。

F一三型、G二一型、W三三型……と優秀な製品が工場から生れると共に、これの機材は、航空路に使用された。

『エーロ・ロイドとは競爭すべきぢやないね。むしろ協力してゆかねばならない』ユンカースは、嚴に個人的な競爭を戒めた。ユンカース輸送部の誕生はエーロ・ロイドの經營者を驚かして、これは手強い競爭相手が現れたと思はせたが、カウマン氏は、逸早くエーロ・ロイド本社を訪れた。

『お互ひに一個人、一會社の營利を云々してゐる秋ぢやないと思ふのです。社長（ユンカース）は、貴方の方とよく協力して航空路も重複せぬやう、切符を共通にしたいと仰言るのです』

と眞意をつたへた。

『よく判りました。協同してドイツ航空界のために

て株券をまき上げて乗つ取りをやつたのだ』
『一石二鳥をねらた商賣人以上の凄腕だ』
などと非難するものもあつた。いつの世にもたへぬ狭量な嫉視者流の惡聲である。
『航空事業は、個々たる感情に囚れてはやれない。何を犠牲にしても國家の體面を向上させるために、全力をあげて、よい飛行機の生産、よいサービスの提供、安全と高速の實現――これが目標なのだ』
ユンカースは、左右の人々に、決して非難者には反駁するなと命じた。それよりも、もつと歐洲ユニオンをよくすることが肝要だつた。
ベルリン、ワルソー、マルメルに修理工場が設けられた。主要都市の飛行場に組立工場と豫備機を配した。
ユンカース航空路は、どこで飛行機が破損しやうと不時着しやうと、すぐ最寄のところから代りの機が飛んできて旅客に迷惑をかけなかつた。
大正十二年、ユンカースは、ソ聯に赴いた。『この國は、一切が立て直しの第一歩だ。そして國土が廣くて、資源がある。飛行機の發達にはもつてこいの國ですよ』
と政府要路の人々と會見し技術の提供を約した。
モスコー郊外フイリに工場が設けられ、多數の技術者が教育と組立に入りこんだ。ロシアの飛行機はいま獨立の域に達してゐるが、それでも初めに薫陶をうけたユンカースの名殘をとゞめ、構造や形態のどこかに、ユンカースを髣髴とするものがある。
ユンカース博士はたへず海外へ旅行して、ユンカース機の販路を求め、航空路を開いて行つた。
大正十三年、ユンカース會社の手で運ばれた航空

ヂナビアから、南は黒海へかけて澤山の航空會社があるね。見給へ、この通りだ』

と地圖を示した。

そこには、第一次大戰後、民族自決主義によつて作られた小國群像が、各々貧弱な航空會社を細々と經營してゐるのであつた。

デンマーク國のダンスク航空會社を始め、ドイツ國内にも、短い航空路を經營してゐる小會社が澤山あつた。

『これらの小會社は資本金が不足して、いゝ飛行機が買へず、從つて旅客の評判もよくない。だから、これらの會社へ、ユンカース機を無償で貸與するのだ』

『それで？』

『そして代償に各航空會社の株券を受けとつて管理權をこちらに持つのだ。どうだらう』

『尨大な計畫ですね、歐洲ユニオンとでも云ふべきですな』

『いゝ名だ、それにしやう。カウマン君と共に交渉に當つてくれたまへ』

大正十五年末になつて、遂に歐洲ユニオンは成立した。一千萬マークの大資本で二十社を糾合して、世界一の航空輸送團を作り上げてしまつた。勿論カウマン、ザクンベルヒ兩氏の努力に負ふところは多いが、ユンカースの明敏な計畫が中心であつた。

航空事業は強力な集中政策によつてのみ完成しうることを明示したのがユンカースの思想は、數年後ドイツ政府がルフト・ハンザに統制する意志を與へたのである。

『ユンカースは狡い男だ。自社の飛行機を押しつけ

このころ、イギリスでは、航空輸送會社を統合して國家補償の獨占會社にまとめ上げてゐた。ドイツの航空輸送も、エーロ・ロイドと、ユンカースの對立によつて、成績も擧つてゐるが、補助政策としては薄弱性を加へつゝある。

企業集中は必然の運命である。交通省では大正十四年秋、こゝに兩會社の統合を行ふ決心を始めた。

エーロ・ロイドとユンカースからは、統合について數名の交渉委員が何回も政府委員と會見した。

航空輸送事業は決して營利として成り立つものではない。兩社とも戰後疲弊の眞只中から、多大の犧牲を拂つて、どうにか目鼻のつくところまで漕ぎつけてきたのだから、おいそれと、すぐ合併統合に應じうるものではない。

事業の促進には對立と競爭とが必要であるとする論者もゐた。兩社の利害の衝突するところも少くなかつた。

『諸氏の申されるところは何れも一理があると思ひます』今迄默々としてゐたユンカース博士は、靜かに立ち上つた。『また政府側の云ひ分も尤もである。しかしこゝで政府委員にも、兩會社の委員にも私はその一人として申上げたいことがあります。聯合國の制限は尙ほ消滅してゐない今日、我々は、これを自らの力で打破る實力を祖國が持つために、今は個人をすてゝ國家に合流すべきだと思ひます』と、大局から國策への歸一を說いた。

『國家管理下に合同されるのぢやなく、國家に協力しやうではないか』との叫びは、流石暗礁にのりあげてゐた統合問題もスラスラと解決した。二千五百萬マークの資本を、政府が四割五分、殘る五割五分

旅客は四萬人に達した。それは世界中の航空旅客の三分の一に當つてゐるのだつた。

ルフト・ハンザ

『九ケ條約が改正になつたが、これぢやむしろ改惡だよ』

ヴエルサイユの屈辱條約の鐵鎖に甘じる制限の五ケ年がすぎた大正十四年六月、航空機についての苛酷な九ケ條の制限が改められると喜んだのも束の間、新規則は、むしろ改正前より、嚴重な監視をうけるやうなものであつた。

『聯合國は恐いんだよ、あれ丈け壓迫し、制限してもドイツの航空界は立ち直つてきたからね』

全くだ。軍用機を禁止すれば民間機が出來る。民間機の保有量を制限すればイタリア、日本、スエーデンなどに工場を移す。馬力を制限したグライダーが發達する。どんな法的制限禁止も、勃々たるドイツ人の復興への熱意を、押へ切れるものでなかつたのだ。

『速力を百八十粁に、搭積量を六百瓩になつたのは少し良くなつたが上昇限度四千米は以前のまゝだ。これぢや面白い飛行もない』と、こぼす飛行士も中にゐる。

ユンカースにとつて、飛行機材料の輸出入、製造數量について、聯合國航空保障委員會の認可がいることになつたのは、何と云つても打撃だつた。

『殘念だが、實力を養ふ外ないんだ。齒を喰ひしばつて我慢しやう。いつか必ずこの鐵鎖を自分の力で破る日が來やう』とますます工場の充實と航空輸送の發展に全力を注いだ。

たへやうと會見にやつてきてゐる。博士は、G三八型の模型を手にしながら、

『いや、まだ眞の理想的とは云へぬ、だが本機は、出來るだけ航空力學的に特性をつかむやう、翼斷面を選び、抵抗を最少にする目的から、發動機や客室を翼内に納めた。

翼内に重量物を巧みに配列したことゝ、材料を適切に選んだので、このやうな大型の割合に輕く出來て、積載量の大きいのが、まあ特長だらうね』

『出來上りの大きさは、どの位です』

『翼巾は四十四米、全長二十三米、まづ陸上機ぢや最大のものだらうな、中央翼と云ふか眞中のところは厚さ二米以上あつて、ガラス張りの窓をつけ、この内に客室がある。

ユンケルス六百馬力四臺は、翼内にあつて、長い軸でプロペラを廻はすやうにしてあるのだ』

『重さは？』

『自重が十三トン、普通のときは七トンの積荷を許すが、最大の場合十一トンをつみ、全備重量二十四トンまで大丈夫だ。それでまづ百八十粁以上の速力は出せる』

『すると、飛行士や機關士が七人、旅客が二名、郵便物二トンと云ふ割合ですな』

『そう、まあ、出來た上で見てくれ給へ』

昭和四年十一月、デッツウ飛行場の上空に、美事この巨人機は飛んだ、機上のユンカース博士は、機首の航空室から、翼内の客室へ入り、廊下を歩いて後尾の客室へ行つた。

『これだ、これこそ私の夢想だつたのだ』

下界はキラ〳〵と美しい初冬の陽をあびて、緑の

を民間側で引うけて、こゝにルフト・ハンザは成立した。

ルフトハンザは年一年、翼を伸ばして行つて『天下の空は伯林に通ず』と謳はれるやうになつた。敗戰國たるドイツは、民間航空に於ては、勝利國の英佛を遙かに凌いだ。

『さあ、僕は元の工場へ歸らう、いゝ飛行機をルフト・ハンザに提供することだ。カウマン君、君はザクセンバルヒ君と協力して、會社の經營をたのみますぞ、フインデル君、いゝ機體を考へやう』

とユンカースは、古巣デッソウの設計室に腹心の部下を集めて、新鋭機への着想をいそいだ。

まづ世界一の巨人機三八型が生れた。

一、飛行機は巨大化するほど有利である。

一、翼の外に何もない――飛びゆく翼

この二つの理想はユンカースが飛行機に指を染めて以來の夢にも忘れぬ信條であつた。F一三からG二一へ、W三三へ、次第に經驗と信賴を重ねて行つた。

思へば明治四十三年に特許第二五八七八八號を以て「飛びゆく翼」の理想をうちたてゝから二十年の歳月は流れた。

同じ理想に進むクロード・ドルニエ博士はすでに巨人艇ドックスの建造にとりかゝつてゐた。

デッソウの工場では、その頭腦と、手腕と工業の總力をあげて、G三八の建造をいそいでゐる。見上げるやうな大きい翼が組立てられ、電車の箱のやうな胴體が作られてゐるのだ。

『いよいよ、先生の理想の飛行機が出來ますな』――今日も朝から、新聞記者は、新飛行機の驚異をつ

面白いのは、同機が始めて登場したのが昭和六年——ガブレンツ男は昭和十四年に、この機體で日本訪問をやつてゐるし、ノルウエイ戰線を始め白蘭戰線で、落下傘部隊の偉功を奏したのはこのJu五二型だつた。

出來たところ、フランスの一技術者は、

『Ju五二型は恐ろしい飛行機だ。元のW三三型と較べると馬力が二・二倍に増加されたにすぎないが、搭載量は三・二倍となり、胴體の搭載容積は四・九倍に擴大されてゐる』

とその特長を恐れた。

このJu五二型になつて、ユンカースは特許の二重翼をとりつけた。

翼の後椽全長にわたつて、狹く長い可動翼を隙間をあけて少し下位にとりつけてある。普通の飛行機の補助翼を下げ翼の作用をするものであるが、二重翼は、別々の揚力を出して、うんと、浮揚力を増すのだ。

飛行機の速力が段々早くなると、どうしても着陸の速力も早く、廣い飛行場でないと、危險を釀しやすい。

ところが、この二重翼は、大きく、重い飛行機を樂々と低速力で空中に支へうる。だから狹い飛行場に安全に着陸することも可能なのだ。これは、今度の戰場でも十分證明された。

ルフトハンザでは、Ju五二型を主力として航空路に盛んに使用したのみでなく、尚盛んに製造してゐた。

『アメリカ製のダグラスのやうな高速機が使用されてゐるのに、あんな舊式のものを、いつまでも作つ

森と白堊の建物が點綴してゐる。その上を大きな單葉の影が移りつゝすぎてゆく。

翼にはドイツ登錄記號D二〇〇〇號と大く記入されてゐる。勝利感！　博士の胸中には禁ずることの出來ぬ喜悅が浮いてきた。

G三八型は、翌年五月、始めてベルリンの上空を飛んで、ありし日、ツエッペリン伯がその飛行船で伯林入りをした日の熱狂を市民は再び描き出し、ドイツ航空工業の凱歌をあげた。

このG三八型は、更にもう一臺作られ、日本でも特許を買つて九二式重爆として數臺作られたことがある。今では舊式に屬するが、大戰勃發の前年までルフト・ハンザの名物としてよく翔び舞つた。

G三八型で世界に驚異を與へたユンカース工場では、今度はA五〇型と稱する小型二人乘のライトプレーンが生れた。これは僅か八十馬力で、翼巾十米G三八型の側へゆくと、幼稚園兒が男女川の横に立つたやうなものだ。しかし、A五〇型は、輕飛行機として世界のレコードを片つ端から破つて行つた。日本でも吉原淸治氏が伯林東京間を十日間の特急飛行で飛んだり、太平洋横斷に乘り出したりして、おなじみが深い。

A五〇型が出來て間もなく、今度はJu五二型中型機が出來た。

これこそ、眞の實用的な機體だつた。旅客機にも貨物機にもなる。丈夫で、運航費の少い、安全で、使ひやすい飛行機であつた。

『ルフト・ハンザ會社は眞の中堅となる飛行機を得た。Ju五二型こそ、航空輸送用の最も理想的な機體である』と、同社のガブレンツ重役は激賞した。

『カウマン君、この際一大英斷を要すると思ふね』
『工場を閉鎖するか、操業短縮でもやるか――』
『いや』ユンカースは力強く言つた。『飛行機と發動機は一日も仕事を止めちやいけない』
彼にとつて、それは生命であつた。
彼は、その足で友人ロベルト・ボッシユを訪ね有名な電機工業王は、ユンカースの苦境を快く相談に乘つて、ユンカース機關製作所の一切を引とつてくれた。
『ユンカースつて男は』ボッシユは後で言つた。『事業家としちや素人だよ。この不況のどん底にゐても驚かないんだからな。金儲けの下手な點で、ドイツ一の男だ。學者で理想家だな』と。
『この素人が、素人なる強味で、玄人が續々倒れる不況を乘りこしてしまつた。そして飛行機製作と發動機工業を自分の手に殘しておいたのだ。
勿論その間の苦心、辛抱強さは、彼一流のねばりが物を言つたのである。果せるかな、翌年、ドイツはヴエルサイユの鐵鎖を自ら斷ち切つた。
ヒットラーは、軍備再建の爆彈宣言を世界中に叩きつけた。ゲーリング空相は立つて、空軍再建にとりかゝつた。
遂にその日は來たのである。ユンカースの工場は再び活氣をとり戻した。
『ユンカースはドイツ航空界再建の恩人だ』
『ユンカース飛行機は再建空軍の主力となつたぞ』
嵐のやうな感謝が彼の一身に集つた。ある席上、既に老境に入つたユンカースは、學徒らしい謹嚴さで、青年の熱狂に答へた後、
『私は、しかし抗議する。

てゐるのはドイツの技術者に腕がないのだね』

『今頃 Ju 五二型なんで、遲い重い飛行機は仕方がないぢやないか』

外國の技術者が參觀にきて、十年前の飛行機を舊態依然と作つてゐるデッソウ工場を見て嘲つた。

ところが戰爭が始まつてみると、Ju 五二型は、すぐ軍隊輸送機に變つた。落下傘部隊を下ろした。北海の制海權を持たずしてノルウエイ渡洋作戰をやつたドイツの驚異的戰略の蔭には五二型の輸送力が控へてゐたからであつた。

素人の强味

ユンカースが、手廣く飛行機、發動機、ガス機關の製作權を握つて、漸く工場も擴張したし、就業員も、前大戰中の倍位まで増えてきたし、油の乘りかかつた昭和六年、突如として、ドイツの經濟界には有名な「金融恐慌」がまき起つた。

ヒットラー政權の確立後國内の一切を立直し、國防國家建設へ、ひたむきの邁進をつゞけてゐたが、尙ほ、赤色敗戰主義の蠢動が、底流にひそんでゐた米英式の自由主義思想の殘滓があつた。

やがて、大ドイツとして飛躍すべき準備としてあらゆる部門に一大改革の必要が迫つてゐた。それは複雜な世界の金融機構に敏感に影響し、ドイツの金融界は、敗戰當時のマーク激落の日を思はすやうな大恐慌がまき起つた。經濟界は、不況のどん底にあつた。

市場の大混亂、株式の暴落――自殺、破産、倒産相つぐ不安は、事業界を、まつ暗なものにしてしまつた。

つゝあつた。
『今こそ、祖國へ献身の秋だ。世界一の空軍をドイツの翼として與へねばならないのだ』
技師を督勵した。自ら設計の陣頭に立つた。高速力へ、高速力へ！
世界の航空機はたゞスピードを追及してゐる。アメリカはその第一歩をすでに踏み出してゐるではないか。
『競爭機を作つて、レコードを破るだけならアメリカ風のやり方もよからう。新奇な飛行場を生むだけなら、フランス式に試作機を作つてもいゝ。しかしドイツは少し違ふ』
ユンカースは、ツインデル、ガステルシユタツト以下技師たちと協議した。
『大量の飛行機を、迅速に作りうるやうな工場經營を、ゲーリング空相の方針に合はせることだ。そして優秀な飛行機を出來る丈け短い期間に出來る丈け澤山作ることだ』と、大方針が示された。
工場は、最新式の流れ作業によつて、次から次へ作業がすゝめられるやうになつた。翼組立にも板型を作るプレスにも、獨特の苦心が拂はれた。
長年ユンカース機はおなじみの波狀金屬鈑は廢止されて、空氣抵抗のない平滑板に改められた。
昭和七年、ユンカース六〇型輸送機が出來た。三百粁をこへる高速輸送機である。つゞいて昭和九年一六〇型が出てきた、更にその年の末双發八六型が現はれた。
これには、ユンカース博士が半生をかけて苦心完成したユーモ五型デイゼル機關がついてゐた。
新機が出來るごとに、世界のレコードは破られて

この功績は決して私のものではない。私は一ケの技術者であり、技術者として働いてきたにすぎない』

今日のやうな偉大な事業の完成は、全く關係者全體の綜合的な力によるものである。

私はたゞすべてのものを一つの標準の下に集め、一つの名稱の下に發明し、製作したにすぎない。ユンカースと云ふ名稱はたゞこのためであつて、その功績は、ドイツ國民諸君のものなのである！』

と叫んだ。

事實彼は、七十歳の高齢を物ともせず、青い作業衣をつけて、波型壓縮器の前に立ち白い上衣を着て製圖臺の傍に居た。或はアメリカに飛んで、自ら操縦桿を握り、東部アジアに機關士として働き、デッツゥ工場の一室で事務をとり、伯林營業所で顧客と商談した。

どの姿も、皆フーゴー・ユンカースの姿であったのだ。

『熱心な仕事は、もし國民の力と意志とに結びつけられなかつたならば、それのみで眞の生命を發展させるものではない。

熱心な個人的勞作は、社會の意志と共にある場合にのみ又國家の力によつて後援される場合にのみ眞の繁榮を確保しうるのである』

ヒットラーは、ユンカース誕生七十回の宴席で言つた。

『即ち、フーゴー・ユンカース博士こそ、その資格をうくべき唯一人の人である』と結んで雷の如き拍手が、博士の上に落ちかゝつた。

ドイツ再び立つ！

戰雲は極東に、南米に、北阿にぽつぽつ捲き起り

師の明敏な腦中から生れて來るのだ。
『先生にこの大勝利をお見せしたかつた』
ツインデルはいつも、そう述懐する。ユンカースの歿したのは、ドイツ空軍再建の翌年、則ち昭和十年であつた。
ユンカースは、空軍再建のころから發動機について、老後を捧げ切つて、努力をつゞけてゐた。もともとユンカースは、發動機畑から出た人であつた。
『今のガソリン機關は、動力機關として最も高級な精巧なものだ。しかしまだ缺點は殘されてゐる』
ガステルシユタット發動機部長と相談した。
『ピストンが四回動いて一回しか爆發作用をせぬのはどうも合理的ぢやない』
『しかし博士、二衝程式には、もつと缺點がありますぜ』
『それは君、普通の發動機を二衝程にしやうとするからだ。一本の氣筩内に兩押しのピストンをはめて兩方から動くやうにしたらいゝぢやないか』
『あツ、それに氣がつきませんでしたな』
こんな會話をして、兩押し二衝程の重油機關を試作したのは、前大戰の終つた數年後だつた。それ切り飛行機の事業に追はれ、また普通のガソリン發動機L五五、L八L八八型などの製作に追はれてゐたので、デイゼル機關は、置き忘れられた形だつた。
しかし、G三八型が出來て、八百馬力のL八八型ガソリンモーターを裝置したとき、
『何もかも、新工夫の飛行機だ。發動機は、デイゼル機關にしたいなア』とふと思ひ浮べた。
凝り性の博士は、ガステルシユタット技師とマー

行く。昭和十三年、G三八を更に近代化した九〇型四發巨人機が完成した。

『大デッツウ』號と命名され、四十人の兵員が武裝して乘り、三百五十粁の快速力で二千キロを飛び、英佛にとつては頭痛の種がまた增えた。

大戰勃發

二十年の歪へた平和は遂に崩れた。

昭和十五年九月一日、ドイツ國軍は雪崩をうつてポーランドへ進擊を始めた。空にはユンカース八七型A、八七型Bの急降下爆彈機が嵐の如く襲ひかゝつた。

五百瓩の爆彈を抱く急降下爆擊機は、北海を獵場としてイギリス海軍の心膽を震ひ上らせた。ポーランドは一週間で潰滅してしまつたが、矛を轉じて北海をこへノルウエイへ向つたドイツ軍には、ユンカース五二型輸送機が活躍した。

つゞいて英本土へ、ユンカース八六型爆擊機が連日の如く强襲した。白蘭戰線にはユンカース五二型から、落下傘部隊が舞ひ下りた。バルカンへ、地中海へ、ソ聯へ、その電擊戰と强襲は次から次へ展開されて、歐洲におけるドイツの偉業――世界新秩序建設への步みはつゞけられてゐる、

ユンカース八七型スッツカの威力は、ナポレオン以來の戰術を一變してしまつた。つゞいて八八型双發の急降下爆擊機が現れ、ドイツ空軍の威力を遺憾なく發揮してゐる。

これらの精銳機は、デッツウに本社をおく大ユンカース工場の所產であり、今は既に亡き巨人、ユンカースの遺志をつぐ高弟エルンスト・ツインデル技

病床の博士からは反つて、

『研究をつゞけよ、努力を怠るな』と激勵してきた。

巨星遂に墜つ

今日も工場は慌しく明けた。

大戰前夜の、不安な、物々しい、今にも火藥庫に火がつきそうな歐羅巴の情勢であつた。全ドイツの航空工業界は、整然とした一臺の機械であるかの如く、戰に備へる飛行機、發動機の生産をいそぎつゝあつた。

ユンカース發動機工場の一部には、嚴重に劍付鐵砲で入口を固めて、特定のマークを胸につけたもの以外には、一歩も入ることを許さぬばかりか附近に近づくことさへ見張つてゐる研究工場があつた。

中からは轟々と、エンジンの響きがとゞろいてくる。全く新式の發動機が作られつゝあるのか、非常に強馬力のモーターが出來てゐるのか、何人も少數の關係者を除いては知る人は

けれども、國防のための新らしい研究であることは事實だ。國防のことは、責任のある人にまかせておけばいゝ、職工の誰一人として、この祕密工場の噂をするものもなかつた。いゝ加減な臆測をして流言を飛ばすことは、文明國民として恥だから、何處で何が行はれてゐやうと、人々は一言もそれに觸れなかつた。各々の人々は、夫々の職域がある。皆は與へられた自分の仕事だけを全力でやつてゐればいいのだつた。

しかし、直接この祕密工場にあつて、主任として新發動機を研究してゐる技師や、技工たちは、夜も晝も、けじめなくその完成に心を碎いてゐた

デイゼル教授を相手にして、暫く研究室にとぢこもつて姿をみせなかつた。

昭和三年秋ユンカース・ユーモ四型發動機完成！

重油發動機はガソリンと違つて電氣系統がないので火災の危險はない。燃料の消費は少い。高壓縮にたへる。

デイゼル機關付ユンカース旅客機、デッツウ、ケルン間飛行に成功す――。このニュースは、誰かに航空技術界を驚かした。

最初のユーモ四型は五百廿馬力だつたが、改良を加へて七百二十馬力まで出せるやうになつた。

『しかし、ガソリン機關に較べると重いね』

と反對する人も少くなかつた。

『重い、それは確かだ。しかし、發動機が少々重くても、燃料の消費がうんと少ければ、長距離を飛ぶ旅客機では、結局、發動機プラス燃料の目方では、デイゼル機關の方が有利ぢやないか』

博士は力說して下らなかつた。ルフトハンザではG三八型の發動機をユーモ型に改めた。G二四型旅客機にとりつけて伯林とアムステルダム間と航空路に就航させた。實際の證明はデイゼル機關の勝利を刻々と示してきた。

更に、ユンカース・ユーモ五型八百馬力が完成した。もうデイゼル機關の成功は確實となつてきた。

このころ、巨人ユンカースは膽石病を患つた。國寶的偉人のために醫術ドイツの最大級の國手は、ミュンヘン市立病院の一室で巨人のために手術を施したのであるが、既に老齡七十六に達してゐることゝて豫後ははかばかしくゆかなかつた。

ユンカース工場は深い憂ひに閉ぢられてゐたが、

の燃料噴射式發動機が完成して、ロンドン空襲に威力を發揮してゐるのであるが、あゝ博士は、この完成を見ずして逝つた。

あの華々しかつた七十回の生誕記念日に、苦境を乘り切つてユンカース工場の復興に、青年の熱意をみせた博士は、昭和十年二月三日、大木の倒れるごとく忽焉して長逝したのである。

靜かなガウテイングの森に近い別莊に、中年前の手術の後を養つてゐたが、老體のこととて、病勢は次第に募つて、危篤と傳へられた。

ヒットラー總統、ゲーリング空相、クリスチャンゼン將軍――ドイツを動かす巨頭連からの見舞ひは陸續としてつゞいた。

憂色深きミュンヘン郊外、空飛ぶユンカース機も今日ばかりは爆音を低めた。あゝ巨星殞つ！

遺骸は直ちに航空葬を以て、ミュンヘン市外ワルト墓地に葬られた。

その日、淺春の空は曇り勝ちで、數十臺のユンカース機は、巨大な「ユ」九〇型を先頭にして、黒いリボンを曳きつゝ、亡き人の頭から生れた祖國の翼はかくも健かよと斗りに、哀悼飛行をつゞける。

折柄國務多忙のため國外にあつだヒットラー總統は、ミュンヘン市航空關係の最高官エーベルト大將を代理として、墓前に花環を捧げる。ツインデル技師以下數千名の弟子は、涙と共に、讀みあげられる悼辭に首を垂れた。

やがて航空工業聯盟を代表して、鄭重な悼辭が讀まれた。

『フーゴー・ユンカース教授の長逝は、わが國における最大の先覺者であり、卓越した研究家であり、

主任技師は、そゝくさと數通の報告書を鞄に入れると、扉をあけて外出してゆく、彼の行く手は、伯林郊外ガウテイングである。

そこには、今靜かに膽臟病を療養してゐる世紀の巨人フーゴー・ユンカースの病床があるのだ。

七十七歳の高齢を、若人の如き元氣な姿で工場に見せてゐたユンカースは、前の年の夏から何となしすぐれなかつた健康を、多忙のために無理をしたのか、遂に病床の人となつてしまつた。

それでも腹心の部下である高弟たちを枕頭に呼んで、病苦と戰ひつゝ工場の指揮をとつてゐる。

『博士、御氣分はいかゞですか』

一抱へほどの書類を手にして、ガスラル・シュカットは入つてきた。

『俺は大丈夫だよ。それよりも發動機の方はどうだ』

『お庇で着々進んでゐます。今日の試運轉の結果を報告に上りました。これが馬力の出具合で、廻轉數も申分ありません』

『そうか、今度の試みは劃期的なものだ。早く完成してくれ給へ』

病床の博士は一々指揮した。今作られつゝあるのは、從來ガソリン發動機が故障を起す最大原因とされてゐた氣化器——ガソリンと空氣を混合する部分——を廢止することだつた。

その代りに、デイゼル機關の特長である燃料を高壓ポンプで直接氣筩內へ噴射するのである。これさへ出來たら、高々度の空中戰に氣化器が凍つたり、逆方から火災を起すこともなくなり、燃料の消費も少くなる。

かくて、ユンカース・ユーモ二一〇型、二一一型

しない國家意識によつてのみ働き抜いた人生觀の勝利に外ならない。

ギーゼン大學から名譽哲學ドクトルと云ふ一見して畑違ひの稱號を貰つてゐるのも、よく考へると決して不適任ではないのだ。

ケーテン工業大學、アーヘン工科大學は、名譽評議員に推し、リリエンタール航空協會の名譽牌は、眞先きに彼に與へられ、生前から死後へ、凡そドイツの航空界と、工業界は、あらゆる表彰狀と賞狀をユンカースの墓前に捧げた。

また多忙な彼は、寸暇を見ては、その貴い經驗と技術とを書き殘すやうにつとめたので、前大戰の起る前年に早くも「大型發動機製作に關する研究並實驗」を發表し、大戰後「輕金屬飛行機の翼及胴體工作」「我が十五年間の經驗」「金屬製飛行機の製作上における特殊作業」「燃料噴射作用について」など尨大な専門著書を殘してゐる。

フーゴー・ユンカース。それは一ドイツの偉人ではない。世界人類に翼を與へた恩人であり、不世出の天才である。

發明者にして實行者、理論家にして實踐家。企業家にして經營者。一切の仕事を一人で引うけ、しかも完成したものこそ、このユンカースであつた。

最も有能なる製作者を亡つたのである。けれどもユンカースの名はドイツの飛行機と、發動機があらん限り、世界的名聲に作つて永久に忘れられないであらう』と。

しかり、大いにしかり、今ドイツを守る翼はユンカースの遺業である。ユンカースは死んだが、その殘した「ユンカース飛行機、發動機製作株式會社」は嚴然と航空界の中心となつてゐる。

ハインリッヒ・コッペンベルグ總裁、ミユレン常務理事によつて經營され、飛行機の方はエルンスト・ツインデル技師が、發動機はガステルシユタット技師が中心となつて更に、更に新らしい飛行機と發動機を生みつゝある。

曾つて、全鋼鐵製一號機が生れてからの思ひ出のデッソウには中央工場があるが、就業者は數萬と算へられ、世界屈指の大工業の面目を把握してゐる。

逝しきユンカースは一生を實踐につとめてきた。決して象牙の塔にとぢこもつた學究ではない。けれども、航空技術については、どの學者も追從することの出來ぬ偉大な實驗と、理論とを完成してゐるのである。ミュンヘン工業大學は、それ故、彼に名譽工業ドクトルの稱號を與へた。

ユンカースの業蹟は、また遂に國家觀念に終始した。營利や個人的名譽慾は彼の腦中に存在してゐなかつた。工業——航空工業の確立によつて、國家の隆盛に貢獻しやうとする技術報國の理想が輝いてゐる。それは高度國防國家への一つの理念であり、哲學であつた。

事業家として素人の金儲の下手と云はれながら、忍耐を以つて苦境を克服したのも彼が、營利を追及

ゲーリング篇



第一篇　大戰の勇士

第一章　軍人への巣立ち

ヒットラーは、正式の場合を除いて、街を視察して廻つたり、會合へ出るときは、飾り氣一つない紺の脊廣をきて、子供の頭を撫でたり、ごく氣輕るに民衆の友である風貌を見せる。

これに引きかへて、ゲーリングは、いつも空軍大將の派手な制服に、がつしりした體格を包み、苦み走つた精力的な容貌に、精悍な氣宇を眉間に漂はせ廣い胸一ぱいに勳章をきらびやかに飾り立てる。

この二人は對照としてまことに面白く、體格的にも性格的にも、可也りの距離があるやうだ。

しかもヒットラーとゲーリングは、互に相許し、相信じ、互に大ドイツを脊負つて立つ氣慨にみちてゐるのだ。

今次の世界大戰が始つて、一九三九年九月一日、いよいよ大ドイツの國運を賭して、ポーランドに進擊を始めるに當つて、ヒットラーは、國會議會の演壇上から、ドイツ國民蹶起の秋であることを獅子吼し、自ら三軍を率ひてポーランド戰線に赴くことを述べた。

そして『萬一、余の身に事あらば、國民よ憂ふるなかれ、ゲーリングがゐる』と叫んだ。

いま、世界を動かす二つの大きい力——一つは、東條總理の指導する日本であり、一つは、ヒットラーの統率するドイツである。

『坊や、お父さんお母さんが歸つてくるぞ』

『小父ちやんは、もう坊やと遊ばないの』

『ハ、、、。遊んでやるぞ。しかし、お父ちやんやお母ちやんが戻つてきたら、もつと坊やを大事にしてくれるぜ』

ある日從兄は、ハイチから來た手紙を見ながら、ヘルマンに話しかけた。

片言まぢりに、ヘルマンは、初めて見るも同樣の父母のことを聞くのだつた。

『うん、坊やのお父さんは偉いんだぞ。若いとき戰爭に行つてフランスを散々やッつけて、こんな大きい勳章を貰つたんだ』

『うーん、い丶なア』

『坊や大きくなつたら、何になるのだい』

『坊やもお父ちやんみたいに戰爭にゆく。大將にな

く母の側を離れて育てられることになつた。

若い母親は、可愛い丶坊やを放して、夫の許へ歸るのは身を切られるほど辛かつたが、しかし坊やの健康を思ふと、氣溫の穩やかな南獨逸の故鄕においておく方が安心と僅かに慰めつ丶、夫の任地へ歸つて行つた。

かくて、ヘルマン坊やは、父母の膝下を離れて育てられたが、父母に代つて從兄夫妻は、わが子のやうに慈しみ、健康と、躾けとに細かく注意しながら育てた。

ヘルマンも、よくなついて、少しも淋しがらずに元氣一杯で、這ひ、立ち、やがては走り廻るやうになつた。

年月の立つのは早いもの、早や三つの誕生を迎へたが、

このヒットラーに、かくまで信頼されるゲーリング空軍元帥は、生つ粋のナチスっ子、前大戦の勇士そしてドイツ空軍の再建者であり、數萬のドイツ荒鷲の尊敬愛慕を一身に集めてゐる「時代の英雄」なのである。

　ドイツをずつと南の方へ下ると、バイエルンの風拂ふ山裾の小都會ローゼンハイムがある。

『可愛いゝ坊ちやんだ。元氣さうな顔をしてゐるね』

『ええ、お蔭さまで――でも、この子を手放して、遠いところへ行くのは、辛いんですわ』

　若い母は、丸々と肥つた坊やを膝の上で、あやしながら、しみじみと語るのであつた。しかし、彼女の夫ハインリッヒは、辨理公使の重い職責を帶びて西印度諸島のハイチ島にゐるのだ。

　太古をそのまゝに、傳説と夢をつゝむ孤島ハイチの熱帶的な風物は美しいが、何分にも風土の違つたこの島では、文明的な施設も乏しいので、彼女は、出産のために、はるばると、南ドイツのローゼンハイムへ歸つてゐたのである。

　長い船旅の疲れに、案じてゐたお産も、やすやすとすんで、一八九三年（明治廿八年）の一月十二日元氣な赤ン坊ヘルマン・ゲーリングは、希望と祝福をうけて、この世に生を享けたのであつた。

　肥立ちもすくすくと、元氣に育つて行つたのであるが、氣候の激しい熱帶へこの生後まだ日の淺い坊やをつれて行くことは、あまりに冒險だつた。

『ハイチの任期も、そう長いものぢやあるまい。いづれ本省詰めになるだらうから、それまで、坊やの養育を引うけてあげやう』

　と、從兄のすゝめによつて、ヘルマン坊やは、暫

ゝ地方のベルディンシュタインの片田舎の家へ一族をまとめて引揚げた。

『いゝなア、今度のおうちは』

ヘルマンは、見わたすかぎり廣々として、靜寂な田野の景色に驚異の眸をみはつた。

ゆつたりとした大自然の懷で、育てられる少年の伸び伸びした心は、なだらかに起伏する丘を野戰場と見なした。

廣い田舍の邸宅につきものの、古い塀や、高い石垣を眺めながら、

『やあ、お城だ。お城だ』

と無性によろこんだ。早速近所の小供たちを集めて兵隊ごつこを始めた。

兎のやうに、野原を跳ね廻り、小犬のやうに芝生をころげて走り、さんさんと、ふりそゝぐ太陽の下で、ヘルマンの健康は、一倍丈夫に鍛へられた。

『どうもヘルマン君は、よく勉強もするが、亂暴で困る』と、國民學校の先生が、まづ手古ずつた。

しかし、學業の成績は、ずば拔けてよかつたので亂暴をしても學生仲間の尊敬を一身に集めてゐた。

『おい、グロスグロックナー山へ登らないか』

ある日、遊び仲間を誘ひはじめた。

『あの一萬二千呎からなる山へかい』

『うん、それも、人の登るコースぢや面白くないから、北西側から登つてみやうぜ』

義兄と、友人を誘つて、この危險極まる登山をやつた。千古の雪を戴くホッヘル・タウエルン山脈の最高峰目ざして、ナイフ狀につつ立つ氷の屋根をよぢ、岩にロープをかけて、歩一歩と山頂へ進んだ。

そして美事山頂をきはめて、さて降りるのが、ま

りたいなア』
と元氣一杯で云ふのだつた。
任期みちて、父母はベルリン勤めとなつて歸つてきて、三年ぶりに見るヘルマン坊やの大きく、丈夫に育つたのを見て、母親は、うれし涙にかきくれながら、しつかり抱きしめたのであつた。
父ハインリッヒ・ゲーリングは、
『ハイチと云ふところは、面白いところだぞ』
と、異國の風物を話してやつたが、ヘルマンは一向うれしがらない。
『それより、お父ちやん、戰爭の話をして』
とせがむのであつた。
ハインリッヒが、若かつたころ、歩兵將校として普佛戰爭に參加し、巴里攻擊に華々しい手柄をたてた昔物語をしてやるとヘルマンは、目を輝かせ、耳をそばだてゝ、熱心に聞き惚れるのであつた。
『この子つたら、まあ、戰爭好きね』
『男の子は、その方が元氣でいゝよ』
父母は、ヘルマンが早くも軍人としての希望を小さな胸に燃やしてゐるのを、賴もしく思ひ、この子の健康と、教育に一心になつて育てゝ行つた。

健やかな青春

『坊や、今度のお家は廣いぞ』
ヘルマン・ゲーリングが五歳のとき、父は官吏生活をやめて、田舍へ歸ることとなつた。
ベルリン生活は、便利ではあるが、文化の中心の華やかさは、少年の純な心を育てるのに、ふさわしくない。
ゲーリング家の昔からの所有地であるエフランケ

『ゲーリングと云ふ奴は何と辛抱強い男だらう』と流石の教官も舌を捲いて感心した。

つゞいて、士官學校に入ると、ますます彼の才能は冴えてきて、こゝに早くも第三帝國の大臣たるべき彼の將來性が、芳しくも芽を出してきたのだ。

『ヘルマン・ゲーリング、其方の拔群なる成績に對し、皇帝賞狀を下賜せらる』

卒業式の朝は、光榮に輝いた。

かくて、ゲーリングの軍人生活はひらけはじめ、軍人たる第一の難關は突破し、次の四年間は、ウイルヘルム皇太子の指揮する第百十二步兵部隊付を命ぜられた。

それはフランス國境に面したアルサス州ミユルハウゼン市に駐屯するものであつた。

『ねえ、ブルノ・ロエルッエル少尉、どうやら世界の動きは面白くなりそうだぞ』

彼は、同期生の中でも親友のロエルッエルと、希望にみちた前途について語り合つた。

『全くだ。今年（一九一四年＝大正三年）は何か事がありそうだぞ。前年の伊土戰爭以來どうも、バルカンが不穩だからね』

『一戰爭あるといゝがなア、平和つゞきでは腕を振ふことが出來ないからね』

ゲーリングは、鬱勃たる功名心に燃えて日夜軍務に服してゐた。

大戰勃發！

果せるかな。

南歐サラエボに、響きわたつた一發の銃聲は忽ちにして一九一四年七月、世界大戰の幕をば切つて落

た危險である。

『ヘルマン、足許に氣をつけろ！』

友人が叫んだときは遲かつた。彼の身は、踏み外した雪床から離れて、深い谷底へ落下して行つた。時を移さず、反對側へ身を投じて、ロープに重味をかけた義兄の機轉で、辛じてヘルマンは岩山に身を粉碎するのを助かつた。

『面白かつたなァ、登山は』

『眞平だよ。お前と山登りをすると、こちらの命が縮む思ひだ。』

後で義兄も、ヘルマンの不敵さに呆れて物が言へなかつた。

このとき彼は十五歳だつた。

『さて、中學校は出たが、お父さんのやうな外交官には性が合はぬし――』

ヘルマンは、小供のときからの希望の軍人志願を打あけてみた。

『よからう、しつかりやれ』

と父も、若いころは軍人生活をした人で、理解が早い。許可を得たので、早速トランクをまとめて、カールスエーのプロシャ王立幼年學校へ入學した。

舊帝政獨逸の軍隊生活は、今日想像も出來ぬほど軍規と調練がやかましく、むしろ殘酷と云つてよいほど、何事も命令、また命令だつた。

戰場往來の軍人が、非常に嚴格に、少しの慰安も與へず、スパルタ式の訓練をやつた。食事もとらず荒天の中で、ぶつつゞけの演習をやらされて、倒れる生徒もゐた。が、ゲーリングは、この苛酷なほど嚴しい訓練に堪へ、上級に進み、模範生として取り扱はれるやうになつた。

ゲーリングたちは、ムールハウゼンへ進んだが、若い學生時代に山登りやハイキングに勝手知つた道を突破し、ソースハイムの町へ入ると、六十名餘りのフランス兵が守備してゐた。
『構はん、突破しろ』
　僅か七名の斥候と共に、敢然と打つつかつて行つた。これをドイツの大部隊の先驅と誤認したフランス龍騎兵は、算を亂して逃走してしまつた。
　尙も敵將バウル・ボーの陣營まで隈なく、偵察して悠ゝ歸つてきた。フランス龍騎兵の大部隊は、更に勢を盛りかへしてきて、ムールハウゼンの奪還につとめ、こゝに獨佛兩軍は激烈な攻防戰を演じたがゲーリングの偵察が役立ち、ドイツ軍は、着々と戰果を收めることが出來た。
　開戰僅か三週間目、軍司令部から、
『ヘルマン・ゲーリング少尉
　その勇敢なる斥候により我が軍事行動を勝利に導き得たる功勞に關し、鐵十字功二級勳章を授く』
　と晴がましい叙勳の光榮に浴した。
『どうやら武運が開けてきたぞ』
　とゲーリングの功名心は、いよいよ燃えさかるのであつたが、間もなく、ロレーン州バカラの野に塹壕戰が始まらうとするときだつた。
『痛い』
　足の關節が、ひどくうづく。慣れない塹壕の濕氣と不健康さは、遂にゲーリングの身體を蝕んだのである。
『敵彈にやられるならまだしも、關節リユマチなんか患ふのは殘念だなア』
　と齒ぎしりをして口惜しがつたが、軍醫は彼をフ

した。

フランスにとつては、四十年の長恨の地、アルサス・ローレン二州である。潮の如くフランス歩兵はアルサス州に侵入した。

ドイツは緊急動員を命じ、歩兵少尉ヘルマン・ゲーリングは、直ちに前線へ進軍した。

彼の祖國は今や運命の道を選み、賽ころは遂に振られた。

平和で、繁榮する西ドイツの都市と農村は一切を犠牲として恐怖に長い戰禍の中に投げ込まれた。ドイツの周圍は盡く敵國であつた。ヴオスゲからヴイスツラまで、バルチックからアドリアチック海まで盡くドイツの敵として立ち上つた。

この眞只中に、祖國の國難に、若きヘルマン・ゲーリング少尉は敢然と飛び込んで行つて、二十一歳の若い血を湧かせつゝ進軍をつゞけた。

『秋までには凱旋してくるよ』

破竹の勢ひで、パリへ、パリへと突進するドイツ軍は、譯なしに勝利の日を待つと彼も人々も信じてゐた。

だが、マルヌ河畔で、フランスは必死の防戰を固めた。ゲーリングの配屬してゐた部隊は、八月八日ムールハウゼンで、强力なフランス龍騎兵の反擊をうけ、こゝに激戰を展開した。

ゲーリングは、さきの陸相ヨジアス・フォン・ベーリンゲン將軍の麾下なる第七旅團に屬してゐたが、八月九日、特別自轉車偵察隊として選ばれて、斥候に出かけた、

この自轉車隊は、不敵の勇士の粒よりで後に殊勳章をうけたケゼマン軍曹などがゐた。日の出と共に

んて、女々しい病氣に患つて、寢た切りなんて、情けなくて堪らん』
ゲーリングは、親友の勇ましい、飛行少尉の肩章を羨ましそうに眺めた。
脚を厚く繃帶をして、寢てゐるゲーリングを、氣の毒そうに、ロエルッエルは眺めてゐたが、
『心配するなよ、僕は、戰場で敵彈にでもやられたのかと案じてゐたのだ、何だ、そんな病氣なら譯はないよ』と慰めた。
『しかし、もう八日にもなる。いつ戰場へ戻れるとことかと、殘念でならない』
『よし、安心しろ、足の不自由位、氣にすることがあるものか、僕と一所に前線へゆくんだ。僕の飛行機の偵察者になるんだ。
そうだね。君の膝のために、毛布でくるんでゆこう、それなら冷えないだらう』
『そりやいゝ考へだ。しかし、退院の手續きが出來るかしら』
軍醫と隊長に懇願してみた。
『馬鹿ッ、そんな事が許せるかッ』
と怒鳴られてしまつた。
しかしヘルマン・ゲーリングの決意は固かつた。前線へ出られるなら處罰されたつていゝ。數日後、ロエルッエル少尉が、前線へ飛出すときには、偵察席にゲーリングが乘りこんでゐた。
『自分で自分の轉科命令を出したやうなものだ。呆れた奴だ』
と當時一人でも勇敢な將士を要求してゐた軍當局は敢てそれ以上、彼の行動をとがめやうともせなかつた。

ライブルグの野戰病院へ後送を命じた。

このフライブルグの町には、親友ブルノ・ロエルッエル少尉が、飛行機操縱の練習をしてゐたのだ。ブルノは、華々しい第一線へはまだ送られず、ひたすら技術を練つてゐたのだ。

その小さな町の野戰病院の一室には、ゲーリングが、病衣に若い身體を包んで、時折り遙かな戰線から、遠雷のやうにひゞいてくる砲聲に耳を傾けてゐたのである。

『殘念だ。殘念だ。

身體が利かないなんて——ぐずぐずしてゐるうちに戰爭が濟んぢまつちや、もう功名を立てる機會は永久にこない』

と焦れ切つてゐた。

『あゝ、また飛行機が飛んでゐる。せめて、飛行機乗りにでもなつてゐたら、少々足が惡くても戰爭にゆけるんだがなア』

と、病床の上に輾轉反側しながら、ゲーリングは髀肉を嘆じるのであつた。

運命の轉期

ある日のこと、悶え惱むゲーリングの枕許へ、ひよつくりブルノ・ロエルッエル少尉が訪れてきた。

『やあ、君か？　よく來てくれたね』

『うん、つい二三日前、君がこゝに入つたことを聞いてね。すぐ見舞ひに來たかつたが、飛行機の練習が忙しくてね』

『どうだ、少しは飛べるやうになつたかい』

『大丈夫、もうすぐ前線へゆくよ』

『いゝなア、僕は駄目だ。こんな關節リウマチスな

と勇猛な将士も彼の豪膽さに驚いた。一九一五年の春になると、空中戰術はいよいよ進歩し、より快速で、より上昇力の強い飛行機が出來て、偵察機は無線電信機をつけてモールス記號で地上と連絡するやうになつた。

『こいつは仲々骨だ。しかし覺えなくちやならん』

とゲーリングは、忙しい軍務の隙を割いて一心にキーを叩き、間もなく一廉の通信士の資格を獲得して、早速機から味方の砲兵陣地と聯絡した。

『待て、待て、一發も當つてやしない。僕の指示する通り射撃せい』

彼は機上から砲兵隊を指揮した。そして、正確な命中彈を得させたのである。そのころ皇太子妃が飛行場へ夫君の陣中見舞にこられたが、折から飛來したフランス機から、爆彈を投下した。物凄い地響きと共に爆煙が皇太子妃の周圍に立上つた。

『あつ、危いッ』

隊の將士は、色を失つたが、ゲーリングは、

『オイ、ロエルッエル君、すぐ飛出せッ』

と、愛機の始動を命ずるとヒラリと偵察席に飛上り、新式モーゼル拳銃に二十五發入りの彈莢をつけたのを抱へて、フランス機を追つかけた。

上昇力を利用して、フランスの爆撃機の上空に出ると、

『構ふものか、突込め!』

ロエルッエルを促して敵機の眞只中へ飛び入り、射撃を加へた。しかし、ピストル位ではいかに舊式飛行機でも射落せない。

『殘念ながら取り逃したよ、モーゼル銃よりもつと

かくてゲーリングの空中勤務は始まつた。二人は豫備偵察隊の駐在してゐたダルムスタッド總豫備隊へやつてきた。そこには工場から到着したばかりの新造機アヴイアチック複葉機があつた。

『これはお前等二人の亂暴ものに貸してやるんぢやないぞ』と、試驗係りのゼイグラー飛行士が笑つたが、ゲーリングは、空中戰や、爆彈投下や、空中寫眞など今迄と違つた新らしい技術を熱心に學んだ。

かくてゲーリングは、一九一四年十月、皇太子の指揮するステネイ地區の第二十五軍團附を命ぜられた。皇太子は、飛行機と云ふ新らしい武器に興味を抱き、自ら第五旅團航空隊を指揮してゐたが。ロエルッエル少尉の期待に反してゲーリングは別に嬉しそうな顔もせなかつた。

『自分はロエルッエル少尉の偵察者だから、彼と行動をどこまでも共にしたい』

と申立てた。そして彼は、偵察席に乗り、前線をこへて偵察し、爆彈をピストルで射撃し、寫眞撮影をして、ヴェルダンの周圍を隈なく偵察した。

ゲーリングの勇敢な偵察は、司令部の資料に重要な成果を收めた。あるときは、ドイツの進軍を阻んでゐたフランス重砲兵隊の位置を發見し、火箭を以て地上部隊と連絡して敵火砲を沈默させた。

皇太子は、第五旅團飛行隊司令の資格で檢閲にこられ、ロエルッエルとゲーリングの二人を呼出し、手づから鐵十字功一級を授けられた。

『ゲーリングつて男は大膽不敵な奴だ。寫眞をうつすのに半身を乗り出して頭を下にして撮してくるそうだ』

戻つた。ゲーリングの器用さと大膽とは、短い教育で、一人前の飛行家になつてしまつたのである。

『よかつたなア、これから僕と一所にやらうぜ』親友のロエルッエルが誰れより喜んでくれた。新に編成された第五戰鬪中隊の一員として、昔なじみのアルサス州ロルマーの第二十六野戰飛行隊長をしてゐるロエルッエルの配下に加つた。

『今度のフオッカー戰鬪機は、凄いぞ。機關銃と發動機の軸が齒で聯動してゐて、プロペラの間から彈丸が出るんだ。これならフランスの飛行機を、いくらでもやつつけられるぞ』

『そうだつてね。僕はベルケ大尉のやうな、手柄を立てたいと思ふよ』

ゲーリングは希望に燃えて語つた。かくして彼の空中戰士生活が始る。

西部戰線はそのころから、長い長い塹壕線を膠着させて、戰雲はいつ果てるともなく見えた。

一九一六年の秋から、ソンムに彼我の大激戰がくりかへされ、空中戰も毎日ひつきりなしに行ばれ互に制空權の獲得を目ざして、激しい死鬪がくりかへされた。

十一月の晩秋の肌寒い風が血腥い戰場に吹き、空は雲が切れ切れに飛ぶ荒涼たる朝、いつものやうにイギリスの大型爆擊機が、戰場の空に姿を現はしてきた。

『地上部隊を狙つてやつて來やがるんだ。何とかしてやつつけたいものだ』

ゲーリングは、日頃念じてゐた敵機を見つけて飛出すと、既に投彈を終つて、敵機は逃足早く去つてしまふ。

強い武器を積まなくちやならん』

『何とか工夫があるかね』

『うん、歩兵の輕機關銃を飛行機に取りつけてみやう』

ゲーリングは、自ら考案して、輕機を偵察席にとりつけて同年の夏、シャンパーニュ地區の戰闘に加はつた。これは獨逸飛行家が、機關銃を空中戰に用ひた最初で、戰爭は飛行機の進歩を促進した。そのころドイツが主に使つてゐたルンプラー・タウベ、アロバトロス、アヴアチック、エルフアグーなどは舊式で馬力も聯合軍のより三十馬力も少なかつた。

ところが間もなく、上昇力の強いアゴー複葉や、新アヴアチックが現れ、これに機關銃をつけるやうになると、射撃の上手なゲーリングは、サンカンタン地方やカンバリ地方の上空を荒らし廻つた。

そしてドイツ國内では、新にフォッカー新式飛行機を製造し、航空戰隊が組織されるに及んで、ゲーリングは、もういつまでも偵察者として我慢できなくなつた。

『後から狙ひをつけて、バツバツと、やつつけると敵の操縦者がガツクリ倒れて、やがて飛行機が火を吐いて落ちてゆく、――愉快だなア。僕も操縦を習はなくちやならん。そして戰闘機に乗りたい』

第二章　功名と失意

戰闘飛行家となる

彼は、上官に乞ふて、フライブルグの飛行學校へ

昇しはじめた。

前も、後も、敵機ばかり、しかも空中戰鬪の絶對有利な後方上位を、二十機が占めてゐるのだ。

プス、プスッと機の胴體や、翼にも彈丸が貫いてゆく。

絶體絶命、ゲーリングは、舵をとつて蛇行しつゝ何とかして敵の重圍から脱しやうとした。

『アッ、やられたッ』

右脚を、丸太棒でなぐられたやうに、ぢしんと、痺れる。次で右臀部に一發。シートは、いつの間にか、べつとりと血が滲んでゐる。思ひ切つて下舵をとつて急速に降下して行つた。

出血が甚しいので、今にも氣を失ひそうだ。一刻も早く着陸しやうと、苦痛をこらへながら、二百メートル邊まで下りると、

『あッ、敵の戰線だッ』

盛んに地上から小銃を射つてくる。傷いた敵機を侮つてか、飛行機の周圍に、パッパッと彈丸が集つてくるのだつた。

『何とかして味方の陣地へ、辿りつきたい』

と、兩軍の塹壕の間の、無人境をすれすれに通りこし、友軍の塹壕に辛じて入つた五百メートル邊の凸凹のはげしい土地へ車輪をつけた。

そこは、古い寺院の裏の墓地で、寺の屋根には、大きく赤十字のマークを記入した野戰病院に使つてゐるのだつた。

二三度バウンドしたと思ふと、機體は轉覆して、ゲーリングはそのまゝ氣を失つてしまつた。

馳けつけた兵士たちは、大破した機體の下敷になつてゐるゲーリングを引出し、折よく野戰病院から

いつも手を空しくして歸つてくるのだ。

『いつそ、空へ上つて出てくるのを待伏せしてやらう』

ロエルッエルと申し合せて、三機編隊を以てこの日は、早くから上空を警戒しつゝ遊弋してゐた。

『來たぞ』

ロエルッエルの方を見て手を振つた。彼も滿足そうに肯いてみせる。

さつと、機首を下げて、敵大型編隊へ、突込んで行つた。タ、タ、タ………ゲーリングは、手近な一機を目ざして猛射を浴びせると、しきりに應戰してゐた敵機の射手が、バタリと仆れた。

『しめたッ、もう一太刀』

と今度は側上方から、バラ〱と浴びせると、中央の射手が、だらりと半身を機體外に伸ばしてしま

つた、と見るうちに、中央邊から、ガソリンが噴出して、赤い火が見えたと思ふうちに機首はがくりと下つて落下してゆく。

『とうとう、やつつけたぞ！』

と地上に激突して燃え上る敵機を認めやうと機首を下げた途端、彼の身邊に、シュッシュッと彈丸が集中してきた。

『敵だッ』

振りむくと、雲の中から、イギリスのマークをつけた輕快なソッピース戰闘機が二十機ばかり、彼を目がけて突進してくる。

『ロエルッエルは』

と振りむくと、彼も大型機を求めて遙か彼方の空で奮戰中だ。

『こいつはいけない』とスロットルを全開にして上

『ベーブリンゲンと云ふところをした捜したが、自分の地圖にないから、前線へ行く』と、人を喰つた手紙を飛行隊の司令部へ出しておいて、ロエルッエルのところへ飛んで行つた。

『よく來た。しつかりやれよ』

『うん、やるぞ』

早速、ロエルッエルと共に飛び出した。

前方のフランス戰線の方をみると、小さな黒い點が空に浮んでゐる。見る見るうちに敵機の姿が、大きくなつてきた。敵機だッ、互に優勢な位置をとらうと旋回をつゞけてゐると、ゲーリングの上空五百メートル邊に、二臺のフランス機が突如襲ひかゝつてきた。

『氣をつけろ、後上方だ』

ロエルッエルが注意したが、氣のつかなかつたゲーリングは、一心に前方の敵機を狙つた。

ゲーリングは、夢中になつて下方の敵に猛射を浴びせてゐたが、その身邊に、上方からフランスの二機が、猛然と射撃を集中してきた。

『危いッ』

ロエルッエルは、機首をフランス機に向つて救援に飛び出して行つた。

ゲーリングが一機射落すのと、ロエルッエルが、ゲーリングを狙つた敵機を斃すのと一緒だつた。

全く危いところであつた。着陸してみるとゲーリングの機體に五十發も敵彈が貫いてゐた。

『有難う、お蔭で命拾ひをしたよ』と親友の手をとつて感謝した。

やつてきた軍醫は、

『これは大變だ。とても難しからう、この出血では――』

と驚いて、病院へ收容した。

『こゝは何處だ。飛行機はどうなつた』氣がつくとゲーリングは、いきなり聞いた。

『氣がついたか、靜かに、靜かに』軍醫は手で制しながら、

『君は十時間も人事不省だつたんだよ。何しろ、臀部の傷は二十四センチからの大きい傷口だからね』

『道理で痛かつたですよ』

『よくあの重傷で歸つてきたと思ふよ、飛行機だつて六十發も敵彈を被つてゐたからね』

『そうですか、何しろ猛烈に射つてきたですから、しかし一體どの位すれば又戰場へ出られますかね』

軍醫は、ゲーリングの勇氣に驚いたが、まづ何より療治につとめることだと、彼を慰めた。かくて四ケ月間にわたる長い病院生活の後やつと全治した。

しかし、傷痍の重かつた爲め、暫く彼を靜養させやうと、軍司令部からベーブリンゲン總豫備隊付を命じた。

『何？ 豫備隊付だつて、自分はまだそんなに衰へてゐないぞ』

と頑張つてみたが、命令とあれば仕方がない。何とかしてもう一度前線に立ちたい。

ゲーリングが病院にゐる間に、第二十六軍團の部隊長になつてゐたロエルッエル大尉に問ひ合はせてみた。

『鬪はんから、やつてこい』

と、いつもながらの愉快な返事だ。

赫たるベルケ、インメルマン以來、武勳も高いこの中隊の功績は六百四十四機を撃墜してゐるが、リヒトフォヘンの戰死は、同時にドイツ軍の悲劇的終局への第一歩でもあつた。

代つて中隊の指揮をとつたのは、ラインハルト大尉であつたが、僅か一ヶ月で事故のために同大尉も戰歿してしまつた。

新らしい飛行機を受とつて試驗飛行中、補助翼の操作桿が折れて千メートルから眞逆樣に墜落してしまつたのだ。

このとき、既に十八機の敵機を撃墜し、最高勳章プール・ル・メリットを授けられてゐたゲーリングは、この武勳輝くリヒトフォヘン戰鬪隊の指揮官に任命された。

『撃墜數や戰場の經驗から云へば、他に人ある。しかし、この勇猛無比の中隊を引率して、捨身の突撃をなしうるものは、ゲーリングを置いて外にない』

軍司令部の意嚮はこのやうに一決したのである。

『何と云ふ光榮だ。大リヒトフォヘンの後を次いで指揮に當るなんて、夢のやうだ』

『君ならこそやれるんだよ、しつかりやつてくれ給へ』親友ロエルッエルも祝意を表してくれた。

しかし、八月になると、ドイツ軍の前線は日ごとに增强される敵軍のために屢ゝ破られ、空には、一日一日と、聯合軍の飛行機が壓倒的に增えてゆく。

ゲーリングの部下は、それと反對に今日も昨日も戰死者のみ增えるのだ。

『今日の戰鬪で、敵七機を撃墜しました。しかし我方の十機は未だ歸つてまゐりません』

『昨日到着した新らしい操縦士はどうだつたか。ゲ

一九一七年の夏になると、ゲーリングの中隊はフランダース戰線へ、イープル東方イスハムへと移動して行つた。

長い戰爭のために、ドイツ國內の物資は次第に窮乏してきて、今は海に潛水艦の無制限通商破壞戰が空では、新に「戰鬪機隊」が編成されて激戰地を轉轉として攻擊の手を酷しく加へてきたのである。

中にも、マンフレツト、フオン、リヒトフオヘンの率ゆる戰鬪機隊は、到るところに聯合軍の飛行機を射落して勇名を轟かしたのであつた。

けれども、四面重圍の中にあつて、アメリカの參戰以來、ドイツ軍の苦惱は日に日に加はつてきた。

一九一八年五月、ドイツは、いよいよ國運を賭した一大攻勢に出ることとなつて、ゲーリングとロエルツエルの中隊は、軍司令部と協力のため、一時ゲンメル地區まで、後退駐在を命ぜられた。

そこから更に、全戰線の進出を期して、無人地帶へ進攻を開始した。

けれども、旣にドイツは、物資も人員も疲勞と窮乏の極にあり、フランスとても同じ狀況にあつて、戰場はまことに慘憺を極めたのである。

しかもこの最中、四月二十一日のことだつた。

『おいツ、リヒトフオヘン男が殉職されたぞ』

『えツ、ほんとか』

『今、司令部から發表があつたよ、イギリスのブラウン大尉にやられたと云ふのだ』

『そうかなア、リヒトフオヘンほどの勇者でもねえ八十臺からの勝利を持つ勇士だつてやはり空中戰で殪れるんだなア』

ロエルツエルとゲーリングは、悲嘆にくれた。赫

ゲーリングは、糧食すら今は缺乏し、燃料も彈藥も殆ど使ひ盡した。

『どうだ。君の隊は』

ロエルツエル大尉がやつてきた。

『どうもこうもない。死ぬまでやるつもりだ』

『うん、ところで、嫌な噂が立つてゐるのを聞いたか』

『社會主義が何だか、自分には判らんが、國内が動搖してゐるとの事だ。しかし自分は皇帝陛下に忠誠を盡すことより外に知らん』

ゲーリングは、武人として、飽くまで戰ふ決心だつた。

休　戰！

けれども大勢は決した。キール軍港の水兵たちは赤旗をひるがへし、ベルリンには暴動が起つた。カイゼルは、國境をこへてオランダに蒙塵した。

政府は、聯合軍に休戰を申出た。

『いや、そんな事は夢であつてくれ』

と願つたが、遂に戰線へも指令が傳達された。

『十一月十一日、午前五時、休戰條約に調印を終つた。午前十一時を以て對敵行爲を中止すべし』

時に一九一八年（大正七年）十一月だつた。かくて不幸なる平和がドイツの上に訪れてきた。

ゲーリングは、悲痛に顔を硬ばらせながら殘る部下を集めて、祖國の敗北を告げねばならなかつた。屈辱のコンピエーニュの森に休戰條約が成立したのだ。

『リヒトフォヘン中隊は、全機をまとめダルムスタットに集結し、アメリカ委員の來着をまち、その處

ーリングは戰鬪報告を聞きながら編隊長に尋ねた。

『新らしい操縦士は半數未歸還であります』

　ゲーリングの胸中は、苦惱にみちた。日に日に減つてゆく有能な戰士、それを補ふのは大いそぎで教育された未經驗者ばかり、どうしてこれで制空權を保つてゆけやうか。

『部隊長殿に申上げます。整備隊長から六機を修理し、三機を代換する必要があると申してきております。補給部に御願ひ出來ないでありますか』

　部隊の機材は、連日の激戰に破損、損傷するものが多くなつたが、國內の物資の缺乏と勞働者の動搖とで補充は容易につかない。

『空中勤務に堪へうるのは何機殘つてゐるか』

『ハッ、十一臺であります』

　僅か十一機では、いかな勇猛なゲーリングもなす術はない。

　しかし、尙ほ殘る機體をとりまとめて、自ら編隊を率ひて出動して行つた。

　敗色は日に日に濃くなつてゆく。

　聯合軍の飛行機は、目に餘るほど增してきたが、ゲーリングは尙ほ孤軍奮鬪した。

　一臺、二臺――今日はまた減つた。

　しかし、二臺、三臺、ゲーリングの擊墜數も增えて行つた。

　ゲーリングの苦心は並大抵ではなかつたが、つのり來る缺乏と、困憊のさ中にあつて、十月はすぎてゆく。

　ゲーリングの勝利は、二十二臺に達したが、十一月、祖國は遂に崩壞した。

『自分は軍人だから政治のことは判らん』

つけろ』
光榮あるリヒトフォヘン中隊のマークを描いたフォッカー機は、今は紅蓮の焔に包まれて灰燼となつてゆく。
そして悲壯極まる解隊式をやつた。
『今は武器の戰は終つた。
そして新らしく自由と、主義と、道德との戰が祖國に課せられた。その道はいかに困難であらうと、いかに暗黒であらうと、同志よ、我々は敢然と行くのだ。
併し乍ら、眞理は我々に光明を與へる。我々は祖國の眞實を誇り、我々の忠誠を信じ、前途を確信して、前進しやう、必ず我々の信ずる時は來るに違ひない！』
と訣別の言葉を以て、愛する部下と別れた。

流浪する飛行家

武勳輝く二十二機撃墜の飛行大尉――名譽あるリヒトフォヘン中隊最後の隊長――しかし、今となつてはゲーリングにとつて、それは一切空であつた。
祖國ドイツは、この時から苦患と、困憊の時代に入つたのである。
外からは、米英の貪婪飽くなき毒牙が平和の美名にかくれて、ヴェルサイユに苛酷極りない媾和條約を強ひた。一切の軍備をとり上げ、特に飛行船、飛行機に關するものは、小さなプロペラ一本、計器一ケまで押收してしまつた。
その上、軍用機を保つことは一切まかりならぬ。飛行機、發動機の製造を禁止してしまつた。
軍隊は解散せられ、艦船は沒收され、丸裸、丸腰

分を仰ぐべし』
と屈辱極る指令が届けられた。
ゲーリングは、立ち上つて、部下に呼びかけた。
『諸君よ、何たる事か、諸君は四年に亘つて英佛と戰つた。四年に亘つて撃墜に加ふるに撃滅をもつてした。
然るに、我々の記憶によれば、長く中立であつたアメリカが、敗れんとするドイツの窮乏に乘じて、來つて我々を滅亡の淵へ叩きこんで、已れの腹を肥やさんとしてゐる。我々は、諸君も、斷じてこれに從ふわけはないのだ！』
ゲーリングにとつて、彼の至上の指揮者はもうドイツ國にないのである。今は、オランダに亡命してゐる。
誰れの命令も受ける必要はない。
『マンハイムに集結した飛行部隊は、飛行場に待ちうけてゐた共產黨兵士によつて武裝解除された』
との噂が立つた。
『よし、友軍を救へッ』
ゲーリングは、部下を引率して、今は國內の敵を相手に、同胞相喰むの悲劇の眞只中へ飛びこんで行つた。
しかし、ダルムスタッドに着陸すると、政府の委員は、機體を押收してしまつた。
更にアッシャフユンブルグに行くと、こゝでゲーリングは、その若き生涯のうちで、最も悲痛な場面に直面せねばならなかつた。
殘る部下の武裝を解き、赤化した勞農兵士隊の組織した「政府」の手に委ねなければならなかつた。
『諸君よ、愛機を聯合軍に引渡してはならぬ、火を

グの夜毎の夢は圓らかではなかつた。

空工業は滅亡してゐる。

彼は單なる一失業兵士にすぎないのだ。

『暫く祖國から逃れて、推移を待たう』

とゲーリングは、北歐スエーデンに渡つた。

折から、スエーデンでは「瑞典商業航空路會社」が、熟練な、空路開拓の出來る飛行士を求めてゐたので、ゲーリングは、とりあへずそこに就職した。

そしてストックホルムへ飛び、山々や溪谷を縫つて飛んだ。危險な地方の空も、變りやすい天候も、西部戰線で場數を踏んできたゲーリングにとつては物の數ではなかつた。

しかし、今は脚下に砲煙も見ず、身近く飛ぶ敵彈もない平和の空は、何となく物足りなかつた。

その上、故郷ベルリンの擾亂を耳にするにつけ、思ひは祖國の上に馳せ、傷心の流浪飛行家ゲーリン

にして、放り出されたのだ。その上殖民地は奪はれ領土は削られ、更に千三百二十億マークと云ふ一生かゝつても支拂ひ切れぬ賠償金を强制された。

それと應ずるやうに、國内には、ソヴエイトの指令をうけて、思想は惡化し、赤色革命は相ついで起つた。

失業者は巷にあふれた。惡性インフレーションに災ひされて、物價は天井知らずに高くなつて飢餓と窮乏が、國民を絶望の底にたゝき込んだ。

社會民主主義政府のもとに、赤化思想は國内にはびこつた。十二月ベルリンのフイルハーモック・ホールで開かれた歸鄕將校大會には、まだ制服を着用したまゝの將校が集つてゐたが、假政府の軍務大臣ラインハルトが立つて、新政府の指令に服するやうに演説を始めた。

『止めろ將軍』演壇へ飛上つた若い將校があつた。プロシャ正規兵の大尉正裝にプール・ル・メリット勳章を輝かしてゐる。

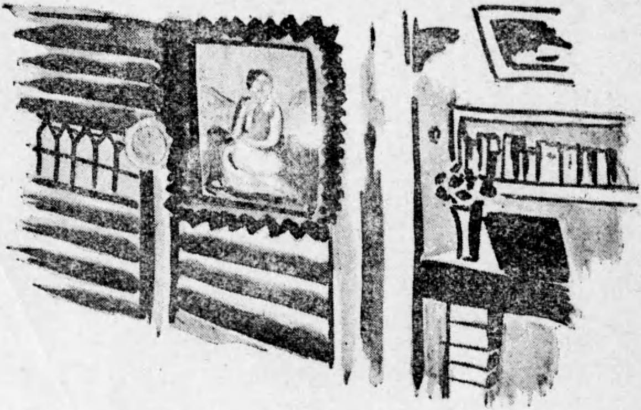
『聯合國と戰つて一寸の土地も奪ひ得なかつた祖國の敗北は誰れの責任だ。もとのドイツの繁榮を見るまで、この制服は脱がぬぞ』

と怒鳴つた。

この將校こそ、ゲーリングであつた。けれども社會は、ますます暗く、動搖は日ごとに增し、そこ、こゝに革命が起り、祖國ドイツは、全く崩壞に瀕しつゝあつた。

この大きい社會の變化の荒浪にもまれて、たゞ飛行機の操縱以外何も知らぬ一靑年將校を誰れが拾ひ上げてくれやう。

今のドイツに飛行家などは無用の長物だつた。航



招かれるまゝに、ゲーリングは、ロックルスタッドの豪壯な部屋の客となつて、暖い飲物を飲みながら、ふと思ひ出すのは少年時代のことだつた。

今は滅亡に瀕する愛する祖國を思ふとき、ゲーリングはこの平和な、家庭的な雰圍氣がたまらなく、懷しいものであつた。

その席上には、フォン・ローゼン伯の仲間のフォン・プレッターベルヒ大尉や、ゲイヤー孃も加つて和氣あいあいたるものであつた。

ゲーリングはいかなる敵も恐れぬ男性的な眸を、廣い客室の人々に投げてゐたが、ふと、そこに一人の美しい、しとやかな女性の姿をみとめると、灼けつくやうに、視點をじつとこの女性にそゝいだ。

その人こそ、カーリン・フォン・カンツオフ孃であつた。

第二篇　蟄伏の十年

第一章　苦悶する民族

北歐飛行生活

スエーデンの有名な探檢家エリック・フォン・ローゼン伯爵は、既にグラン・チャコの探檢を以て世界に知られてゐたが、たまたま一九一九年の冬、ストックホルムに滯在中急用が出來てロックルスタッドの自分の城へ戻さねばならなかつたが、吹雪のために鐵道は不通となり、自動車は勿論行けない。

『航空會社さんだね。腕のいゝ飛行士を一人雇ひたいんだがね。ロックルスタッドへ歸りたいので』

『さあ、そいつは、少々冒險飛行ですな、ええと、待つて下さいよ、あゝゐます、ゐます。ドイツ人ですがね、早速手配をしませう』と航空會社では、ゲーリングに、ローゼン伯の乘機操縱を命じた。

ローゼン伯は、餘り新式でもない飛行機と若い操縱士に、少し危つかしく思つたが、ゲーリングの經歷を聞くと、すつかり安心して、飛び出した。

天候は猛烈に惡るく、吹雪と烈風はエンジンの響きをも打ち消すばかり、しかしゲーリングは、巧みに惡氣流を乘り切つて、殆ど盲目飛行をつゞけながら、ロックルスタッド城に程近いバーベン湖の氷つた表面へ巧みに着陸した。

『まあ、休んでゆきたまい、一つ君の功名話でも聞きたいね』



の聲を胸中にあげた。

彼女も、このたくましい戰鬪飛行家を見たとき默つて畏敬にみちながら、この人こそと思ひ定めた。しかも、初めて相見た二人は、ずつと前からの知り合ひであるごとく感じた。

それから一座は暖い晩餐の卓についた。グーリングは、腹藏なく、祖國の運命に對する憤懣をぶちまけた。

『こんな事は、ドイツ國民の屈辱だ』とゲーリングの拳はトンと卓子を叩いた。

フォン・ローゼン伯は、立つてドイツ葡萄酒を注ぎながら、

『まあ、長い目で見ることだ。きつと、元通り尊敬されたドイツが立上る時がくるよ』

と慰めた。

奇しき縁

カーリン孃は、スエーデンの名門で祖父はストックホルム王立科學大學の教授で元素の發見者であつた。一八八八年十月二十一日に生れ、長ずるに及んで利潑と才智を以て上流の社交界に謳はれた。

少女時代のカーリンは、音樂に高い素養を持ち、嚴格な父母の教育をうけつゝも伸び伸びと育つた。

そして、ドイツの傳統と團結に少女らしいあこがれを抱いてゐた。そのころ世界は、夢と美とにつゝまれた平和な、香り高い藝術の光りにみちあふれたゐた。

彼女は、王廷に於て紹介されて、社交界に入るとこの花のやうな少女は、古い儀禮的な舞踏會の花形として、外文官や高官たちの讃美の的となつた。

長姉は、タウレンドルフ伯爵と結婚し、三女のコリイは、若い探檢家エリック・フォンローゼン伯爵と結婚した。

カリンもまた、社交界に出入してゐるうち、やはり名門の出身である若い中尉ニルス・フォン・カンツオーヴと結婚したのであつた。

しかし世界大戰の動亂と、世の中の移り變りは、彼女の結婚生活の幸福をも破壞してしまつた。カリンは マリイの許に身を寄せて、靜かに、敗れたドイツの悲慘な姿を、同情の眼を以て眺めてゐたのであつた。

脊の高い、高貴なカーリンの姿をじつと眺めたヘルマンは、

『あッ、この婦人こそ』

と彼が長年抱いてゐた理想の女性を見出した歡喜

ヒットラーと知る

一九二一年——そこには、社會主義思想が横行してゐた。

『僕は肝心の勉强する時代を戰爭ですごしてきた。こんな事では將來が心細い』

とゲーリングは、ミュンヘン市の大學へ通ひはじめた。

『私もお手傳しますわ』

カリンは、夫の勉强が早く進むやう經濟學や歷史のノートを淨書して勵ました。精力的なゲーリングは、貪るやうにして部厚い本を片つ端から讀破して行つた。民族の興亡の跡が彼の魂を搖つた。

『貴方、今夜ナチスの國民大會があるんですつて』

ある日カリンは、窓下のミュンヘンの大通りを、

に結ばれねばならない。

カーリンは、潔くカンツォフと離婚した。そしてドイツへ赴むいた。

この道は、彼の道であり彼女の道であつた。ミュンヘンで結婚式が擧げられた。

ゲーリングの母と姉妹や兄弟が、同志友人と共に立合ひ、カリンの姉ファンニイは、わざわざスエーデンからやつてきた。

さゝやかであるが、こゝにドイツ再建への健康な一家が形作られた。幸福な新婚生活はバイリッシュツエルの附近から始まつた。

けれども、今や祖國は、若い夫婦を、いつまでも密月の樂しさに浸らせておくには、餘りにも混亂し紛糾してゐた。

そしてローゼンは愛用のフリユートをとつて、朗朗と得意の民謠を吹奏した。

『スエーデン國民の魂の音は、ドイツ人の感情に近いですな』

ゲーリングはこんな事を云つた。そうだ、ゲーリングは、カリンの言葉に彼の魂を感動させられるものがあつたのだ。

しかし、ゲーリングの求愛は、あくまでも謙譲であつた。

『貴女のやうに、この故郷の土にしつかと根を下ろし保護されてゐる人を、混亂と闘爭のドイツに移すことは忍びないことですよ』

とゲーリングは、激情的な思慕を制しながら決意を語つた。

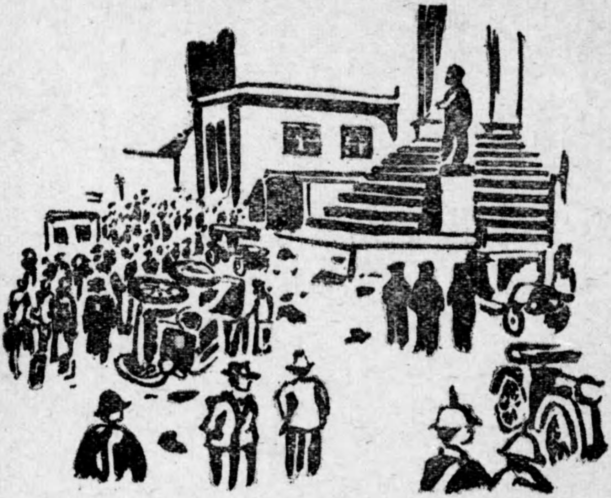
『でも、私は貴方の未來について、どんな事をなしうる人だと云ふ事をよつく知つておりますわ』

と彼女は答へた。ゲーリングが、いかに祖國を愛し、ドイツを立直してゆくために、どれ丈け苛酷な闘爭に身を投げこまねばならぬかを知つてゐた。

ゲーリングは、愼重に考へた。一旦ドイツに歸つて母に話をした。そしてスエーデンにおけるカリンがいかに自分の將來のために、必要な存在であるかについて何日も考へ拔いた。ヘルマン・ゲーリングとカリンの愛は、小さな男女の愛情ではなかつた。

神が彼女に對して、人物の深さと大きさを判斷し理解する能力を與へてゐるとした。

そしてゲーリングがドイツ國民の解放を、生涯の任務として自分の双肩に負ひ、そのために棘の道をも突き進んでゆくために、彼女があつて初めて力の泉となり、幸福の源となるとしたら、この二人は遂



求めてやまぬ國民の指導者である。そう考へると、もう矢も楯も堪らない。
『私がゲーリングです。貴方のため、ナチス黨の一員としてお力添へがしたい』
と申出た。英雄、英雄を知る。一目みて、ヒットラーは、ゲーリングこそ我が片腕と賴みうる男と確信した。
『有難う、貴君のやうな勇士が加盟して頂ければ、私も滿足だ』
と二人は、たつた一度の會見で、魂と魂とを結びつけたのであつた。
一九二二年十月十二日、この日こそナチス黨にとつて、最も記念すべき日、ヒットラーとゲーリングが、男のみの知る感激を以て相知つた日である。
『ドイツの再建は青年の力に俟つのだ。ゲーリング

口々にドイツ國歌を高唱して通る示威運動の一隊を眺めながら、夫に言ひかけた。

ナチス！ そのころの國家社會黨の勢力はまだ微微たるものだつた。

つい數日前、ライン地方に駐屯する聯合軍の横暴極りない態度に憤慨したドイツ愛國青年黨の數名は聯合軍に反抗して蹶起した。ところが、腰の弱い、いや米英には、何一つ頭の上らない政府は、ドイツ民族の心の叫びに反對して、愛國者の一味を盡く逮捕してしまつた。

『何たる事だ。政府の腑拔け』

『愛國者の血を償へ！』

ナチス黨は、鳶色のシャツを身につけて政府反對の一大示威運動を始めた。

『ナチスの統率者のヒットラーはどんな男だらう』

ゲーリングは、群衆に雜つて今宵の演説に耳を傾けた。脊は餘り高くない。けれども精悍さが全身にあふれ鬪志そのもののやうなアドルフ・ヒットラーは、片手を高く差上げて絶叫した。

すばらしい雄辯。何とも云へぬ魅力、しかも、壘卵の危きにあるドイツを救ふ道を叫び、民族の團結を説いた。

『我々は不合理極まるヴェルサイユ條約の桎梏から一日も早く脱せねばならぬ。しかもそれは、諸君よ國民の自覺と團結による外ないのだッ！』と溢るゝ熱情と、至誠とに、詰めかけた聽衆たちは醉つたごとくであつた。

『この人こそ信頼すべき指導者だ』

ゲーリングは今夜の演説からすつかりヒットラーに心醉してしまつた。彼こそ、わが心の友である。

『今こそ行動を起さねばならぬ。ドイツをこの赤化の手から救ふべきだ』

十一月九日は、敗戰滿五周年に當る。今ぞ、ヒットラーのナチス黨は、重大な決意をなすべき日に際會したのだ。

ミュンヘンの町々は、ナチスの本據としてハーゲン・クロイツ「鈎十字」の旗で埋められ蒿色のシャツに身を固めた人々が慌しく本部に出入する。

その前日、ゲーリングは、多忙な隙を、カリンの部屋へ戻つてきた。カリンは、このころ健康を損じて、じつと病床にあつたのだ。

『カリン、僕たちの仕事は澤山あるんだよ、だから今夜も遲くなるが、心配しないでくれ』

『えゝ、私、安心してゐますわ、じつと寢てゐなくちやならないにしても、私はいつも、ナチスの一員ですもの』

と健氣に答へた。

ゲーリングは病妻をいたはり乍ら、本部へ馳けつける。翌九日、ナチス突撃隊は歩武堂々と進行するのだつた。

ヒットラーは、ビェルゲルブロイの演壇に立つて絶叫した。

『今は、政府は崩壞し、國民共和國が布告されたのだ！』

こゝに一大クーデターが斷行されたのである。ヒットラーの背後には、決意の眉を張つたヘスとゲーリングが突立つてゐた。彼等の前の壇上にあつた政府黨のフォン・カールやフォンロッソーヴの顏色はさつと蒼ざめた。首相クニルリンクは、忽ち逮捕され、ルーテンドルフは顏色を失つて廊下に立ちつく

君。實行力に富み、國家のために犧牲となることを辭さない青年たちの力がほしいのだ』

『全くだ。いまドイツの青年は目的を失つて苦悶してゐる。彼等に、ドイツ救國の大方針を與へるべきだね』

『左樣、それで突擊隊（SA）を組織して、ナチス運動の中心にしたいと考へてゐる。君、この突擊隊の組織を引うけてくれないか』

『僕の身に餘る光榮だ。全力をつくしてこの大任をお引受けしやう』

『賴むぞ』

ヒットラーは、早くもゲーリングの旺盛な行動力と、精悍な實踐力を見拔いてゐた。この人こそ、青年突擊隊を育てるに最もふさわしい男と見込んだのである。

兇變！

一九二三年、ナチス黨は、次第に目ざめた國民の間に、これこそ、我々の父兄が戰場に流した血の神聖を償ひうるものと信じ、追々と味方になるものが增えてきた。

そこへ、バイエルン州と伯林政府との間にひどい軋轢を生じた。

ロッソーヴ將軍は、バイエルン國防軍が伯林政府に對して忠誠を宣誓したが、尙ほ政府は執拗に將軍の處分を要求したので、バイエルン州の政黨はこれに反對して赤色革命の兆しが見えた。

同時にザクセン州にも赤旗がひるがへり、チューリンゲンも不穩の色をみせ、今や北部諸州と南部諸州の間に鬪爭が目にみえて激化した。

巨大な體格の鳶色シャツの領袖が地に倒れた。次にヒットラーと腕を組んでゐた一人もバタリと地に伏した。

『ゲーリングがやられたッ』

『ショイブネル・リヒターがやられたッ』

忽ち街は大混亂に陷つた。

群衆は雪崩を打つてくづれはじめ、子供は押倒され、悲鳴、怒號、彈丸の咆り、——今やドイツ人がドイツ人の血を要求したのだ。

形勢は一轉した。

政府國防軍の、國民の心に對する裏切り、倒れた同志ゲーリングを助け起して、フォン・アッハ教授の病院へ擔ぎこむナチス黨と、それをかこむ群衆の同情に、街はもう名狀すべからざる混亂に陷つてしまつた。

ヒットラーは身を以て免れた。が、新に權力を擔つたフォン・カールは、今や警官と國防軍を動かして、ヒットラーとゲーリングの捕縛を命じた。

死の脫出

病めるカリンは、醫師の止めるのも押して夫の病床にかけつけた。

『まあ、ひどい傷！ ひどい出血！』

しかし彼女は氣丈夫に夫の看護につとめた。そのとき、同志の一人が慌しく駈け込んだ。

『すぐゲーリングを市外へ隱さねばならぬ逮捕の危險が迫つてゐます』

と、今は苦痛にうめくゲーリングを痛々しそうに眺め、また嗽きこむ病後のカリイを氣の毒さうに見ながら、同志の人々は、バヂャマ姿の上から毛皮外

してゐる。

會場を壓して湧き起る大衆の歡呼、誰れの口からとなく高唱されはじめた。「諸國に冠たるドイツ國」(ドイツチュランド、ユーバー・アッレス)の國歌に會場は湧き立つばかりであつた。

このナチス黨のクーデーターは、八分通り成功と見えた。電報は忽ち世界中に、このニュースをつたへた。

あくれば九日、空は重苦しい鉛色につゝまれてゐるが、夜半からの雪に白く化粧されたミュンヘンの町は、物々しい警官隊や政府國防軍が町々を固めはじめた。

昨夜のクーデーターにつゞいて、町々の群衆は、ハイルを叫び、ナチスの行進に歡呼しやうと戸外に出て立つてゐた。

ナチスの行進は、民衆の喜びと、國民的興奮を浴びつゝ、オデオン廣場へとさしかゝる。

そこには銃と機關銃を備へた國防軍の兵士たちが密集して整列し、巨大な裝甲自動車が、いつでも動き出せるやうに民衆を威壓してゐた。

『ドイツ民族の解放は今だぞ』

『ヒットラーだッ』

『ゲーリングがゐるッ』

群衆は、もう夢中になつて片手を高く差上げてハイルを叫んだ。

行進はデイナー通りの角に現れ、最先頭にヒットラーの姿がみえ、その側にルーデンドルフと、ゲーリングが並んでゐた。

このとき、タ、タ、タ……機關銃の一齊射撃が始つた。丁度フエルトバルンハーレの建物の角だ。

のであつた。

ヒツトラーはレツヒ河畔のランズベルゲ要塞に幽閉され、ルドルフ・ヘスやウェーバーらの同志も同じ捕はれの身だつた。

しかし若いゲーリングの肉體の力と、撓まぬ精神力は、さしもの重傷も次第に恢復してきたので、この國にナチス運動を植えつけやうとしたが、政府ゲーリンダ逮捕の目が光り、こゝも安住の地ではなかつた。

しかも、兇彈を浴びた肉體的創痍はまだすつかり健康をとり戻さなかつたので、

『イタリアへ行こう、そしてこの間に、もう少し勉強してみたい』

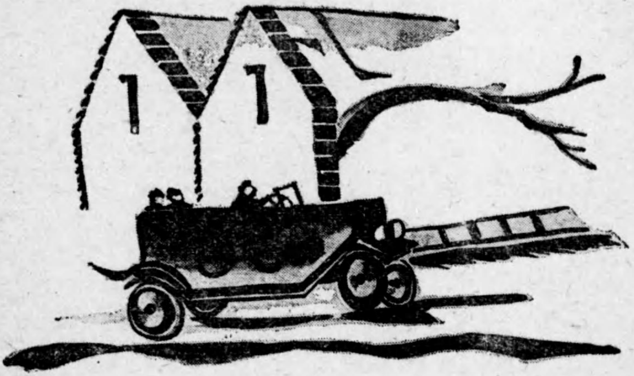
ゲーリングは、カリンを伴つてローマへ移つた。

佗しい亡命生活ではあつたが、優しいカリンの慰めと、燃ゆるやうな不屈の意志を以て、僅かに將來への光明をつないだ。

そこで、ゲーリングは、イタリアのファッシズムを研究し、政治經濟の研究に日を送つてゐた。

このころ、ヒツトラーは、今はちりぢりになつてゐるけれども、心から心へと強られてゐる不屈の意志の力を信じて、暗い監獄の窓の蔭で「我が鬪爭」を書き綴つてゐた。

ゲーリングは、イタリアにおけるムッソリーニの活動の成功と、新秩序を見て、祖國におけるインフレーションと飢餓の苦惱を一日も早く救ふ日を期待したのである。



套と、毛布にてくるんだ瀕死のゲーリングを擔ぎ出した。

カリンは、必要品だけを手提鞄に大いそぎでつめこみ、同志の携へた僞造旅券を持つて、動搖する自動車は一路國境へ走る。

ナチス黨のクーデター成立一歩前のいたましい破綻よ、しかしそれもやがて偉大なドイツ再建への棘の道だつたのだ。

重傷の身を病める妻と、僅かな同志に護られてオーストリアに逃れたゲーリングは、

『ヒットラーは逮捕された』

『ナチス黨は解體されるだらう』

と不吉な報告を、灼けつくやうな苦痛を以て聞かねばならなかつた。

全く、ヒットラーの愛國運動の將來は暗澹たるも

ねばならん』
『そう、行つていらつしやい、でも私は、この身體ではお伴出來ないのが悲しいですけれども』
カリンの心臟病は長い苦患と無理が祟つて、またぶり返してきたのだ。
彼女は夫の將來と祖國とを信じ、病氣も貧困をも苦にしなかつた。
たゞ、ゲーリングが出發してしまふと、支へる力を失つたやうに、ぐつたりと病床に倒れてしまはねばならなかつた。
ゲーリングは、再びミュンヘンへ行つて、ヒットラーと會つた。國内は到るところに自覺と愛國心とが大きく呼吸してゐるのを感じた。
慌しく一年がすぎた。
戰線の舊友ロェルツエルが、ゲーリングと同志となつて戰ふことを約束し、ナチス運動は次第に同情者が增えて行つた。
その年もくれて新らしい春がきたときへいくらか健康をとり戻したカリンは、とうとう夫のもとへ戻つてくることが出來た。
激しい政治運動に疲れたゲーリングにとつては、たとへ手狹いアパートの一室であつても、貧しい食事しかなくても、信じ愛するカリンと共に住みうることは、大きい歡びであり、力の泉ともなつた。
このころからナチスの鬪爭方針はヒットラーの提案によつて一變されたのである。
『もうクーデター一本槍の直接行動ぢや駄目だ。合法的に議會主義でやらねばならない』
『その通り、民衆の理解も進んできた。この五月の選擧に一奮鬪だぞ』

第二章 ナチスの勝利

議席獲得

『お前の實家へゆきたい。あすこで、ゆつくり時を待ちたいのだよ』
『そうですね、私だつて、この間そつとランズベルグへ行つて、でも、ヒットラーさんとも會ひましたが、ドイツを通過することは出來ませんものね』
ゲーリングと、カリンは、今は遠く隔てられたスエーデンの空を眺めて焦慮したが、一九二五年になつて、やつとストックホルムまで行くことが出來た。
もうこゝでは落人のやうに隱れ廻らなくても妻の知人らと、大つぴらに會つたり話し會つたりする事が出來た。
『とりあへず、俺の働き口を搜さなくちやならないよ』
とゲーリングは八方に奔走したが、まだ航空事業の發達してゐないこの國で勤め口はなかなか見つからなかつた。
そのうちに、ドイツ國民の自覺と募りゆくナチス精神の氾濫に對して、さしも政府は、抗することが出來なくなつてきた。
一九二六年秋、たうたう待ち構へてゐた特赦令が發布された。
『カリン！ 喜んでくれ。ヒットラーは釋放されたぞ、僕の逮捕令も取消されたぞ』
『まあ、とうとう眞理の勝つ日がきましたのねえ』
『うん、僕はすぐドイツへ行く、ヒットラーと會は

あくれば、一九三一年ドイツは、打ちつゞく混亂と紛糾と、聯合國の壓迫のために、遂に長いインフレーションは破綻して恐るべき金融恐慌が起つた。

銀行は相ついで倒れ、工業は沒落し、ドイツの經濟は破産に瀕した。

『いまこそ、ドイツを根本から立て直すべき秋だ』

ゲーリングの活躍振は特に目ざましかつた。七月の總選擧は、蓋をあけてみると大勝利たつた。

議席の過半數はナチス黨によつて占められ、ヒットラーは政治委員全權として伯林に留まり、黨を指揮してゐた。遂にナチスは、ドイツ救國の大任を負ふて立つ日を迎へたのだ。

カリンの死

ドイツ國民の窮乏は極に達してゐた。

『これを見給へ、なんと氣の毒ぢやないか』

ゲーリングは、犧牲となつた同志や、餓死せぬためにピストル自殺をとげた人々の名簿を机の上に擴げた。

『まあ若い飛行將校の方もあるぢやありませんか』

『うん、僕はすぐ電報を方々へ打つたよ「輕卒に行動するな、きつと助ける」とね。國民を再び繁榮に導くことは、我々ナチスの責任だよ』

語るヘルマンの眸は、愛國の至情に燃え聞き入るカリンの面は熱情に閃いた。

だが、彼女の心臟は刻々に弱りつゝあつた。その年の春、恐ろしい發作が起つて、殆ど死んだやうに失神してしまつた。

ヘルマンは、忙しい身體に拘らず、彼女の健康を深い愛情で看護し、六月下旬、シユレジアのアルト

ゲーリングは、ヒットラーの方針共鳴して、議席獲得のために、演說に、文書に、必死の奮鬪をつづけた。

一九二八年五月二十日！

この日の總選擧は、ナチスにとつて、關ケ原だつた。國家社會主義派と名づけられたナチス黨に、ヒットラー、ゲーリングを加へ、十六の議席を得たのである。

「キノフヘルマントウセンス」アナタノカリン

カリンは母に打電して喜びをつたへた。

ゲーリングは、ますます忙しくなつたが、暇さへ見出せば、病む妻の側にあつて慰め勵ますことを怠らなかつた。

『バーデン街に一軒家を見つけたよ、そこへ移らう、お前の好きな家具も買ふことにしたよ』

この新らしい家はナチス黨活動の中心となつた。ヒットラーや、ヘスはたへず訪れてきて、深更まで相談や打合せに時のすぐるのを忘れ、祖國の將來に希望の光を高めて行つた。

カリンも、いそいそと、自分で料理をしたり、萬端の世話をしたのである。

ナチス運動は日に日に熾烈を極め、民衆はヒットラーの雄辯に魅せられ、祖國の運命を信じて、ぐんぐん勢力を伸ばしてきた。

一九三〇年九月の選擧には、更にナチス黨は一擧に百七名の議員を議會へ送ることが出來て、ゲーリングは總統ヒットラーの代理をつとめた。

カリンは日に日に募つてくる心臟病と鬪ひつゝ、同志の世話をし、ゲーリングたちの會合の仕度をしその病氣を意志の中で克服して行つた。

車がドレスデンに入ると、そこにはヒットラーも迎へにきてゐて、同志は、休暇の樂しい一夕を過した。ヒットラーの姿をみつけた町の群集は、感激を以てハイルを絶叫してゐる。

カリンは、ファンニーにそつと囁いた。

『私たちがヒットラーの中に持つてゐるもの、全ドイツが見抜いたとき、始めてドイツのための新らしい時代が來るでせう』

かくして、二週間にわたる樂しい旅行と終ると、ゲーリングが再び鬪士として祖國のための激しい生活に戻つた。

ファンニイが、ストックホルムに歸つて母の病室に附き切つてゐたが、九月二十一日（一九三一年）フォック男夫人は安らかに愛する娘の看護をうけつつこの世を去つた。

この報がカリンの手許に屆いたとき、彼女の悲嘆は、再び彼女の肉體をさいなんだ。ヘルマン・ゲーリングは、醫師と共に、必死となつて彼女の生命を引きとめることに努めたのであつた。

また彼女の健康は、心細いものであつたが、ヒンデンブルグ大統領は、ヒットラーを招き重要な任務を與へやうとしてゐる。ゲーリングは直ちに出發せねばならぬ。

病みつかれたカリンは、

『行つていらつしやい。大切なことは、義務ですから――』と、彼女は至高な愛を以て答へた。

一九三一年（昭和六年）十二月十六日、カリンは安らかに病床に横つてゐた。

『今夜は身體の工合がよろしうムいますの、ヘルマンの偉大な任務のために、そして私に親切なヘルマ

ハイデ温泉へ連れて行つて數週間、安靜と愼重な看護をつゞけた。

カリンの健康はこの靜かな溫泉にゐるうち少しづつ持ち直してきた。

そしてこの冬以來、病床にゐる母このとを心配して「私を待つてゐるあらゆる義務を果しうるほど、この夏の終りにはよくなるつもりです」と手紙に書き送つた。

やがて六月の中頃のことであつた。

ヒットラーは、あの呪はしい兇變の日に失つた自動車の代りを、やつと贈呈しうる身分になつたからと言つてゲーリング夫妻に新式のメルセデス型自動車を贈つてきた。

『アドルフは、何と云ふ友情に富んだ方でせう。きつと私たちの喜びを十分察して下さつてゐますわ』

と、カリンは子供のやうに喜んだ。ちようどゲーリングは、二週間ばかり休暇を得たので、新らしい自動車で、カリンの長姉ファンニイを招待して、山嶽地方に樂しい旅行をする相談をした。

『まあ、何て素敵でせう。八月の山はどんなに美しいでせうね』

カリンは、夢見るやうな眸でその旅行に憧れた。思へば薄倖の彼女が、苦患多き生涯を飾る最後の樂しみだつたのだ。

『それまでに協議だの重要な手筈を片づけてしまふからね』

ゲーリングは、忙しい休暇前をすごして、八月二十六日、ゲーリングは、新らしいメルセデス車のハンドルを握り、カリンは淡灰色のマントに小さな野外帽を被つて、いそいそと彼の側に席をしめた。



榮に導くは、一にかゝつて、今日議員諸士の責任にあるぞ』

ヒットラーは大膽にも、政府彈劾の緊急動議を持ち出して採決を問ふた。

成否！　實にナチスの運命、祖國の運命はこの瞬時にある。

『國家革新には斷あるのみ！』

さつと起立した。片手が高く上つた。ハイル・ヒットラーの聲は高まる。

あくれば一九三三年一月三十日。この日こそ、近世史上に、ドイツの國を遂に抹殺し得なかつた民族の强味を書き殘した重要な日である。

ヒットラーは、首相の印綬を帶びて、ナチス政權は遂に確立した。

大統領たる舊元帥ヒンデンブルグの下に、舊伍長

ンのためにお祈りをいたしませう』
と側にゐた醫師や看護婦と話しつゞけた。が、祈りが終るころ、彼女は靜かに、安らかに、十七日の夜明けの來る少し前、永久に開かぬ眸を閉ぢたのであつた。

あゝ、貞節と信愛の限りを以て、偉大な夫と、祖國の運命を信じて彼女は、繁榮のドイツを見ることなくして逝つたのである。

遂に政權を握る

悲報によつてゲーリングが馳けつけたとき、カリンは花や燈明や祈禱に埋められて、エーデルウァイス禮拜堂の中にゐた。

誕生日に當る十一月二十一日、彼女の魂はロヴェ教會で靜かに葬儀が營まれた。百萬の敵にも毅然として敢闘の精神を失はぬゲーリングが、今や悄然たる一人の男性として愛妻の墓前に跪いた。

が、一歩、祖國に面するとき、ゲーリングの魂は奮然として諸惡を戰ひ倒すべく立ち上る。

國會は開かれた。

ヒットラーは絕叫した。

『ドイツを救へ。

ヴェルサイュの鐵鎖を自ら切る力を養へ！』

と。國民は熱狂して國家社會黨に拍手を送つた。

一九三二年八月、ドイツ國會は遂に人望と輿論に抗しかねて、ヒットラーは議長に選ばれた。

曾つては、流血を以て政府を斃さうとして自ら縛しめについたその人は、今や法の保護下にあつて議長席に坐つたのである。

『窮乏と困苦のドイツ國民を救ひ、幾萬の子孫を繁

の出身者を特に嚴格に訓練して、尚ほベルリン市内外に根強く殘る共産主義者を根こそぎに檢擧したのである。



更にこのヴィッケ中隊を次第に改組して、七月には國家警察中隊として、ナチス・ドイツの國家警察單一體に合併發展するに至つた。

ヒットラーは、世界の大勢を、靜かに注視した。

そこには勝利の後、航空の發展に力を緩めてゐない英佛の強大な翼がドイツに威壓を加へてゐる。新興ロシアすら、營々として赤衞空軍の翼を鍛へてゐる。然るにドイツはどうだ。

國家は疲弊し、聯合國の監視は嚴しく、航空の復興は絶望ではないかとさへ見られる。

『しかし』

ゲーリングは、遙かロエンの丘から音もなく飛ぶグライダーのあることを知つてゐる。ナチス少年が模型飛行機の製作に熱中してゐることをも見た。

『若い國民の血液には、科學的な力が潛んでゐる。絶望することはない』

ドイツ航空は必ず再建しうることを確信した。

ヒットラーが首相になつたのだ。

ゲーリングは、この新内閣の無任所相となり、ここに生れ出づるドイツの最も多忙な年を迎へたのである。

四月になると、ゲーリングは、プロシア州首相兼内相となつた。

『カイゼルは、ドイツの將來は海上にありと言つたね、しかし僕はドイツの將來は航空にありと云ふ。君、一つこの慘めなドイツの航空を再建してくれないか』

『よろしい、それこそ僕の課せられた最大の仕事だよ。やつてみるぞ』

ヒットラーと、相許す胸中には、早くも世界制空の夢が固く結ばれた。

五月の若葉が薫るころ、ゲーリングは、航空大臣に任命された。

航空省を復興して、戰後壞滅し去つた空軍を再建することこそ、最も生甲斐ある仕事であり、ゲーリングの念願であつた。

たとへ、それがいかに困難であり、聯合國の目が光つてゐやうとも、必ずやり拔かねばならぬ仕事なのだ。

十月になると、大尉ゲーリングは、一躍して、新ナチス・ドイツの陸軍大將に任ぜられた。

プロシャ首相としてのゲーリングは、まづ第一の着手として、ヴイッケ警察隊を編成にかゝつた。時に同年五月二十三日だつた。

この警察隊は、司令部、常備警察隊三ケ、自動自轉隊一、通信隊二、特殊車輛隊二を以て組織し、將校六名、警察官五十餘名より成り、盡くナチス黨

第三篇　空軍再建へ

第一章　航空大臣ゲーリング

すべては空へ

歐洲大戰の終つたとき、五ヶ年にわたつて一萬七千名の鳥人を祖國の名譽に捧げた赫々たる戰蹟に拘らず、國內からの崩壞のために、ドイツ空軍は全く潰滅し去つた。

聯合軍は、一萬四千臺の飛行機と二萬七千臺の發動機その他飛行船、格納庫の一切を破壞したが、しかしながら、リヒトフォヘンやベルグの精神は遂に抹殺し得なかつた。

敗戰國ドイツを襲ふ無力と無權力の中にあつて、この精神は尙ほ生き殘つて、ゲーリングの意志は、いま再建空軍へ向つて邁進するのだ。

しかし、悲しいかな、ナチス政權獲得の日、國防軍の持つてゐた新式飛行機は僅か十二臺であつた。

ルフト・ハンザの旅客機は、しきりに歐洲の空に快翔したが、それさへ「空の運轉手」として蔑まれてゐた。

グライダーの父、ゲオルギー博士など、ドイツの空を憂ふる人々が、航空國防を叫んでも、長い間政府の無力は、どうすることも出來なかつた。

『しかし、航空力を再建せねばならない』

ゲーリングは決心した。

『これは並々ならぬ努力だよ、全く無から有を產み

こゝにゲーリングの精神力的な、不屈不撓の魂が
揺り動かされたのである。



集中した。

輕飛行機の競技や競争が盛んに行はれた。長い間國內で飛行機建造を禁止されてゐた間、技術の低下と絶滅を避けて、ドルニエ會社はイタリアに、ユンカース會社はロシアに或はオランダ、日本、デンマークに赴いて飛行機の設計製作の向上に腕を練つてゐた技術者たちは、續々と引上げて、ドイツへ戻つてきた。

大型新式の旅客機が製造された。工場はいつでも軍用機を大量生産しうるやうに祕かに設備が進められた。

發動機工場も、機體工場も、ここに組織化されたのである。

必要が起つたら、商業機は、すぐ軍用に轉換しうるやうな周到な準備も進められる。

出すのに等しいからね』

親友のロエルツエルが訪ねてきて、その對策を練つた。

『勿論その覺悟はしてゐるよ。だがナチス運動の長い間の苦勞を思へばやれぬことはないと信じるよ』

『そりやそうだ。君の不屈の精神と、どんな障碍も乘りこす勇氣で、十分やつてゆけるだらう』

ロエルツエルも勵ました。しかし、ゲーリングとしては、航空再興こそ、彼の政治的生命を左右する一大試金石なのだ。もしこれに失敗したら、再び彼は立つことが出來なくならう。

いや、ドイツ民族の失望は更に大きくなり、困憊は増すだらう。

まづ、條約の許してゐる範圍で徐々に實力を整へねばならぬ。ゲーリングは、將來のドイツを脊負つて立つべき青少年に呼びかけた。

すべてを擧げて空へ！

小國民には模型飛行機を教へた。青年たちにはグライダーの技術を與へた。しかもそれは單なる飛行機の關心や興味だけではない。

技術と共に精神を、リヒトフオヘン以來の傳統を青少年の心に復活させるのである。

激しい訓練、嚴重な教育、しかも明朗な空を飛ぶ喜び、潑溂として、再建をいそぐドイツ國のナチス精神と相俟つて、

『ドイツは航空力を再び持たう』とする信念が燃え上つた。

ルフト・ハンザの航空輸送は、日一日と航空路を伸ばし、操縱者のあらゆる天候下に、飛行機を操縱する技術を習得して、歐洲の航空路は、ベルリンに

この日を、永久に記念して、今尚ほドイツ空軍記念日としてゐる

時はよし。



ドイツの創痍癒えたり。ヒットラーは、三月十四日、世界に向つて爆弾宣言を投げつけたのである。

『我等は屈辱と不名譽の鐵鎖たるヴェルサイユ條約を破棄する。我々は新らしき翼を再建するのだ』と空軍再建を宣した。

偷安の夢を貪るイギリス、フランスの驚愕は大したものであつた。

だが、今やドイツ空軍はこゝに復活した。

『思へば、世界大戦の光輝ある歴史と、傳統を誇るドイツ空軍はこゝに復活した。ドイツの誇る不滅の英雄リヒトフオヘンの精神は、同戦隊最後の指揮者たるヘルマン・ゲーリングの強固なる意志によつて十五年の祖國窮乏の間、あらゆる艱難より守り通され、苦心慘憺たる二年間の建設の努力によつて、今日この盛儀を見たことは、國民と共に余の最も欣快

兵器、武備の保有を禁止されてゐるので、極めて祕密のうちに、國防軍と警察隊とによつて、航空武力が貯へられてゐた。

ゲーリングは、二年間、寢食を忘れてその準備につとめたのである。

ナチス政權獲得以來、二ケ年にわたるゲーリングの、空軍再建の努力は、遂に實を結ぶことが近づいてゐる。

世界の人々は、ドイツが敗戰十年にして國力を恢復し、航空輸送の發展ぶりについて驚嘆した。

『さすがドイツの科學的國民だ。ユンカースや、ドルニエーの如き有名な飛行機製作者がゐて、どの國にも劣らぬいゝ飛行機を製造してゐる』

と、そのレコード飛行や、花々しい航空路を見て感心したのである。

しかし、その底にかくれてゐる空軍再建の姿まで何人も洞察し得なかつた。

空軍再建宣言

時は今。

勝ち傲れる英佛が、厖大な空軍を有しながら、何處かに心の緩みをみせ、その進歩が漸く緩漫となつてきた一九三五年の春になつて、遂に養ひ來つた實力をみせる日が來た。

一九三五年（昭和十年）三月一日――新らしく建設された空軍の精鋭は、堂々たる鵬翼をつらねて、狂喜する國民の頭上に現れた。

國民は歡呼し、十五年間、一振りの武力さへ持たなかつたドイツが、遂に持つことの出來た新らしい威力に、感激の涙を以てふり仰いだ。

チュ少將、補給部局長トルストリング大佐、兵員部長グライム少將、中央部局長ヴィッエンドフル中將と多士濟々たる陣容を整備した。

そして早くも、航空軍團三ケを東部（ベルリン）西部（ブラウンシユワイヒ）南部（ミユンヘン）東プロシヤ（ケーニヒスベルグ）に配し、ケッセルリング、フエルミイ、シユベルレエ大將を司令官としその他に海軍航空隊をキールに配し、こゝに空軍再建の陣容は全く成つたのである。

ゲーリングは、

『再興ドイツ空軍は、わが同志、わが先輩である前大戰の陣歿將士の傳統と、精神に生き拔かねばならぬ』

と訓辭を與へ、その部隊に今は亡き偉大な空軍の勇士の名を冠するとによつて、青年の意氣を鼓舞しやうとした。

まづ一九三五年、三月、空軍の第一戰闘隊をリヒトフオヘン中隊と命名し、營庭には、ありし日の大空の赤鬼と謳はれたリヒトフオヘンの愛機フオツカー三葉を曳出し、その前に誓つて祖國への忠誠の意を表はした。

『余は、リヒトフオヘン中隊が、尊き義務遂行の精神と功蹟の中に永遠に雄飛せんことを確信するものである』と臨場のヒットラー總統は祝辭をのべた。

一ケ月後には、ベルケ中隊とインメルマン中隊が生れた。

『これで、どうにか形丈けは空軍は出來たが、數の上から云つても、質から云つても、まだまだ英佛に見劣りがする』

ゲーリングは、空軍技術本部長ウーデット少將を

とするところである。本日を期してドイツ空軍は、陸海軍と並んで、ドイツ國防軍第三軍中に獨立した一軍たるものである』

とヒットラーは、ゲーリング航空大臣に感謝を表した。

つゞいて五月五日、總統令によつて、空軍最高司令官廳たる航空省が設立された。

ゲーリングは、この新進氣鋭の特別行政を、統率するために、世の官僚主義を一切排した。

『この新らしい仕事は、實力ある人々によつてなさるべきだ』

と、前大戦生殘りの勇士や、航空技術の權威を招いて、協力を求めた。

『諸君の國家的奉仕によつて、この大任を果したいと思ふのだ。若い人でも、身分のないものでも、有能で實行力に富んだものを、どしどし登用して腕を振はせてくれ給へ』

と型破りの訓辭を與へた。

『我は獻身的に航空の發達につとめませう。それには閣下、あなたの決斷力と、指導力が最も力強い中心となるのです』

と人々は答へた。

かくして、航空大臣兼空軍總司令官としてのヘルマン・ゲーリング國家元帥のもとに、ボーデン・シャツ少將が航空長官となり、ミルヒ大將が航空次官として職權執行に當つた。

空軍參謀長シュトウムプフ中將、空軍兵器長官リーデル少將、空軍總監キール中將が中心となり、民間航空局長官ヲイシュ長官が、空軍技術本部長にウツデット少將（大戦中の勇士）空軍行政課長にボガ

撃隊が献納した部隊とホルスト・ヴエッセル中隊の名を冠したと同様、偉大なる軍人の義務観念、犠牲の精神を、新進氣鋭の空軍につたへんとしたのであつた。

陣容は整ふ

新空軍は、ゲーリングの撓まない努力によつて、一路建設の道を辿りつゞけた。

ゲーリングが、勲章好きで、派手な軍服を身につけてゐるので、いろいろのゴシップがある。ひどいのになると、ある日ゲーリングが、とあるホテルに宿泊すると、ボーイが恭しく伺ひをたてた。

『閣下、お寢巻には、どの勲章をおつけ申しませうか』と。

――勿論、これは作り話にすぎない。しかし、ゲーリングは、いつでも頑丈な廣い胸一ぱいに、勲章を飾りたて、コバルト色の裏の廣い襟に、眞赤のリボンのついた綬をかけ、漆黑の長靴をうがち、颯爽たるいで立ちで登場する。

ゲーリングは、果して伊達男のやうに派手好みなのだらうか。

『空軍には、陸海軍のやうに歴史がない。青年たちは、やはり光榮の歴史を有する軍隊に入りたがるのだ。そこで、空軍に魅力を持たせるためには、特別の服装をさせて、衆目を集めなければならぬ』

との持論から、とくに空軍の制服は派手やかに作つたのであると云ふ。

だから、ゲーリング聯隊と俗に呼ばれてゐる國家警察隊は、一九三五年九月十一日、空軍の麾下に配屬され、ウエーバー空軍参謀長の檢閲をうけると、

招いて協議した。ウーデットもまた大戰當時の古猛者であり、ドイツの苦患に日々各國を放浪してあらゆる辛慘を嘗めてきた人である。

『それは、致し方がないよ。爆撃機の方は、旅客機の研究をつゞけてゐたからすぐに轉用できるが、戰鬪機は、十五年間、全く無一文だつた人だからな』

『しかし、ヘンシエル複葉では少し舊式すぎはしまいか』

『いや、ゲーリング君、安心したまへ、僕の方で、メッサーシュミットとハインケルの各工場に試作を命じてゐる。今に英佛がアッと驚くものが出來上るぞ』

『よろしく頼むよ。そして、すぐ量的生産に入りうるやう準備してくれ給へよ』

昔の舊友に戻つて、胸襟を開いて語り合つた大戰時代の舊友は、こゝに互にその技術と、政治を信じ合つた。

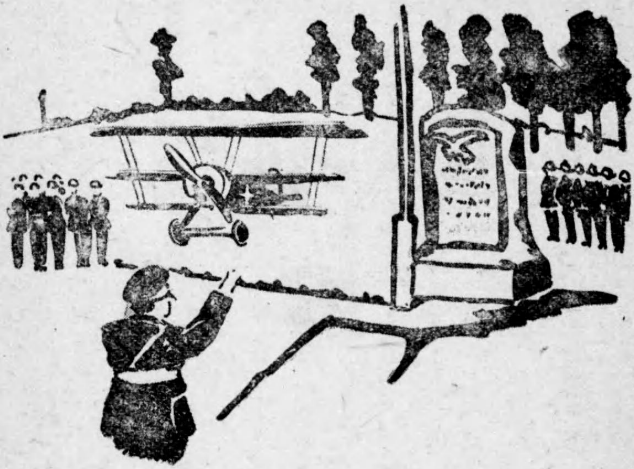
『それにしても、ゲーリング君、大量生産に第一に着目するのは參つたよ。玄人だな』

『そりや君と共に戰場で鍛へた人だからね』

と頼しげに笑つた。

かくして、ドイツの航空技術は、航空工業は、操縦技術は、十五年間、堪へに堪へ、抑へに抑へた力を、こゝぞと發揮して、奔流の決する如く躍進をつづけた。

一九三六年になると續々として新鋭機が生れた。四月二十日總統ヒットラーの誕生日を祝つて、キッフホイザ在郷軍人團から、新鋭爆撃隊が献納され、ヒンデンブルグ中隊と命名された。これは前年、突



ある日――

廣いホールにマットが敷きつめられ、そこへは、白い柔道着を着用した脊の低い日本人が數名坐つてゐた。

ヒットラー以下ずらりと並んで、日本のみの持つ特技「柔術」の妙技に固唾を呑んでゐるのだつた。

『成るほど、大したものだ』

ヒットラーとヘスは、次々に演じ出される演技の一つ一つに感嘆の聲を放つてゐたが、ゲーリングの眸は灼きつくやうに、投げの手を、じつと見つめてゐた。

肩越しに、また腰車にかゝつて、あはや投げ出されたと思つた途端に日本の柔術の選手は、彈かれたやうに、ヒラリと立つのだ。

物凄い勢で、叩きつけられたと思つたのに輕るく

航空本部の防備、對地攻撃への防禦の新任務を授けられた部隊にも、白地襟章と腕袖に緑の部隊名章をつけさせた。

そこへ、新らしい空中戰技が生み出された。それは、ソヴエイト聯邦で發祥した落下傘部隊である。

ゲーリングは、この新らしい戰技こそ、必ず將來活用されるべきだと看破した。けれども、ソ聯の大掛りなキエフにおける落下傘部隊の敵地占領の實演を見た列國の觀戰武官は、

『演習だらいゝが、實際役に立つかね』

『フワリ〳〵と漂つてゐるところを、ポンポンやられたら全滅だね』

『第一、こんな危險極る挺進隊の兵士を澤山持ちうるだらうか』

と半信半疑だつた。

ゲーリングは、ひそかに考へた。

『ドイツ青年ならば必ずやりうる。それには基礎の訓練が問題だ』

空軍參謀長ウェーバー中將と、祕かに落下傘兵の養成について協議をとげたのであるが、殘念なことには、一九三六年ウェーバー中將は、飛行機事故で逝去してしまつた。

『あゝ惜しい人を失つた。空軍建設の途上になくてはならぬ人だつたのに。自分は中將の倦きない努力強固な意志にどんなに勵まされてゐたことか――』

と聲をあげて慟哭し、第二五五戰鬪機中隊を、ウェーバー部隊と命名して、その偉功を偲んだ。

そして、落下傘部隊の訓練には、故將軍の意志をついで、嚴重な祕密のうちに準備が着々進められてゐたのである。

た。

航空界の異彩として、ドイツのゲーリングと並び稱されたフランスの航空大臣は、航空工業の國有化を企て、多數の新型機の試作主義をとることに全力を注いでゐたのを、ゲーリングは、靜かに觀察してゐた。

『フランス人の天才的な技術は尊敬していゝよ、しかし、いかに優秀なものが出來ても、數の少い試作機があつても使ひものにはなるまい。それにあの樣な國内の左翼政黨が政爭の具に供してゐるやうぢや、とても駄目だ』

と、彼は、往年の强敵フランスの空軍が今や恐るに足らずと看破した。

むしろ、アメリカのやつてゐる大量生産にじつと觀察の目を向けた。ドルニエやハインケルの技師たちをアメリカへ送らせた。

『アメリカの强大な工業力、完備した機械工作、あれをもつとドイツ風にして移し植えるのだ』

と、ゲーリングは、飛行機製造業を督勵し、規格の統一、材料の互換性などの細い點まで流石彼は飛行家出身だけあつて、急所をついた指導をやつた。

製造工場を、空襲から守るために分散して、巧みに森林などによつて僞裝し、工場内を健康に、明るくして、どの工場に入つても、働く人々は、職業のためと云ふのでなく、國家へ奉仕してゐる觀念で生き生きと働きうるやうにした。

工場内では、流水作業と稱する一定時間に一作業づゝ順々に行はれて行つて、合理的な勞働力によつて、多數の飛行機が、數列になつて、次第に組立てられ完成されてゆく方法が採用されはじめた。

體を泳せて、マットの上に横はる。

『うーむ』

ゲーリングは、日本人のみの持つ素ばらしい技術の、柔軟な、しかも手強さに醉つてしまつた。

次の日から、日本の柔術家は、軍隊に留まつて、少しづゝ手ほどきを始めた。

『ゲーリングの新らしもの好きにも程がある。柔術まで兵士に教へるのは、ちと奇を好むやうぢやな』

などと噂をする將軍連もゐた。

が、ゲーリングは、友邦の持つ武道のうちから何を學ばんとしたのであらうか。

數年後、落下傘學校が設立されたとき、天井から吊したパラシュートの縛帶を外して飛下りる練習が行はれた。

マットをしきつめた床の上で、轉んでは起き、起きて走るのだ。

このとき、どんなに投げ出されても、體を傷けないやうにせねばならぬ。それはあの日に、日本柔術より學び得たのであつた。

そして、世界大戰が始つて、白蘭戰線に落下傘部隊の偉大な成功を收めたのであつた。

空軍の勇士たちは、傳統に生き、祖國の再興に献身を誓ひ、青少年たちは、ナチス航空團に入つて、團長クリスチャンゼン大將の、赫々たる武勳を尊敬して、一日も早く成長して、祖國のために役立つものとならうとした。

ドイツの國力は、經濟方面も、體力の方面にも、これが廿年前の戰敗國かと思はれるほど隆々として湧き上つてきたのである。

ゲーリングは、また、ドイツの航空工業に力を注い

叫んで蹶起した。

ドン・フランコ將軍は、四萬の軍を率ひて、進出した。

革命軍の勢力破竹の如く、僅か八十臺の飛行機ながら健氣に活躍して、よく政府軍を壓迫した。

しかしフランコ將軍の指導精神は、ナチス・ドイツ、ファッショ・イタリアに共鳴して、

『フランコを助けよ、スペインを救へ』

の叫びが高まつた。

ナチス空軍の勇士は、今こそ實踐に腕を試す好機會と、喜び勇んで義勇軍を編成した。イタリアも同じく救援に立ち、ドイツから、ユンカース八八型急降下爆撃機と、メッサーシュミット一〇九型戰鬪機が多數スペイン革命軍に配せられた。

一方政府軍を、同じ人民戰線派のフランス、ソヴエイトは、共に進んで援助に乗り出し、イギリスもまた飛行機や飛行士を公然と送りこんだ。

ゲーリングは、

『この事變こそ、名はスペイン内亂であるが、事實は英佛ソ聯との力合せである。同時にわが戰鬪機、爆撃機の實力を試す機會だぞ』

と出征の勇士を激勵した。

彼等義勇兵の一團は「コンドル部隊」と、命名され、革命軍を助けて至るところにソ聯のイ—十五、十六型、フランスのニュポール機を叩き伏せた。

戰況は、日一日とフランコ軍に有利となり、遂にマドリッドの政府軍本據を包圍するに至つた。

スペイン内亂の第二年目、ドイツは歐洲の現狀を打破し、新秩序の建設に乗り出した。

ヒットラーは、敢然起つてオーストリアの併合を

『多數の飛行機を持つこと、多數の飛行士を養成することより外にはドイツの空を守る道はないのだ』

ゲーリングは絶叫した。

かくして、ドイツ空軍は、全く陣容を整へ、英佛はこの驚異的なドイツの再建ぶりに脅威を感じはじめた。

第四章　世界大戰へ

コンドル部隊

風腥さしモロッコの夏——何となく慌しい歐洲の天地はヴェルサイユの歪める平和によつて辛じて保たれた十五年の平和は、再び至るところに煙硝の燻る匂ひに充ちそめた。

伊太利のエチオピア遠征、ベルリン、ローマ樞軸の繋結、これに對する舊秩序を喘ぎ保たうとする英佛の勢力、そこには當然、いつか相衝突せねばならぬ運命が近づいてゐたのである。

果せるかなモロッコの一角に戰火はぱつと燃え上つた。

時に昭和十一年七月十三日、スペイン王黨派カルヴォッテロが暗殺され、つゞいて共産黨代議士アステイリオが射殺されたので、こゝに王黨と共産黨との對立は表面化して、國内の人民戰線派の政府は、國家派の軍隊とは日に日に對立を激化してきた。

そして同十七日、遂にモロッコのメリラ港にあつたエリテラ中佐は、革命を宣言し、バルセロナ、ゴルゴス、サンセバスチン、マラガに駐屯する軍隊は『スペインを淨化せよ、民族を左翼より救へ！』と

は面會日と定められた日の朝の僅かな時間には、あらゆる方面の人々がつめかけてゐる。

『閣下は實に多忙のやうですな』

『何しろ、今日の國際情勢では大へんですな。私はもう二週間もこうやつて來てゐますが、どうも御面會の機會がないんです』

『いや私も今日で五回目ですよ』

などと話してゐると、受付のところで、何かくどくど談じこんでゐる田舍ものらしい老爺がゐる。

『駄目だよ、爺さん、そんな事を云つたつて』

人々は退屈なまゝに、何事かと耳をそばだてる。

『そんな無情なことを言はつしやらないで、ちよつら、ヘルマンにそう云つてお吳れよ、わしなら會ふ筈だよ』

『駄目、駄目、見給へあんなに澤山の立派な方々でも閣下に御目にかゝるために何日も無駄足をふんで待つておられるんだ。閣下は非常に御多忙なのだ』

と受付子は苦笑しながら、ゲーリングに面會を求める見すぼらしい老爺を眺めた。人々も、何事かとその周圍に集つてきた。

受付では駄目と思つたのか、純朴な田舍もの丸出しの、かの老爺は、紳士たちを捕へてくどくどと語り始めた。

『何てこつた。わしを會はさないつて云ふんだよ、このお役人樣は』

『どうしたんだね、爺さん』

一人が面白半分に尋ねた。

『聞いてくらつせい、わしはゲーリングと約束があるんだよ。ヘルマンが怪我をして捕へられそうになつて逃げてゐたころ、わつしは、ヘルマンの奥さん、

宣してズデーデン地方を復歸させた。時に一九三八年、つゞいて一年後にはチエッコスロバキヤを保護



領とし、無血占領を完成したのは、一にヒットラーの外交手腕によるものであるが、ヒットラーも、その回顧錄にこう書いてゐる。

——わが友、ゲーリングの鐵の意志を以て建設された强大な空軍が、無言の壓力を示してくれたことが、この外交成功の基礎だつた——と。

偉なるかな。ドイツ空軍。

またヒットラーが、一九三八年二月、ドイツ最初の空軍元帥にゲーリングを任じたのも宜なるかなである。

一朝波蘭を撃滅

スペイン内亂を口火として、歐洲の危機はますます切迫してきた。

戰ひの前夜の息づまる緊張が日ごとにつゞいた。

ゲーリングは、目の廻るほど多忙であり、航空省へ

そして、今、自動車のステップに片足をかけた空軍元帥の正服いかめしいゲーリングの側まで一氣に馳けつけると、側近の人々が止めるより早く、

『ヘルマン、ヘルマン、偉くなつたなア』

と涙聲で飛びついてきた。

今は時めく航空大臣、空軍總司令官の名を呼び捨てにして飛びついた薄汚い老爺に、ゲーリングは、非常な驚きに打たれたが、

『おゝ、お前は、カール』

『ヘルマン、覺へてゐてくれたか、出世してうれしいぞ』

この奇異な會見は、居並ぶ人々を驚かすに十分だつた。

ゲーリングは、優しく老爺に接吻を與へながら、

『お前も健身で何よりだ。今僕はとても忙しくて、ゆつくり話できぬのが殘念だが』と側の武官を呼び手短く事情を話すと、十分老爺カールを、いたはつて手厚くもてなして歸らせるやうに命じた。

やがてゲーリングを乘せた自動車が門を出て角を曲るまで見送つてゐたカールは、

『あゝ嬉しい、嬉しい。あの立派な出世なさつた姿をみると、わつしやもう死んでもいゝだ』と涙にくれてゐた。

人間ヘルマン・ゲーリングの片鱗をみせて 走せ去つた空軍の巨將の行くてやいづこ、航空本部に到着すると、たゞちに全軍の動員を下命した。ユンカース急降下爆撃機は、この時すでに、全機五百五十臺、腹一杯の爆彈を抱いて、出動の命を待つてゐたのだ。

前線へ！ あくれば歴史的な曉がくる。

に頼まれて、食物を捜したり、毛布を買つてきたりしたもんだよ。そのときヘルマンは、僕が出世して天下をとつたらお前の欲しいものは何でもしてやると云つただ』

『すると、何かい、お前さんは、閣下に何か貰ひたいのかね』

すると老爺は、はげしく首を振つた。

『うんいや、そうぢやねえ、わつしは田舎に引つ込んでゐて何も世間のことは知んねえ、飛行機の大將にゲーリングつて偉い人がゐると聞いとつたが、まさかヘルマンつたあ、思つてなかつただよ。この間始めて、そのゲーリングつて大將が、ヘルマンだつて事を聞いただよ。わつしは、嬉しくて、嬉しくて一目會つてお祝ひを言やいゝんだよ』

とあくまで、朴訥な田舍人らしく、大きな包みを示しながら、

『ほれ、こんなに野菜のお土産を持つてきただよ』

とほゝゑむのだつた。

このとき、ベルが鳴りひゞいた。

受付の役人は、

『皆さん、折角乍らゲーリング閣下は、只今より外出せられます。本日の面會はこれで終了といたします』

と宣した。

みれば、中庭には立派な自動車が停り、綺羅を飾つた武官が立ち並んでゐる。人々はまた改めてと立上つたとき、窓ごしにこの光景を見うけた老爺は、

『あツ、ヘルマンだ、ヘルマンだ』と大聲でわめき乍ら、驚いて止める役人の手をふり切つて、階段をかけ下りた。

ダンチッヒ廻廊問題をめぐつて、ポーランド進撃は開始された。一九三九年九月一日の拂曉、スッツカ機は飛び上る。

ゲーリングの號令一下、全空軍はポーランドの各飛行場へ殺到して、地上にあつた三百餘のポーランド空軍は一瞬で撃滅された。

地上軍はこれに呼應して、怒濤の如く國境をこへて進入した。

英國の援助を空頼みにしてゐたポーランドは一日にして全空軍を失ひ、一週間で地上軍　殲滅され、十日にして全國土を失つた。世界は始めてドイツ空軍の實力を知り、そして第二次世界大戰の幕は切つて落された。

世界大戰へ

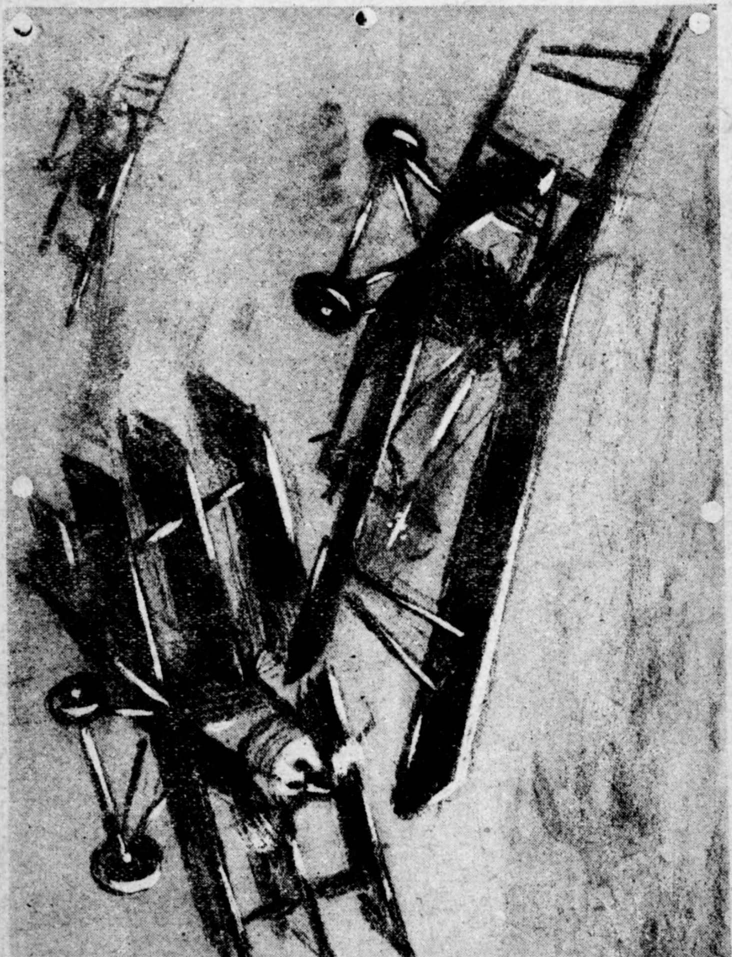
ポーランドを緒戰に撃滅したドイツは、こゝに宿敵イギリスの本土を狙つて、荒鷲の翼は、まづ北海に伸びた。

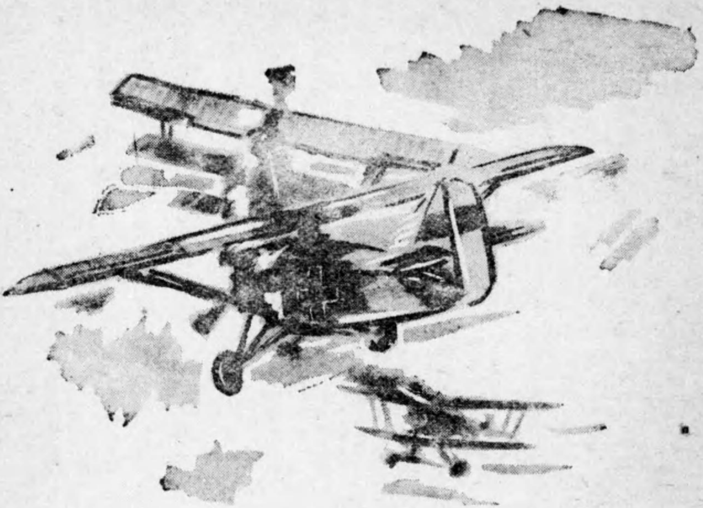
ゲーリングが過去廿五年、ドイツ青年に叩きこみ鍛へあげてきた祖國に殉ずる大精神は遺憾なく發揮された。

北海や英佛海峽に機首を轉じたドイツ空軍は、至るところに英國の艦船を撃沈し、主力艦隊を遠く北方の港に逼塞せしめるに至らしめた。護送船團は次から次へとドイツの荒鷲の好餌として消えた。

中にもドイツ空軍が、世界の耳目を驚かせ、空軍の威力を遺憾なく發揮させたのは、ノルウェイ作戰の電撃的進出であらう。

『制海權なしに渡洋遠征することは軍隊の自殺である』と言ゝ考へは、古今を通じて常識となつてゐた





と軍事批評家は筆を投げて感嘆したが、その方寸は、ゲーリングの胸中に、すでに長く養はれつゝあつたものである。そして、

『ハイル・ヒットラー』

を叫んで死に臨みうる青年を、一片のパラシウトに身を托して敵陣に降りうる青年を、こゝ十五年、二十年の間に、親友クリスチャンゼン大将と協力して何萬となく養成してきた其の底力が物を言つたのである。

そこには、リヒトフオヘンの精神、ベルケの眞髓が、脈々として波打ち、ドイツ青年の身の内に甦生してゐたのだ。

ノルウエイ占領と共に一九四〇年五月、矛を轉じて、西北作戦が始つた。

マヂノ・ラインに心醉し、二年間これさへあれば

のであるが、英國の大艦隊にくらべて僅か五分の一の海軍力しか持たぬドイツが、いかにして北海を制壓し、遙か洋上のノルゥエイに大軍を輸送したのであらうか。

そんな事は不可能だ――これは舊い觀念の軍事通の見方である。空軍の力さへあれば行ひうる――これがゲーリングと、彼の右腕とたのむミルヒ上級大將との間で祕かに組立てられた新らしい戰爭理念であつた。

メッサーシュミット一〇九戰鬪機と、ユンカース八八急降下爆擊機の大群が、英國艦隊の頭上に舞ひ下つて大打擊を與へ、ノルゥエイ海岸に居たたまらなくした。

『それッ、今だッ』

ユンカース「Ju五二型」「Ju九〇型」コンドル旅客機の大編隊が、五十、百、二百と天日を蓋ふ大群をなして出發した。

步兵の空中輸送だ。

落下傘部隊は勇猛果敢に敵地へ降下して飛行場を占領した。

十六名の落下傘部隊が、何千名のノルゥエイ軍を相手として全滅するまで戰つて、味方の步兵の到着まで持ちこたへた美談もある。

空中步兵が到着すれば、あとはドイツの思ふ儘である。ノルゥエイか、英軍は完全に追ひ拂はれてしまつた。

『空軍の力で海軍力を制壓しうる』と云ふ戰術上の新らしい境地を開いたのである。

『ミルヒ大將の作戰は、世界戰史を書き替へたものである』

のである。

沸き立つ戰線。

ドイツ空軍の偉大な戰果。

その年七月、ヒットラーは、多忙なゲーリングを招いて懇談した。

そして、大獨逸元帥の稱號を與へ、唯一人の大鐵十字勳章の佩用者となつた。

『次は、ロンドンだ』

その八月から、ロンドン大空襲が始つた。毎日、毎日、數百機の大編隊が立ち代り、入れ替つてロンドンを襲つた。

イギリスの敗色は日々濃厚となつて行つたころ、三度び軍を轉じたドイツは、バルカン作戰に乘り出した。

こゝでもイギリス軍はダンケルクの悲劇を再びして完全に敗退したが、その直後クレタ島の攻略は、實にゲーリングの獨斷で、空軍のみによつて完全に占領する偉功を奏したのであつた。

更に戰場は一轉して、一九四一年ソ聯を討つに至つた。進擊開始後二十日間で、戰線はぐつと東に張り出しモスクワへ、モスクワへと進出をつゞけた。

意外にソ聯の抵抗が頑强だつたのと、冬が來て、戰線は固定しモスクワは一九四一年中に陷落しなかつたが、數を誇るソ聯空軍を擊滅すること既に一萬をこへた。

今や大東亞戰爭が、遠く東の方、盟邦の力によつて起され、英米の勢力は太平洋印度洋から一掃されつゝあるとき、春來り獨ソ戰線、對英作戰に、ゲーリングの胸中必ずや大空軍を以て必勝の成算があるだらう。

安全と倘ほさめやらぬ偸安の夢を貪つてゐた英佛聯合軍は五月の朝、難攻不落と頼まれたリエーヂュ要塞の一角がもろくも、崩れ落ちたのに愕然とした。

ベルギー、オランダへ殺到した落下傘部隊は瞬く間に飛行場を占領し、橋梁を確保し、つゞいて侵入してくる空中輸送の歩兵隊や、機甲部隊の進軍を容易ならしめた。

リエーヂュ要塞の、爆彈にも破り得ぬベトンの上に、音もなく舞ひ下りた空中列車の一臺、二臺、大型グライダーから飛出した兵士は、手榴彈を、火焰噴射機を持つて、トーチカの裏側に迫つた。

十六名のドイツ挺身隊は、二千名の要塞兵を降伏させた。

科學の粹を集めて構築されたマヂノ・ラインは、科學の粹と魂の力とを持つドイツ兵のために、あへなく潰えた。

オランダ、ベルギーの要衝は次から次へと占據された。

長い間天才をたのみすぎ、理論の遊戯にすごしてきたフランス空軍は、その昔、世界の飛行機王國と謳はれた榮えもどこへやら、瞬くうちに精鋭なドイツ空軍の大量の攻撃をうけて全滅してしまつた。

制空權下に、フランダースの野に慘憺たる包圍殲滅戰が展開された。

巴里陷落！

ベルギー降伏！

ダンケルク引揚の英國軍殲滅さる。

ドイツ機甲部隊中欧を完全制壓す。この年の夏はフラッシュ・ライトのやうに、大きいニュースが次から次へ地球上の人々に、ドイツの勝利をつたへた

海峡を押して飛ぶユーカース八八型のガラス窓を越してみれば、精悍の氣宇、眉間に溢ふるゝゲーリングが、しつかとハンドルを握つてゐるのだ。

『ドイツの飛行士の中で、最も巧みな忠誠なる操縦士』と、國民が愛稱を捧げたときゲーゲリングは、

『有難う、わしはその呼び方が一等氣に入つたよ』

と、空軍總司令官、航空大臣、大獨逸元帥國防會議々長などの肩書よりも、この飛行士と呼ばれる方が彼にとつてはうれしかつたのだ。

『ドイツ國民よ、須らく飛行士たらざるべからず』

と常々叫んでゐる彼！　あらゆる辛慘を嘗めつくして、大ドイツ空軍を再建した彼にとつて『航空』は生命であり『空』は故郷であつたのだ。

かのクレタ島攻略に當つて、

『そりやゲーリング君、いかに空軍を重視したとしても、飛行機だけで占領するのは少し難しいと思ふよ』

と參謀本部あたりでも、彼の大膽奔放な作戰に疑ひを持つた。しかし彼は、

『いや、必ず成功しうるよ、もし失敗したら第二段として陸兵を使ふことにして貰ひたい』

と飽くまで、獨自の作戰を支持した。

かねて、ゲーリングの委囑をうけて國内の飛行機工場で作られてゐた大型輸送用グライダーを祕かに整備した。

クレタ島の眞只中、守備の英軍は、ドイツ快速艇の攻撃と、落下傘部隊とに備へてゐたのであるが、突として夜半、音もなく空を滑つて着陸した大型グライダーは、一臺、二臺、五臺、十臺と陸續として島内中央に着陸した。

『彼はシーザー型の英雄である』と評した『西洋の沒落』の著者シュペングラーの人物觀は果して當つてゐるであらうか。

一世の風雲兒ヘルマン・ゲーリング！　年齒未だ四十九歳の男盛り、彼の强味は、自ら空軍の一飛行士としての振出し以來、生粹の航空畑に育つた經驗が、彼の實行力と計畫力を支へることだ。

それ故に若い飛行士、機關士の氣持ちとぴつたりする。ドイツ大空軍は、この人のためにと思ひ込んでゐるのだ。

ドイツ空軍は、ゲーリングを親分とする一團となつて呼吸し、生存してゐるのだ。

ゲーリング片影

對英空襲をたてつゞけに行つてゐた九月の朝、占據した北佛ノルマンデーの飛行基地へ現れたゲーリングは、

『我等は倫敦をわがナチスの麾下に征服すべきである。幾百の高射砲が砲門を開かうと、何千の防禦飛行機が飛び出してこやうと、わが鋼の翼は冴えに冴え、わが機銃は火を吐いて彼等の頭上に巨彈を浴びせるであらう。いざ進發せよ、今日この編隊は、自分が率ひる』

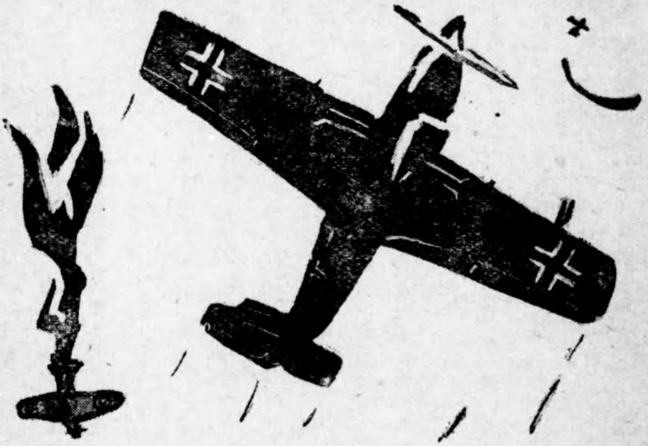
と獅子吼した。

『ハイル・ヒットラー』

『われらのゲーリング』

若い飛行將株は、熱狂して答へた。航空大臣空軍總司令官自ら操縦捍を握つて、空襲部隊の先頭に立つた。

どうして意氣の擧らざるを得やう。轟々ドーヴァア



部長グレゴア・シュトラッサの策動を完封してナチス一黨を泰山の安きにおかしめたのは、實にゲーリングの功名である。

その頃、シュトラッサは、國家社會主義在郷軍人會の首領として大きい勢力を持つてゐたので、ヒットラーも彼を厚く遇してゐたのであつた。

ヒットラーは、スターリンのやり口から、敎訓を摑み、資本家と妥協するのでなくては、當面のドイツ經濟の立直しは出來ぬと云ふ考へを抱いてゐた。

『ヒットラーは、資本家の走狗だよ、兄さん』

シュトラッセの弟オットー・シュトラッセは、バリ〱の左翼急進黨であるだけ鼻息が荒い。

『怪しからん話だよ、國家革命と云つても、資本閥と握手しちや、主義の墮落だよ、僕は自分の新聞で叩いてやつたよ』

と云つてもよい。

一九四一年、昨日の友は今日は敵として、ソヴエイトと戰場に相見えるに至つたとき、ヒットラーはこの戰線に自ら出征して指揮をとるにあたつて、

『余の身體に萬一のことあらば、ゲーリングに一切を委ねよ』

と語つて、戰場に赴いたと傳へられる。

思へば、一九二三年十一月九日のミュンヘン一揆に於て狙撃されて、重傷の身を愛妻カリンの心づくしによつてオーストリヤに逃れ、人目を憚る亡命暮しの間にも、捕れの身のヒットラーを信じ、カリンは人目をさけて屢々ヒットラーに面會し、夫の意中をつたへた。

その後、既に述べた如く合理的鬪爭時代に入つてからもナチスの基礎未だ固からざるころ、全國組織

『突撃!』

パラシュート部隊のやうに着陸後、集結に時間を要するのでなく、大型グライダーから飛出した部隊が見る見るクレタ島要塞の背後に迫つたのだ。

つゞいて、夜が明けると、機體の破損も考へず、大型輸送機が次から次へと着陸を強行した。瞬くうちに全島はドイツ兵に埋められ、英軍は又しても完敗を喫したのである。この報を受けるまで、まんじりともせず、司令部の大きい机の前に坐つてゐたゲーリングは、始めて莞爾と笑つた。

『よくやつたぞ、さすが青年たちだ』と心からこの新作戰を遂行したドイツ青年に感謝したのである。

ゲーリングのヒットラーに於ける關係は、イタリアにおけるムッソリーニと、故バルボ空相との關係に似てゐるが、それよりも、もつと緊密で一心同體

者も、家庭にあつては、よき夫であり、一人の愛する娘のよき父である。それのみでなく、糟糠の妻カリンの貞操を追慕して、スエーデンの故郷に眠る亡き愛妻の遺骸を、彼女が最後まで愛したドイツに移すこととした。

そして、ベルリンから遠く北方、ショルフハイトの森林——そこは昔プロシア王侯が狩獵地とした幽玄な、牧歌風な森につゝまれ、夢見るやうな童話的な湖があり、その畔りに聳へる丘の上に、カリン・ホールを建てゝ、亡妻の記念の場所とした。

純ドイツ風建物で、蘆の屋根に力強い木の幹を露はして壁につゝまれた北歐風の簡素な部屋は、げに深山薄雪草を愛したカリンの最後の安息所にふさわしい。

戰ひに疲れず、國策に倦まぬ精力的なヘルマン・ゲーリングが、そのいかめしい軍裝を脱いで、静かにカリンの墓所に額づくとき、この英雄の半生を彩る思ひ出が、彼の幅廣い胸中に浮み出るであらう。

默想と沈思——こゝに彼の魂は淨化され休息し、更に明日の世界新秩序に對する何物をも恐れず、信ずるところを敢行する一大勇猛心を湧き上らすのである。

と彼の經營する「ナチオナル・ゾチアリステン」を示した。

『うーん、相當辛辣な批評を加へてゐるね』

といゝ加減にあしらつてゐた。彼はヒットラーの恩誼を十分感じてゐたのである。

しかし、魔が差すと云ふのか、政權に焦慮したシユトラッスは、弟の言ひ次第に動かされるやうになつて、

『よし、この機會にヒットラーに代つてやらう』とシユライヘル將軍と結んで聯合內閣運動を始めたのである。

この有樣を眺めたのはゲーリングである。

『いかん、これはナチス運動の恐るべき內訌だ。兩頭政治が出來ては、ドイツ再興は難しい』

と、去就に迷ふ日和見的な黨員を叱咤して、遂に逆にシユトラッセ一派を孤立さした。かくて分裂騷ぎを未然に防ぎ、ナチスの危機を救つたのである。

かくしてゲーリングのナチスにおける位置は確立し、ヒットラーとは、何事も相許す間柄となつたのである。

ゲーリングが、この辛慘を嘗め、勞苦をつゞけてゐるとき、彼を內助し、彼を勵ましたカリンが、不幸にも、ナチス政權確立に先ち病死したことは、勇猛鬼をも挫ぐゲーリングにとつては、傷心の極みだつた。

その後長く獨身で、專ら國事に奔走し、空軍再建の陣だてに努力してゐたが、いよいよ空軍再建の宣言が發令された數週後、再婚したのである。

それはドイツ劇壇の名花と謳はれた女優エミイ、ゾンネマンであつて世界の英雄、歐洲制覇の翼の王

獨逸そらの巨人

(出文協承認 あ80036號)

合資會社 潮文閣

〔一五、〇〇〇〕

著者略歴

大正十三年慶應義塾大學卒業、大正十五年日本航空輸送研究所ニ入所。昭和九年堺水上飛行學校教官トナル。昭和十五年帝國飛行協會囑託トナル。

昭和十八年一月十日印刷
昭和十八年二月十五日發行

定價二圓

著者　中正夫（ナカマサヲ）
東京市小石川區小日向臺町一ノ四一

編輯者及發行者　高島政衞
東京市小石川區小日向臺町一ノ四一

發行所及發賣所　合資會社潮文閣
電話大塚(86)六二四八・六四三五
振替東京一七四四三番
會員番號一一七、五〇六番

印刷所　帝都印刷株式會社
代表者　長谷川隆士
東京市板橋區板橋町三ノ六四

配給元　日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九
東東二一三